

豊橋市埋蔵文化財調査報告書第20集

# 市道遺跡（Ⅰ）

牟呂土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書―市道地区―

1996年11月

豊橋市教育委員会  
牟呂地区遺跡調査会

豊橋市埋蔵文化財調査報告書第20集

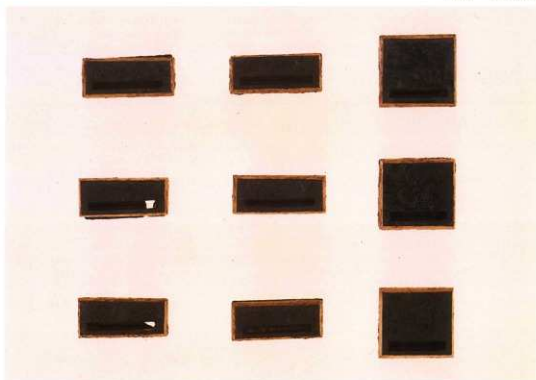
いちみち  
市道遺跡(Ⅰ)

牟呂土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書—市道地区—

1996年11月

豊橋市教育委員会  
牟呂地区遺跡調査会





1. 鍔帯金具



2. 鉄器



1. A型正六角形建物 (10次・西から)



2. A型正六角形建物 (36次・北から)



1. B型正六角形建物 (25次・北から)



2. 総柱建物群 (19次・東から)



1. 大型掘立柱建物 (SB-33・北から)



2. 大型掘立柱建物 (SB-29・南から)

## 例 言

1. 本書は愛知県豊橋市牟呂町市道160他において、牟呂土地区画整理事業に伴って事前に行われた埋蔵文化財発掘調査の報告書である。市道遺跡は昭和59年度から平成7年度までに、44次に及ぶ発掘調査が行われた。発掘調査ははまだ継続中であり、報告書は以下のように、3冊に分割して刊行する予定である。

市道遺跡（Ⅰ）：正倉・居館編・北側に広がる掘立柱建物群

市道遺跡（Ⅱ）：寺院編・南側の方1町の寺院址

市道遺跡（Ⅲ）：補遺・分析編・今後発掘予定の地点及びまとめ

各年度の発掘調査区については、第2章調査の経過で詳しく報告する。

2. 発掘調査は豊橋市から委託を受けた牟呂地区遺跡調査会が行い、豊橋市教育委員会が調査の指導に当たった。

3. 発掘作業及び整理作業については、地元の多くの方々のご協力を得た。また、報告書作成に当たり、遺構・遺物の実測・トレース等については、菅沼恭子、伊藤雅子、多田美香の援助を受けた。遺構写真は各地区の調査担当者が撮影し、遺物写真は賛元洋が撮影した。

4. 発掘調査から報告書作成において、以下の諸機関・諸氏からご教示・ご協力をいただいた。記して感謝の意を表するものである。

赤塚次郎（財団法人愛知県埋蔵文化財センター）、伊藤厚史（名古屋市見晴台考古資料館）、上原真人（京都大学）、尾野善裕（京都国立博物館）、北野博司（石川県教育委員会）、久野正博（浜北市教育委員会）、後藤健一（湖西市教育委員会）、斎藤孝正（文化庁）、柴垣勇夫（愛知県陶磁資料館）、城ヶ谷和弘（愛知県史編纂室）、鈴木隆司（新城市役所）、鈴木徹（小坂井町役場）、鈴木敏則（浜松市博物館）、立松彰（東海市教育委員会）、中川真文（財団法人愛知県埋蔵文化財センター）、中嶋郁夫（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所）、橋崎彰一（名古屋学院大学）、野末浩之（滑川市教育委員会）、林博道（滋賀県立大学）、林弘之（豊川市教育委員会）、原田幹（財団法人愛知県埋蔵文化財センター）、広岡公夫（富山大学）、藤澤良祐（財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター）、前田清彦（豊川市教育委員会）、三辻利一（奈良教育大学）、宮腰健司（愛知県埋蔵文化財センター）、宮本長二郎（東京国立文化財研究所）、山中敏史（奈良国立文化財研究所）、吉田秀則（滋賀県文化財保護協会）、和田晴吾（立命館大学）、和田実（豊橋市二川宿本陣資料館）、浜松市博物館（敬称略）

5. 本書の執筆と編集は賛元洋（豊橋市教育委員会文化振興課文化財係）が行った。

6. 調査区の座標は、建設省告示に定められた平面直角座標第Ⅶ系に準拠し、これを示した。



本書に使用した方位はこの座標に沿うものである。また、遺構・遺物の縮尺はそれぞれについて明示した。写真の縮尺は明示したもの以外は任意である。実測図版と写真図版の遺物番号は対応している。

7. 本調査にあたって製作した写真・カラースライド・実測図等の記録、出土遺物は豊橋市教育委員会において保管・管理している。

# 目 次

## 第1章 遺跡の立地と歴史的環境

- 1. 遺跡の立地……………1
- 2. 歴史的環境……………4

## 第2章 調査の経過

- 1. 調査の経過……………8
- 2. 調査の方法……………8

## 第3章 遺構

- 1. 掘立柱建物 (SB)
  - A. 正六角形建物……………16
  - B. 総柱建物……………17
  - C. 間仕切り建物……………18
  - D. 庇付建物……………19
  - E. 側柱建物……………29
- 2. 竪穴住居 (SB) ……20
- 3. 土城 (SK) ……21
- 4. 不明遺構 (SX) ……23
- 5. 溝 (SD) ……24
- 6. 井戸 (SE) ……24

## 第4章 遺物

- 1. 土器
  - A. 須恵器……………27
  - B. 灰釉陶器……………28
  - C. 緑釉陶器……………28
  - D. 中世陶器……………29
  - E. 陶磁器……………29
  - F. 土師器……………29
  - G. 土製品……………50
- 2. 金属器
  - A. 銅製品……………50
  - B. 鉄製品……………51

- 写真図版20-1 5次 SB-32 (南から) 2 5次 SB-63 (南から)
- 写真図版21-1 5次 SX-2 SK-89・90 (北から)  
2 5次 SX-2 断面-1 (東から)
- 写真図版22-1 5次 SX-2 断面-2 (東から)  
2 5次 SX-2 断面-3 (東から)
- 写真図版23-1 5次 SE-6 SK-89 完掘状況 (南から)  
2 5次 SE-6 断面 (東から)
- 写真図版24-1 5次 銚帯金具出土状況 (東から)  
2 5次 SX-2 須恵器 (1080・1126) 出土状況 (東から)
- 写真図版25-1 5次 SX-2 須恵器 (1084・1102) 出土状況 (東から)  
2 5次 SK-89 遺物出土状況 (南から)
- 写真図版26-1 5次 SK-90 遺物出土状況 (南から)  
2 5次 SK-90 下層焼土ブロック出土状況 (西から)
- 写真図版27 6次 全景 (北から)
- 写真図版28-1 5次 SK-118 遺物出土状況 (西から)  
2 5次 SK-118 遺物出土状況近景 (南から)
- 写真図版29-1 6次 SB-60・61・86・87 (北から)  
2 6次 SX-2 遺物出土状況 (南から)
- 写真図版30-1 6次 SX-2 完掘状況 (南から)  
2 6次 SX-2 断面 (南から)
- 写真図版31-1 6次 SX-2 D区遺物出土状況 (西から)  
2 6次 SX-2 B・D・H区遺物出土状況 (南から)
- 写真図版32-1 6次 SX-2 C・D区遺物出土状況 (西から)  
2 6次 SX-2 B・D区遺物出土状況 (南から)
- 写真図版33-1 6次 SX-2 E・F区遺物出土状況 (西から)  
2 6次 SX-2 F区2回目遺物出土状況 (西から)
- 写真図版34-1 6次 SK-63 遺物出土状況 (南東から)  
2 6次 SX-2 須恵器 (1115) 出土状況 (北から)
- 写真図版35-1 7次 全景 (北から) 2 7次 SB-33 (北から)
- 写真図版36-1 7次 SB-62 (北から)  
2 7次 SK-128 遺物出土状況 (西から)
- 写真図版37-1 7次 SK-134・136 遺物出土状況 (西から)  
2 7次 SK-122 (北から)
- 写真図版38-1 7次 SK-116・130 (南から)  
2 7次 SB-34 P-8 遺物出土状況 (西から)
- 写真図版39 9次 全景 (南から)

写真図版40-1	9次	SD-3 断面(南から)	2	9次	SE-8 (南から)
写真図版41-1	10次	全景(西から)	2	10次	SB-1 (西から)
写真図版42	10次	SB-1・19 (西から)			
写真図版43-1	10次	SB-131 (北から)	2	10次	SB-37・99 (西から)
写真図版44-1	10次	SB-1 P-2 遺物出土状況(南から)			
	2	10次	2	10次	SB-19 P-6 遺物出土状況(南から)
写真図版45-1	10次	SB-1 P-19 断面(南西から)			
	2	10次	2	10次	SB-1 P-15 断面(西から)
写真図版46-1	10次	SB-19 P-5 断面(北西から)			
	2	11次			全景(南から)
写真図版47-1	11次	南半全景(北から)	2	11次	SB-128 (北から)
写真図版48-1	13次	全景(北から)	2	13次	東半全景(北から)
写真図版49-1	13次	西半全景(北から)	2	13次	全景(南東から)
写真図版50	13次	SB-17 (北から)			
写真図版51	13次	SB-64 (北から)			
写真図版52-1	13次	SB-18 (西から)	2	13次	SB-18・80 (北から)
写真図版53-1	13次	SB-65・79 (北から)	2	13次	SB-78 (西から)
写真図版54	13次	SK-37 遺物出土状況(西から)			
写真図版55-1	13次	SK-39 遺物出土状況(南から)			
	2	13次	2	13次	SK-42 遺物出土状況(南から)
写真図版56-1	13次	SK-48 遺物出土状況(北から)			
	2	13次	2	13次	SK-41 遺物出土状況(西から)
写真図版57-1	14次	北半全景(西から)	2	14次	南半全景(西から)
写真図版58-1	14次	SB-70 (南から)	2	14次	SB-71 (南から)
写真図版59-1	14次	SB-72・73 (南西から)	2	14次	SB-75 (西から)
写真図版60-1	14次	SB-74 (南から)	2	14次	SB-76 (北から)
写真図版61-1	14次	SX-1 (南西から)	2	14次	SE-4 (南から)
写真図版62-1	14次	SE-5 (東から)	2	14次	SK-158 (南から)
写真図版63-1	14次	SK-155 遺物出土状況(南から)			
	2	14次	2	14次	SK-159 遺物出土状況(西から)
写真図版64-1	14次	SK-152 遺物出土状況(南から)			
	2	14次	2	14次	SK-160 遺物出土状況(北から)
写真図版65	15次	O-11~14区全景(北から)			
写真図版66-1	15次	P・Q-12~14区全景(西から)			
	2	15次			SB-55・56・90 (北から)
写真図版67-1	15次	SB-24 (西から)	2	15次	SB-25 (南から)

挿図26	1期遺構配置図(1/800)	81
挿図27	2期遺構配置図(1/800)	85
挿図28	3期遺構配置図(1/800)	87
挿図29	4期遺構配置図(1/800)	90
挿図30	5期遺構配置図(1/800)	91
挿図31	6期遺構配置図(1/800)	93
挿図32	7期遺構配置図(1/1,200)	95
挿図33	8期遺構配置図(1/1,200)	96
挿図34	9期遺構配置図(1/1,200)	97

## 挿表目次

挿表1	市道遺跡発掘調査区一覧表	10
挿表2	土器型式分類表-1	31
挿表3	土器型式分類表-2	33
挿表4	土器型式分類表-3	35
挿表5	土器型式分類表-4	37
挿表6	土器型式分類表-5	39
挿表7	土器型式分類表-6	41
挿表8	土器型式分類表-7	43
挿表9	土器型式分類表-8	45
挿表10	土器型式分類表-9	47
挿表11	土器型式分類表-10	49
挿表12	基準遺構別共伴型式一覧表	66
挿表13	出土土器主要型式別編年表	72
挿表14	遺構切り合い関係表-1	77
挿表15	遺構切り合い関係表-2	78
挿表16	時期別建物数一覧表	82
挿表17	規模別掘立柱建物数一覧表	82
挿表18	建物時期別棟数一覧表	99
挿表19	建物時期別割合一覧表	99

## 图版目次

- 第1图 发掘区平面图-1 (1/200)
- 第2图 发掘区平面图-2 (1/200)
- 第3图 发掘区平面图-3 (1/200)
- 第4图 发掘区平面图-4 (1/200)
- 第5图 发掘区平面图-5 (1/200)
- 第6图 发掘区平面图-6 (1/200)
- 第7图 发掘区平面图-7 (1/200)
- 第8图 发掘区平面图-8 (1/200)
- 第9图 发掘区平面图-9 (1/200)
- 第10图 发掘区平面图-10 (1/200)
- 第11图 发掘区平面图-11 (1/200)
- 第12图 发掘区平面图-12 (1/200)
- 第13图 发掘区平面图-13 (1/200)
- 第14图 发掘区平面图-14 (1/200)
- 第15图 发掘区平面图-15 (1/200)
- 第16图 发掘区平面图-16 (1/200)
- 第17图 掘立柱建物-1 (1/100)
- 第18图 掘立柱建物-2 (1/100)
- 第19图 掘立柱建物-3 (1/100)
- 第20图 掘立柱建物-4 (1/100)
- 第21图 掘立柱建物-5 (1/100)
- 第22图 掘立柱建物-6 (1/100)
- 第23图 掘立柱建物-7 (1/100)
- 第24图 掘立柱建物-8 (1/100)
- 第25图 掘立柱建物-9 (1/100)
- 第26图 掘立柱建物-10 (1/100)
- 第27图 掘立柱建物-11 (1/100)
- 第28图 掘立柱建物-12 (1/100)
- 第29图 掘立柱建物-13 (1/100)
- 第30图 掘立柱建物-14 (1/100)
- 第31图 掘立柱建物-15 (1/100)
- 第32图 掘立柱建物-16 (1/100)
- 第33图 掘立柱建物-17 (1/100)
- 第34图 掘立柱建物-18 (1/100)

- 第35图 掘立柱建物-19 (1/100)
- 第36图 掘立柱建物-20 (1/100)
- 第37图 掘立柱建物-21 (1/100)
- 第38图 掘立柱建物-22 (1/100)
- 第39图 掘立柱建物-23 (1/100)
- 第40图 掘立柱建物-24 (1/100)
- 第41图 掘立柱建物-25 (1/100)
- 第42图 掘立柱建物-26 (1/100)
- 第43图 掘立柱建物-27 (1/100)
- 第44图 掘立柱建物-28 (1/100)
- 第45图 掘立柱建物-29 (1/100)
- 第46图 掘立柱建物-30 (1/100)
- 第47图 掘立柱建物-31 (1/100)
- 第48图 掘立柱建物-32 (1/100)
- 第49图 掘立柱建物-33 (1/100)
- 第50图 掘立柱建物-34 (1/100)
- 第51图 掘立柱建物-35 (1/100)
- 第52图 掘立柱建物-36 (1/100)
- 第53图 掘立柱建物-37 (1/100)
- 第54图 掘立柱建物-38 (1/100)
- 第55图 掘立柱建物-39 (1/100)
- 第56图 掘立柱建物-40 (1/100)
- 第57图 掘立柱建物-41 (1/100)
- 第58图 掘立柱建物-42 (1/100)
- 第59图 掘立柱建物-43 (1/100)
- 第60图 掘立柱建物-44 (1/100)
- 第61图 掘立柱建物-45 (1/100)
- 第62图 掘立柱建物-46 (1/100)
- 第63图 掘立柱建物-47 (1/100)
- 第64图 竖穴住居-1 (1/50)
- 第65图 竖穴住居-2 (1/50)
- 第66图 井戸 (1/50)
- 第67图 不明遺構 (S X - 1) (1/50)
- 第68图 不明遺構 (S X - 2) - 1 (1/50)
- 第69图 不明遺構 (S X - 2) - 2 (1/50)
- 第70图 不明遺構 (S X - 2) - 3 (1/50)

- 第71図 出土遺物実測図-1 (1/3)
- 第72図 出土遺物実測図-2 (1/3)
- 第73図 出土遺物実測図-3 (1/3)
- 第74図 出土遺物実測図-4 (1/3・1/6)
- 第75図 出土遺物実測図-5 (1/3)
- 第76図 出土遺物実測図-6 (1/3)
- 第77図 出土遺物実測図-7 (1/3)
- 第78図 出土遺物実測図-8 (1/3)
- 第79図 出土遺物実測図-9 (1/3)
- 第80図 出土遺物実測図-10 (1/3)
- 第81図 出土遺物実測図-11 (1/3)
- 第82図 出土遺物実測図-12 (1/3)
- 第83図 出土遺物実測図-13 (1/3)
- 第84図 出土遺物実測図-14 (1/3)
- 第85図 出土遺物実測図-15 (1/3)
- 第86図 出土遺物実測図-16 (1/3)
- 第87図 出土遺物実測図-17 (1/3)
- 第88図 出土遺物実測図-18 (1/3・1/6)
- 第89図 出土遺物実測図-19 (1/3)
- 第90図 出土遺物実測図-20 (1/3・1/8)
- 第91図 出土遺物実測図-21 (1/3)
- 第92図 出土遺物実測図-22 (1/3)
- 第93図 出土遺物実測図-23 (1/3)
- 第94図 出土遺物実測図-24 (1/3)
- 第95図 出土遺物実測図-25 (1/3)
- 第96図 出土遺物実測図-26 (1/3)
- 第97図 出土遺物実測図-27 (1/3)
- 第98図 出土遺物実測図-28 (1/3)
- 第99図 出土遺物実測図-29 (1/3)
- 第100図 出土遺物実測図-30 (1/3)
- 第101図 出土遺物実測図-31 (1/6)
- 第102図 出土遺物実測図-32 (1/3)
- 第103図 出土遺物実測図-33 (1/3)
- 第104図 出土遺物実測図-34 (1/3)
- 第105図 出土遺物実測図-35 (1/3・1/6)
- 第106図 出土遺物実測図-36 (1/3)



- 第107图 出土遺物実測図 - 37 (1/3)
- 第108图 出土遺物実測図 - 38 (1/3)
- 第109图 出土遺物実測図 - 39 (1/3)
- 第110图 出土遺物実測図 - 40 (1/3)
- 第111图 出土遺物実測図 - 41 (1/3)
- 第112图 出土遺物実測図 - 42 (1/3)
- 第113图 出土遺物実測図 - 43 (1/3)
- 第114图 出土遺物実測図 - 44 (1/3)
- 第115图 出土遺物実測図 - 45 (1/3)
- 第116图 出土遺物実測図 - 46 (1/3)
- 第117图 出土遺物実測図 - 47 (1/3)
- 第118图 出土遺物実測図 - 48 (1/3)
- 第119图 出土遺物実測図 - 49 (1/3)
- 第120图 出土遺物実測図 - 50 (1/3)
- 第121图 出土遺物実測図 - 51 (1/3)
- 第122图 出土遺物実測図 - 52 (1/3)
- 第123图 出土遺物実測図 - 53 (1/3)
- 第124图 出土遺物実測図 - 54 (1/3)
- 第125图 出土遺物実測図 - 55 (1/3)
- 第126图 出土遺物実測図 - 56 (1/3)
- 第127图 出土遺物実測図 - 57 (1/3)
- 第128图 出土遺物実測図 - 58 (1/3)
- 第129图 出土遺物実測図 - 59 (1/3)
- 第130图 出土遺物実測図 - 60 (1/3)
- 第131图 出土遺物実測図 - 61 (1/3)
- 第132图 出土遺物実測図 - 62 (1/3 · 1/6)
- 第133图 出土遺物実測図 - 63 (1/3)
- 第134图 出土遺物実測図 - 64 (1/3)
- 第135图 出土遺物実測図 - 65 (1/3)
- 第136图 出土遺物実測図 - 66 (1/3)
- 第137图 出土遺物実測図 - 67 (1/3)
- 第138图 出土遺物実測図 - 68 (1/2)
- 第139图 出土遺物実測図 - 69 (1/2)
- 第140图 出土遺物実測図 - 70 (1/2)
- 第141图 出土遺物実測図 - 71 (1/2)

# 表 目 次

- 第1表 建物一覧表  
第2表 土城・井戸等一覧表  
第3表 出土土器観察表  
第4表 出土金属器観察表

## 写真図版目次

写真図版1-1	1次	Q~V-9区全景(西から)	2	1次	O~Q-9区全景(西から)
写真図版2-1	1次	Q-9区(南から)	2	1次	W~Z-9区全景(西から)
写真図版3	1次	SB-101~110(西から)			
写真図版4-1	1次	SB-34(西から)	2	1次	SB-34(北から)
写真図版5-1	1次	SB-63(西から)	2	1次	SB-134(東から)
写真図版6-1	1次	SB-134 遺物出土状況(西から)			
	2	1次 SB-134 P-16 須恵器(182)出土状況(南から)			
写真図版7	2次	O-14~22区全景(北から)			
写真図版8	2次	P~T-14区全景(西から)			
写真図版9-1	2次	S・T-14区全景(西から)	2	2次	N~P-14区全景(北から)
写真図版10-1	2次	M・N-14区全景(東から)	2	2次	J~L-14区全景(東から)
写真図版11-1	2次	SB-23A・B(南から)	2	2次	SB-47~49(東から)
写真図版12-1	2次	SB-50(西から)	2	2次	SB-47~49(西から)
	3	2次 SB-26・39(西から)			
写真図版13-1	2次	SB-40・41(東から)	2	2次	SB-10・11(西から)
写真図版14-1	2次	SB-10・11(東から)	2	2次	SB-42・95・96(東から)
写真図版15-1	2次	SB-6(北から)	2	2次	SB-22(南から)
写真図版16-1	2次	SB-137 遺物出土状況(南から)			
	2	2次 SB-137 発掘状況(南から)			
写真図版17-1	2次	SB-7 P-12、SB-137 切り合い断面(西から)			
	2	2次 SE-1(北から)			
写真図版18-1	3次	南端I・J-9・10区全景(南から)			
	2	3次 SK-1 遺物出土状況(南から)			
写真図版19	5次	全景(南から)			

3. その他の遺物	
A. 石器・石製品	53
B. 埴輪	53
C. 土師器高坏	53
4. 各遺構出土遺物	
A. 掘立柱建物（SB）出土遺物	53
B. 竪穴住居（SB）出土遺物	55
C. 溝（SD）出土遺物	55
D. 井戸（SE）出土遺物	55
E. 不明遺構（SX）出土遺物	55
F. 土壌（SK）出土遺物	57

## 第5章 まとめ

1. 土器の分類	
A. 土師器	65
B. 須恵器	67
C. 灰軸陶器	68
D. 中世陶器	69
E. 基準遺構での相関関係	70
2. 土器の編年	
A. 土器編年	70
B. 問題点	71
3. 時期区分の方法	
A. 遺跡全体の構成	73
B. 時期区分の決定	76
4. 各時期の遺構	
A. 1期	80
B. 2期	84
C. 3期	86
D. 4期	89
E. 5期	89
F. 6期	92
G. 7期	92
H. 8期	92
I. 9期	94

5. まとめ	
A. 古代	98
B. 中世	100
報告書抄録	目次末

## 挿図目次

挿図1	牟呂地区周辺地形復元図 (1/10,000)	2
挿図2	牟呂地区周辺地形図 (1/20,000—明治23年測量—)	3
挿図3	牟呂地区周辺遺跡分布図 (1/15,000)	5
挿図4	市道地区調査区配置図 (1/2,000)	9
挿図5	牟呂地区割図 (1/9,000)	12
挿図6	市道地区位置図 (1/2,500)	13
挿図7	緑釉陶器実測図 (1/3)	28
挿図8	土器型式分類図—1	30
挿図9	土器型式分類図—2	32
挿図10	土器型式分類図—3	34
挿図11	土器型式分類図—4	36
挿図12	土器型式分類図—5	38
挿図13	土器型式分類図—6	40
挿図14	土器型式分類図—7	42
挿図15	土器型式分類図—8	44
挿図16	土器型式分類図—9	46
挿図17	土器型式分類図—10	48
挿図18	石器・石製品実測図 (1/1・1/2)	52
挿図19	埴輪実測図 (1/3)	53
挿図20	各遺構遺物出土状況 (1/20)	54
挿図21	S X - 2 遺物出土状況 (1/100・1/40)	56
挿図22	S K - 109・121遺物出土状況 (1/40)	59
挿図23	S K - 120遺物出土状況 (1/40)	60
挿図24	S K - 118遺物出土状況 (1/20)	63
挿図25	市道遺跡全体図 (1/1,200)	74

写真図版68-1	15次	SB-27 (東から)	2	15次	SB-27 (南から)
写真図版69-1	15次	SB-29 (南から)	2	15次	SB-29 (西から)
写真図版70-1	15次	SB-28 (東から)	2	15次	SB-52 (北東から)
写真図版71-1	15次	SB-53 (南から)	2	15次	SB-54・91 (南から)
写真図版72-1	15次	SB-55 (北から)	2	15次	SB-56 (北から)
写真図版73-1	15次	SB-57 (東から)	2	15次	SB-58・59 (北から)
写真図版74-1	15次	SK-55 遺物出土状況 (北から)			
	2	15次	SK-67 遺物出土状況 (東から)		
写真図版75-1	15次	SK-69 遺物出土状況 (北から)			
	2	15次	SK-95 遺物出土状況 (南から)		
写真図版76-1	15次	SK-73 遺物出土状況 (南から)			
	2	15次	SK-64 遺物出土状況 (北から)		
	3	15次	SB-52 P-10 断面 (北から)		
	4	15次	SB-57 P-2 断面 (北から)		
	5	15次	SB-57 P-3 断面 (北から)		
	6	15次	SB-58 P-9 断面、SB-59 P-5 断面 (西から)		
写真図版77	16次	全景-1 (西から)			
写真図版78-1	16次	全景-2 (西から)	2	16次	全景-3 (南東から)
写真図版79-1	16次	SB-11・43・44・46 (南から)			
	2	16次	SB-43・44 (東から)		
写真図版80-1	16次	SB-46 (南から)			
	2	16次	SB-30・31・52・97・98 (南東から)		
写真図版81-1	16次	SB-42 (西から)	2	16次	SB-95 (南から)
写真図版82-1	16次	SB-11 (南から)			
	2	16次	SK-32 遺物出土状況 (南から)		
写真図版83-1	16次	SK-55遺物出土状況 (西から)			
	2	16次	SB-97 P-5根石 (西から)		
写真図版84-1	16次	SK-31 遺物出土状況-1 (西から)			
	2	16次	SK-31 遺物出土状況-2 (西から)		
写真図版85	19次	R-15区全景 SB-38・50 SK-124~127 (南から)			
写真図版86-1	19次	全景 (北から)	2	19次	全景 (東から)
写真図版87-1	19次	SB-5・6 (南から)	2	19次	SB-26・39 (東から)
写真図版88-1	19次	SB-4 (南から)			
	2	19次	SB-4 P-7・10・13 断面 (東から)		
写真図版89-1	19次	SB-136 (南東から)			
	2	19次	SB-6 P-15 鉄刀出土状況 (南から)		

写真図版90-1	19次	SK-79・87・88	遺物出土状況（北東から）		
	2	19次	SK-124~127	遺物出土状況（西から）	
写真図版91	20次	全景	（西から）		
写真図版92-1	20次	SB-123	（西から）	2	20次 SB-124（北東から）
写真図版93	23次	全景	（西から）		
写真図版94-1	23次	SB-15	（西から）	2	23次 SB-16（西から）
写真図版95-1	23次	SB-16	P-14	柱礎出土状況（北から）	
	2	23次	SB-15	P-8	須恵器甕（106）出土状況（南から）
写真図版96-1	23次	SB-15	P-1	断面（南から）	
	2	23次	SB-15	P-13	断面（南から）
	3	23次	SB-16	P-8	断面（南から）
	4	23次	SB-16	P-13	断面（北から）
	5	24次	全景	（南から）	
写真図版97-1	24次	SB-20	（北から）	2	24次 SB-21（西から）
写真図版98-1	24次	SK-141	（西から）	2	24次 SB-20 P-1（南から）
	3	24次	SB-20	P-11	（南から）
	4	24次	SB-21	P-3	（南から）
	5	24次	SB-21	P-4	（南から）
写真図版99-1	25次	全景	（北西から）	2	25次 東半全景（西から）
写真図版100-1	25次	SB-2	（北から）	2	25次 SB-12（西から）
写真図版101-1	25次	SB-13	（北から）	2	25次 SB-14（北から）
写真図版102-1	25次	SB-45	（西から）	2	25次 SE-7（南から）
写真図版103-1	29次	全景	（東から）		
	2	29次	SB-35・36、SK-120・121	（北西から）	
写真図版104-1	29次	SK-16	遺物出土状況（北から）		
	2	29次	SK-120	遺物出土状況（東から）	
写真図版105-1	29次	SK-120	焼土出土状況（南から）		
	2	29次	SK-121	遺物出土状況（西から）	
写真図版106-1	30次	全景	（南から）	2	30次 SB-3（南から）
写真図版107-1	30次	SB-7	（南から）	2	30次 SB-8（南から）
写真図版108-1	30次	SB-9	（南から）	2	30次 SB-10（南から）
写真図版109-1	30次	SK-38	遺物出土状況（東から）		
	2	30次	SK-40	遺物出土状況（東から）	
写真図版110	31次	全景	（北から）		
写真図版111	31次	SB-23A・B	（西から）		
写真図版112-1	31次	SB-66・68・69	（北から）	2	31次 SB-67（東から）

写真図版113-1	32次	東半全景（南から）	2	32次	西半全景（南から）
写真図版114-1	35次	全景（南から）	2	35次	S B-120（東から）
写真図版115-1	35次	S B-121（南から）	2	35次	S B-135（北から）
写真図版116-1	36次	全景-1（北から）	2	36次	全景-2（南から）
写真図版117-1	36次	掘立柱建物群（北から）	2	36次	S B-114（南から）
写真図版118-1	36次	S B-115（南から）	2	36次	S B-116（南から）
写真図版119-1	36次	S B-117（南から）	2	36次	S B-118・120（西から）
写真図版120-1	36次	S B-119（南から）			
	2	36次	S K-4	遺物出土状況	（西から）
写真図版121-1	36次	S K-12	遺物出土状況	（西から）	
	2	36次	S K-20	（西から）	
写真図版122-1	37次	全景（北から）	2	37次	南半全景（北から）
写真図版123-1	37次	S B-127（北西から）	2	37次	S B-128（北西から）
写真図版124-1	37次	S B-129・130（北西から）			
	2	37次	S K-17	遺物出土状況	（南から）
写真図版125-1	37次	S K-19	遺物出土状況	（北から）	
	2	37次	S K-21	遺物出土状況	（南から）
写真図版126	38次	全景（西から）			
写真図版127-1	38次	西半全景（西から）	2	38次	S B-126（北から）
写真図版128	土器-1				
写真図版129	土器-2				
写真図版130	土器-3				
写真図版131	土器-4				
写真図版132	土器-5				
写真図版133	土器-6				
写真図版134	土器-7				
写真図版135	土器-8				
写真図版136	土器-9				
写真図版137	土器-10				
写真図版138	土器-11				
写真図版139	土器-12				
写真図版140	土器-13				
写真図版141	土器-14				
写真図版142	土器-15				
写真図版143	土器-16				
写真図版144	土器-17				

写真図版145	土器-18
写真図版146	土器-19
写真図版147	土器-20
写真図版148	土器-21
写真図版149	土器-22
写真図版150	土器-23
写真図版151	土器-24
写真図版152	土器-25
写真図版153	土器-26
写真図版154	土器-27
写真図版155	土器-28
写真図版156	土錘-1
写真図版157	土錘-2
写真図版158	土錘-3
写真図版159	土錘-4
写真図版160	製塩土器
写真図版161	銅製銚帶金具
写真図版162	鉄器-1・石器-1
写真図版163	鉄器-2
写真図版164	鉄器-3
写真図版165	鉄器-4



# 報告書抄録

ふりがな	いちみいせき (1)							
書名	市道遺跡 (1)							
副書名	牟呂土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書-市道地区-							
巻次								
シリーズ名	豊橋市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第20集							
編集者名	費元洋							
編集機関	豊橋市教育委員会・牟呂地区遺跡調査会							
所在地	〒440 豊橋市今橋町1 Tel 0532-51-2879							
発行年	1996年11月29日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		m <sup>2</sup>	
市道	トヨハシ ムロヨリ 豊橋市牟呂町 7丁目16 字市道160他	23201	79442	34度 45分 10秒	137度 21分 10秒	19840723~ 19960217 第1次~ 第44次調査	22,484	区画整理 事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
市道遺跡	官衙・寺院址	奈良時代 平安時代 鎌倉時代	正六角形獨立柱建物5棟、獨立柱建物群約140棟、中世獨立柱建物群	須恵器・坏・皿・甕・鉄鉢・火舎・壺・鉢、土師器・皿・甕・坏、灰釉陶器・碗・皿、緑釉陶器・段皿等、輸入陶磁器・碗、鉄刀、提子の環座、銅製鈔帯金具、水晶製切子玉、和同開珎7点		8世紀から9世紀頃の正六角形獨立柱建物が倉庫群と共に検出された。寺院は郡司クラスの氏寺と推定される。方一町の寺院の北東側に接して約140棟の獨立柱建物群が確認されている。		

# 第1章 遺跡の立地と歴史的環境

## 1. 遺跡の立地

豊橋市は中央構造線沿いに流れる豊川左岸の下流部に位置する。市の東部には赤石山脈の末端である弓張山地が連なっている。南部は渥美半島の基部に当たり、高師原地等の河岸段丘が広がり、太平洋に面している。西部は豊川河口部で沖積地や干拓地が広がり、三河湾に面している。市域の大部分は豊川と旧天竜川の河岸段丘及び沖積平野などの平坦地である。市域の大半を占める河岸段丘は高位面である天伯原面、中位面である高師原～豊橋上位面、低位面である豊橋面の3面に分類されている（註1）。

市道遺跡のある牟呂町は市域の西部にあり、三河湾に向かって延びる低位段丘の先端部に位置している。段丘の北側には豊川とその沖積面が広がり、南側には柳生川とその沖積面が広がっている。段丘は先端部分で南側に折れ、東側には浅い谷が入り、入り江状になっている（挿図1）。西の三河湾側は干拓地が広がっているが、干拓前には段丘崖の下にまで海がせまっていた。この段丘の直下や段丘斜面には縄文時代から続く貝塚が多く分布している。

段丘上はかなり平坦であり、現在ではほとんどが宅地となっているが、明治時代には、集落は段丘端部に集中しており、段丘内部には少なかった（挿図2）。段丘南部の入り江状になったところには、船が着いたとの伝承があり、古くからの港と考えられ、現在でも干拓によってかなりせまってはいるが先端部には市場港がある。入り江の反対側に当たる段丘北側の「坂津」にも、「志香須賀の渡し」と呼ばれ船が着いたとの伝承があり、豊川を渡河する重要な地点であったと考えられる。豊川の対岸約10kmには国府・国分寺等があり、古代以前から船運を中心とした海上交通の要衝であったと考えられる。

註1 水野季彦 「第1章-1. 豊橋市周辺の自然環境」『豊橋市埋蔵文化財調査報告第27集 外神遺跡』豊橋市教育委員会他 1995年



插图1 牟呂地区周辺地形復元図（1/10,000）

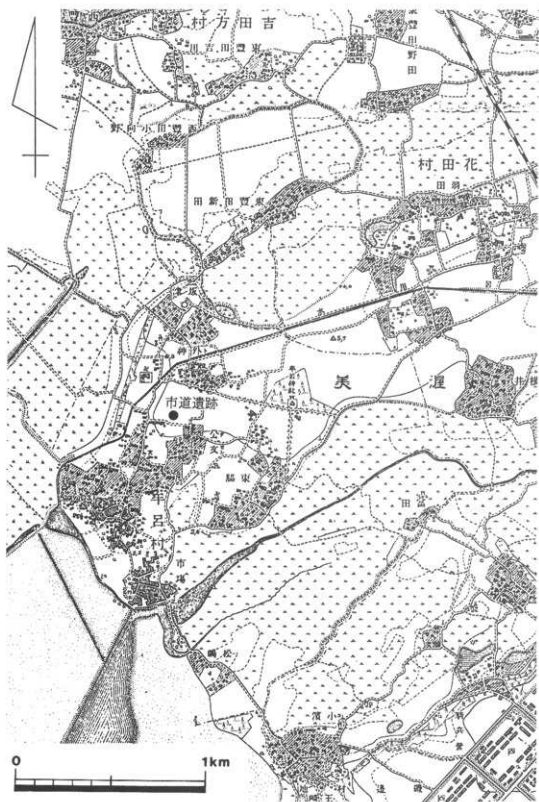


插图2 牟呂地区周边地形图 (1/20,000—明治23年测量—)

## 2. 歴史的環境

市道遺跡のある牟呂地区は縄文時代中期から遺跡が形成され、以後現在までほとんど途切れることなく継続している。市道遺跡では奈良・平安時代を中心とした古代寺院と官衙的建物群が確認されており、古代の渥美郡において重要な役割を負った遺跡であったと考えられる。以下では市道遺跡を中心として、各時代ごとに概説を行う（挿図3）。

### 縄文時代

牟呂町地内の縄文時代の遺跡は、晩期を中心とした貝塚群が段丘直下と縁辺部に集中してみられる。最も古いものは中期中葉～後期初頭の土器が出土している坂津寺貝塚（1）である。柳生川を挟んだ対岸には前期から晩期の土器を出土した小浜貝塚（41）がある。

晩期から弥生時代前期には、段丘直下に水神第1貝塚（4）、水神第2貝塚（5）、大西貝塚（16）、市杵嶋神社貝塚（23）等の貝塚が形成されている。現在ではほとんどその面影は見られないが、かつては段丘直下の海岸線には「殻山」と呼ばれた大規模な貝塚が山脈のように見られ、大きなものは面積が一町五反（約15,000㎡）もの大きさがあったとされている（註1）。これらの殻山から出土したものは石器、土器、獣骨等で弥生土器がほとんどであったとされているが、発掘調査が行われた水神第1貝塚では、最下層に縄文晩期前半の土器が見られ、この時期に貝塚が形成され始めたことを示している。

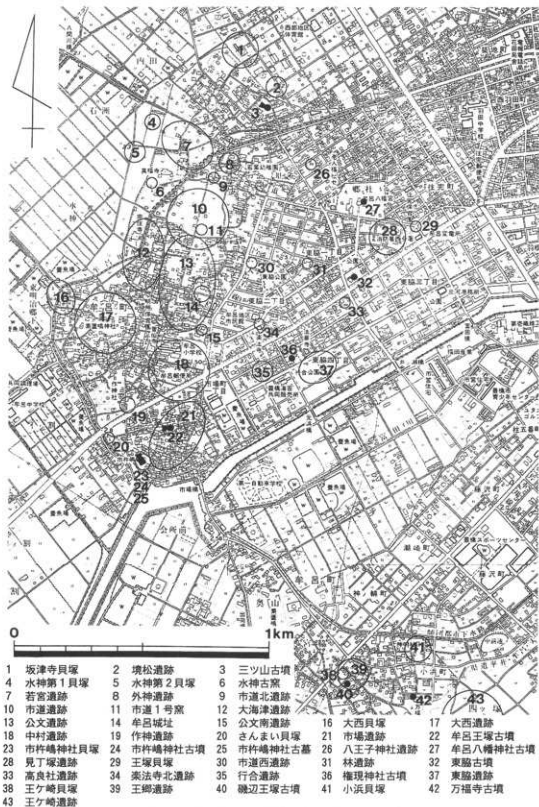
### 弥生時代

弥生時代の遺跡は縄文時代の安帯紋土器の系譜を引く条痕紋土器が水神第1・第2貝塚、大西貝塚、市杵嶋神社貝塚等で出土しているが、住居跡等の遺構は未だ確認されていない。水神第1・第2貝塚、大西貝塚では弥生前期の条痕紋土器が、市杵嶋神社貝塚では弥生中期初頭の条痕紋土器が出土しており、大西貝塚では少量の遠賀川式土器も出土している。

弥生中期後葉では牟呂町より約1kmほど柳生川右岸の上流よりに見丁塚遺跡（28）があり、方形周溝墓が確認されている。また、左岸には中期中葉から後葉にかけての竪穴住居、方形周溝墓が確認され、多くの遺物が出土し、当地域の中心的集落と考えられる橋良遺跡（註2）がある。牟呂地区内においては、貝塚に伴って土器が少量出土しているが、内陸部では弥生時代の遺構は確認されておらず、集落が形成されていなかったと考えられる。

### 古墳時代

古墳時代では前期の前方後方墳である市杵嶋神社古墳（24）、後期初頭の前方後円墳である三ツ山古墳（3）、後期後半の前方後円墳である牟呂王塚古墳（22）等がある。この他に生産址として三ツ山古墳に埴輪を供給したと考えられる6世紀初頭（TK-47型式）の須恵器・埴輪供焼窯である水神古窯（6）がある。柳生川左岸には墳形は不明であるが、最大幅2.16m、全長10m以上の大型の横穴式石室を持ち、頭椎・環頭・円頭の各飾大刀やトンボ玉等の豊富な



挿図3 牟呂地区周辺遺跡分布図 (1/15,000)

種類の玉類を出土した磯辺王塚古墳(40)がある。これ以外には、牟呂八幡神社古墳(27)、東脇古墳(32)があり、かつては三ツ山古墳の周辺にも古墳と考えられる高まりがいくつか存在していたようで、小規模な円墳が散在的に見られたようである。しかし、豊橋市東部の山脈裾部にあるように数十基単位の群集墳が連なるような状況とは異なっていたようである。

集落では6世紀後半から7世紀前半にかけて竪穴住居、掘立柱建物等が確認されている大西遺跡(17)、古墳時代後期、奈良～平安時代を中心とした大海津遺跡(12)、見丁塚遺跡等がある。古墳時代前期の集落は未発見であるが、大西貝塚では4～5世紀頃の土師器が出土しており、近接した地域に当時代の集落が確認される可能性は高い。古墳時代の集落は段丘の縁辺部に見られ、これ以後の集落とは立地が異なるようである。

## 古代

古代では市道遺跡(10)が最も規模が大きく、遺構も集中し、遺物も多量に出土している。市道遺跡は南側の方一町(99m四方)の区画とこの北東側に隣接する掘立柱建物群とで構成され、南側区画は主軸がわずかにずれた方一町の外側区画から54m×78mの内側区画に造り替えられていることが推定されている。

外側区画では東・西・南・北辺の掘立柱の扉が確認されている。内側区画は区画中央には礎石建物の金堂、4間×7間の四面庇の掘立柱建物の講堂、7棟の掘立柱建物の僧房群が確認された。金堂から南東約20mの扉の南東隅にはロストル式平窯の市道1号窯が確認され、南辺には門も確認されており、建物や扉、溝等の切り合い関係からは2～3回程度の建て替えが推定されている。また、金堂と講堂の位置には幅約2mで14m×8m程の長方形の周溝が掘られ、13世紀頃の中世陶器が出土しており、小規模な建物が再建された可能性が考えられる。

北側の掘立柱建物群では139棟の建物が確認されている。掘立柱建物は北辺と西辺に3間×3間の総柱建物が軒を揃えるようにして並び、この南と東側に間仕切りのある建物や側柱建物が集中している。また、北辺の総柱建物群の中央北側と北西隅では、中心主柱穴を持ったA型と持たないB型の正六角形の掘立柱建物が合計5棟確認されている。正六角形掘立柱建物は中央北側と北西隅の2棟が同時存在し、A型からB型へ建て替えられている可能性が高く、掘立柱建物の配置の上で重要な位置を占めていると考えられる。これら各種の掘立柱建物群はその数量や規格からすべてが南側の寺に付随するものではなく、倉庫を中心とした何らかの官衙的性格を持った遺構である可能性が考えられる。出土遺物から推定される遺構の時期は一部に断続は見られるが、およそ8世紀初～13世紀で、8世紀後半から10世紀頃を中心としている。

市道遺跡や近接した公文・大西遺跡等では奈良時代の竪穴住居が散発的に発見され、平安時代の灰軸陶器を出土する遺構等が確認されているが、集落の全体像は良く分からず、当時の集落景観を復元するまでには至っていない。

## 中世～近世

平安末から鎌倉時代になると牟呂地区の各地で遺跡数が増える。市道遺跡では、南側区画内

の金堂と講堂のあったところに小規模な礎石建物が再建されたと考えられ、周辺部には掘立柱建物や井戸等が確認されている。公文遺跡(13)では一辺が70m以上で、幅約4m、深さ約2mの断面V字状の溝が南側と東側で確認されており、12～13世紀頃の豪族館と考えられる。平面形は現在のところL字状であるが、溝や塀によって方形に区画されていた可能性が考えられる。溝からは中世陶器と共に馬骨を中心とした獣骨が多く出土している。若宮遺跡(7)では掘立柱建物、井戸、地下式土墳墓等が確認されている。

公文遺跡の東側には牟呂城址がある。牟呂城址は韃殿兵庫の城跡と言いつたえられている。発掘調査により、土塁や幅約3.7m、深さ約1.3mの堀、井戸等が確認され、16世紀を中心とした城跡であったと考えられる。

古墳時代前期に前方後方墳である市杵嶋神社古墳が築造されて以後、後期の牟呂王塚古墳、磯辺王塚古墳等の首長墳が築造されているところから、牟呂地区は古墳時代を通して豊川河口部における在地勢力の重要な拠点であったことが確認できる。集落跡は6世紀後半から7世紀前半頃を中心とした大西遺跡や大海津遺跡等で確認されているが、市道遺跡ではこの時期の遺物は出土しておらず、7世紀末から8世紀初頭頃にこれまでの居住域とは離れたところに新たに造られた遺跡であると考えられる。

市道遺跡は8世紀後半から10世紀頃を中心として存続するが、若干の断続を挟んで13世紀頃まで存続する。市道遺跡以後は南に隣接して、豪族館と考えられる公文遺跡が12世紀頃から14世紀頃、更にその南の牟呂城址が16世紀頃を中心とした遺跡である。これらの遺跡はその性格から一般集落ではなく、古代の官衙的遺跡である市道遺跡に見られるように、当地が古墳時代から近世に至るまで豊川河口部の中心的地域であったことを示している。

註1 白井梅里「古代概観その一」『牟呂古田村誌』1933年

註2 豊橋市教育委員会『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第18集 橋良遺跡』1994年



## 第2章 調査の経過

### 1. 調査の経過

市道遺跡の発掘調査は豊橋牟呂土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査として、昭和59年度から平成7年度までの調査で44回の調査が行われた（挿図4）。発掘調査は平成8年度現在も継続して行われている。市道遺跡の範囲は昭和59年度に行った広範囲に渡る道路築造部分の発掘調査によって、ある程度の推定ができたので、これ以後は宅地造成部分を中心に調査が進行した。

発掘調査は宅地部分を中心となったため、発掘の面積や期間についてはかなり分割されることになった。各調査の担当、面積、期間等は一覧表に示した（挿表1）。

市道地区は住宅が密集している牟呂地区の中でも比較的畑が多く、近年になって宅地化が進んだ地区である。このため、発掘調査時点では畑であった所については発掘調査が行えたが、区画整理事業開始以前で近年建築された住宅部分については発掘調査が行えなかった。

築造される道路面の高さは現地表面とほとんど同じであり、住宅建設に当たっては削平されることはなく、ほとんどの場合土盛りされた上に建設されている。建設される建物はほとんどが木造2階建ての建物であり、基礎が遺構検出面まで達することはほとんどない。

市道遺跡はこれまでの発掘調査によって、古代寺院である南側区画とこの北東側にある北側掘立柱建物群の2つの遺構群に大別できることが確認されている。発掘調査は北側掘立柱建物群の方が進展が早かったため、今回は正倉・居館編として北側掘立柱建物群について報告し、次回は寺院編として南側区画を報告する予定である。

### 2. 調査の方法

調査に当たり、区画整理事業地内を字名により10地区に分割した（挿図5）。これらの地区はアルファベットの頭文字3字で略記することにし、市道地区は「ICM」と表記した。また、市道遺跡は市道地区の大半と公文地区の一部に位置しているため、公文地区「KMN」に含まれるもの（第39・40次）や既報告の公文遺跡（註1）に遺構の一部が含まれている場合がある。このため、市道地区と公文地区の一部で調査区が混在するところがあった。

市道地区における調査区設定は、道路築造のために設置された杭を基準に、道路方向に沿って設定した。区画整理事業に伴って設置された工事用の杭は、建設省告示に定められた平面直角座標第Ⅶ系に準拠している（挿図6）。道路築造のための杭を基準にしたのは第1次調査が道路築造部分に当たり、調査区の設定と杭打ちを迅速に行うためである。具体的にはO-4区の中心が調査を始める地点で十字路口になっていたため、この中心杭を基準にし、ここから北に延びる道路のセンター杭を方向の基準にした。地区名については東西方向はアルファベット、南北は数字によって示すことにし、それぞれ西から東、南から北に向かって設定した（第6図）。



挿表1 市道遺跡発掘調査地区一覧表

調査次	年度	面積(m <sup>2</sup> )	調査担当者	調査期間
1次	昭和59年	1,227	費元洋	1984.7.23~1985.3.7
2次	昭和59年	1,166	費元洋	1984.9.5~1985.2.20
3次	昭和59年	1,746	費元洋	1984.9.20~1985.2.20
4次	昭和60年	195	費元洋	1985.6.26~7.14
5次	昭和61年	210	費元洋	1986.12.13~1987.1.19
6次	昭和61年	240	費元洋	1987.1.6~3.25
7次	昭和61年	450	費元洋	1987.1.20~3.25
8次	昭和62年	600	費元洋	1987.10.12~11.26
9次	昭和62年	1,000	岩瀬彰利	1987.10.26~1988.3.28
10次	昭和62年	360	岩瀬彰利	1987.10.26~1988.3.28
11次	昭和63年	400	岩瀬彰利	1988.6.13~6.29
12次	昭和63年	240	小林久彦	1988.6.29~8.10
13次	昭和63年	420	小林久彦	1988.10.20~11.21
14次	昭和63年	1,060	費元洋	1988.11.21~12.19
15次	昭和63年	700	小林久彦	1989.1.11~3.8
16次	平成元年	280	小林久彦	1989.5.8~5.29
17次	平成元年	180	岩瀬彰利	1989.6.1~6.16
18次	平成元年	820	費元洋	1989.6.15~8.17
19次	平成元年	420	費元洋	1989.8.17~10.24
20次	平成元年	330	岩瀬彰利	1989.8.21~9.11
21次	平成元年	200	岩瀬彰利	1989.10.26~11.10
22次	平成元年	250	費元洋	1989.11.2~12.12

調査次	年度	面積(m <sup>2</sup> )	調査担当者	調査期間
23次	平成元年	335	費元洋	1990.1.8~2.26
24次	平成元年	290	岩瀬彰利	1990.2.5~2.15
25次	平成2年	345	費元洋	1990.7.20~9.3
26次	平成2年	185	岩瀬彰利	1990.9.21~10.17
27次	平成2年	600	費元洋	1990.10.20~12.7
28次	平成2年	250	岩瀬彰利	1991.1.7~2.5
29次	平成3年	475	小林・赤木剛	1991.5.1~5.24
30次	平成3年	280	岩瀬彰利	1991.9.11~11.10
31次	平成3年	250	岩瀬彰利	1991.11.19~12.5
32次	平成4年	300	岩瀬彰利	1992.5.11~5.22
33次	平成4年	220	費元洋	1992.7.31~8.25
34次	平成4年	940	費元洋	1992.12.22~1993.3.18
35次	平成5年	230	岩瀬彰利	1993.7.9~7.22
36次	平成5年	700	小林久彦	1993.10.25~11.29
37次	平成6年	800	岩瀬彰利	1994.5.9~6.29
38次	平成6年	90	岩瀬彰利	1994.6.15~6.20
39次	平成6年	450	小林久彦	1994.7.6~9.26
40次	平成6年	700	岩瀬彰利	1994.7.6~9.26
41次	平成6年	700	岩瀬彰利	1994.7.6~9.26
42次	平成7年	1,100	小林久彦	1995.5.9~6.22
43次	平成7年	500	岩瀬彰利	1995.11.21~12.26
44次	平成7年	250	岩原剛	1996.1.25~2.17

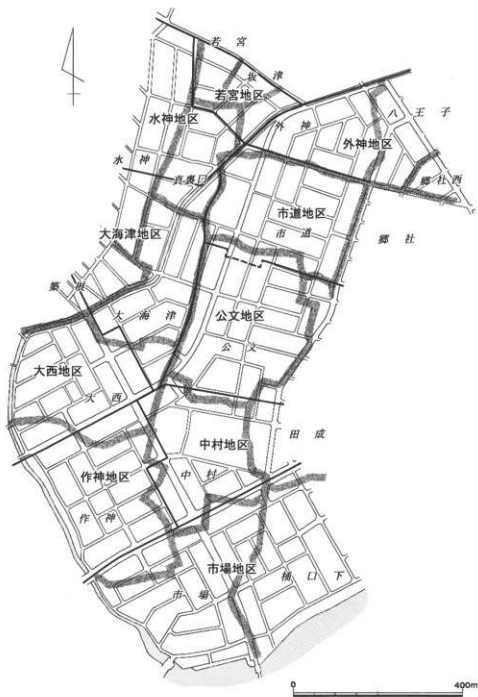


插图5 牟呂地区割図 (1/9,000)

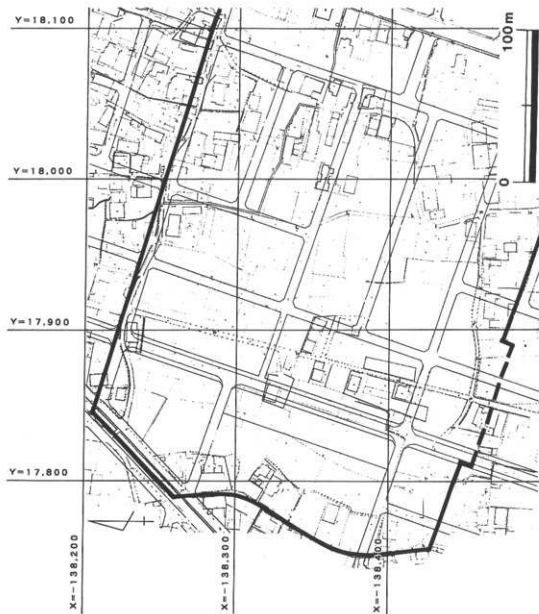


插图 6 市道地区位置图 (1/25,000)

各地区の発掘調査は基本的に同様の方法で進めた。発掘調査はまず重機により表土除去を行い、遺構検出、遺構精査、遺物・遺構細部写真撮影、遺構実測、全体写真、断ち割り、遺構図補足、埋め戻しの順に行った。

市道地区は表土層が薄く、最も浅い所で15cm程の耕作土を除去すると遺構検出面である地山面に達した。当地区は段丘の中央部分であり、土が堆積しないところであったので基本的に遺物包含層は見られなかった。

市道遺跡の基本土層は耕作土である表土層と遺構検出面である地山層の2層しかない。地山層は豊川と旧天竜川の堆積物であり、シルトと砂礫層の互層である。

註1 豊橋市教育委員会『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第8集 公文遺跡(1)』1988年

## 第3章 遺構

市道遺跡の発掘調査は区画整理事業に伴って昭和59年より継続的に行われ、これまでの調査でようやく全体像を推定できるようになった。34次調査では4間×7間の掘立柱建物の講堂、41次調査では礎石建物の金堂が確認され、南側の区画が寺院址であることが確認された。市道遺跡は南側の方一町（推定99m四方）の区画とこの北東側に隣接する掘立柱建物群とで構成され、南側区画は方一町の外側区画から主軸がわずかにずれた54m×78mの内側区画に造り替えられていることが推定されている。

北側の掘立柱建物群では139棟の建物が確認されている。掘立柱建物は北辺と西辺に3間×3間の総柱建物が軒を揃えるようにして並び、この南と東側に間仕切りのある建物や側柱建物が集中している。また、北辺の総柱建物群の中央北側と北西隅では、中心主柱穴を持ったA型と持たないB型の正六角形の掘立柱建物が合計5棟確認されている。正六角形掘立柱建物は中央北側と北西隅の2棟が同時存在し、A型からB型へ建て替えられている可能性が高く、掘立柱建物の配置の上で重要な位置を占めていると考えられる。これら各種の掘立柱建物群はその数量や規格からすべてが南側の寺院址に付随するものではなく、倉庫を中心とした何らかの官衙的性格を持った遺構である可能性が考えられる。

今回の報告は寺院址に付随する正倉群を含むと考えられる北側掘立柱建物群であり、寺院址である南側区画に関しては次回に報告する予定である。発掘区では、ICMの9区ラインより北側、I-9区からAG-22区までである（挿図4）。

各遺構の所属時期については、出土遺物等から9期に分類している。各時期の設定方法については第5章で詳しく説明しているので、ここではその概略を示す。

出土遺物による時期区分は土師器壺の型式変化を中心に須恵器、灰釉陶器、中世陶器の供膳具の型式変化と組成により、1～9期に分類した。各時期の西暦年代はおよその目安として、1期を8世紀前半、2期を8世紀後半、3期を9世紀前半、4期を9世紀後半、5期を10世紀、6期を11世紀、7期を12世紀、8期を12世紀末から13世紀前半、9期を13世紀後半から14世紀前半とした。

以下では、時期別ではなく各遺構の種類別に説明する。

### 1. 掘立柱建物（SB）

掘立柱建物は135棟が確認されている。8世紀から13世紀頃の各時期のものを含んでおり、奈良・平安時代の建物は掘方の直径が大きい傾向がある。各建物の所属時期は1期から9期までであり、中心となるのは2・3期であるが、時期毎ではなく掘立柱建物の種類別に説明する。各建物の個別計測値等の詳細は第1表にある。

市道遺跡で確認されている掘立柱建物は正六角形建物、総柱建物、間仕切りのある建物、庇付建物、側柱建物の5種類が確認されている。



各種の建物の時期別棟数は時期ごと種類ごとにかなり偏りが見られる。全体の建物総数の傾向としては1期～3期と8・9期にピークが見られる。前半は特に8世紀後半から9世紀前半頃の2・3期に集中し、後半は12世紀末から14世紀前半の8・9期に集中している（挿図26～34、第5章参照）。

建物の種類別では倉庫と推定できる総柱建物は1～3期に集中し、正六角形建物も2・3期に均等に見られる。

## A. 正六角形建物

正六角形建物は5棟が確認されている。規模と構造の点では、中心支柱穴を持ち規模が大きいA型（SB-1・114・115）（第17・56・57図）と中心支柱穴を持たず規模が小さいB型（SB-2・3）（第18図）の2種に細分できる。

**A型正六角形建物** A型正六角形建物は外側に12本、内側に6本、中心に1本の合計19本の柱穴で構成されている。外側の六角形は一辺の中央に柱穴を配しており、正六角形である。内側の六角形はやや扁平になった長六角形である。これは柱穴の位置の決め方によるものと考えられる。例えばSB-1の内側の六角形はP13～18の6本で構成されているが、P13はP19とP12を結んだ線とP1とP9を結んだ線との交点に位置している。P15・16・18の柱穴の位置も同様にして決められている。P14はP2とP19を結んだ線とP12とP4を結んだ線との交点に位置しており、P17も同様にして決められている。

建物の規模はSB-1のP1・P3・P19の間が418cmで半径418cmの円を基準に設計されている。同様にSB-114では半径429cm、SB-115では半径410cmの円を基準に設計されている。中心支柱穴の掘方は直径が約1mあるが、他の柱穴は70～80cmであり掘方がやや大きい。中心支柱穴の柱痕跡は直径約15cmであるが、他の柱穴の柱痕跡は約30cmであり、ほぼ半分の大さきしかなく、明らかに小さい。これは中心支柱穴が他の穴よりも荷重のかからない構造上特殊なものであることを示している。

SB-1ではほぼ南北方向を向いているP2～P8を中軸線とした。方位はN-175°-Eでほぼ南北方向にあり、内側の正六角形は東西に長い長六角形である。SB-1は掘立柱建物群の中でも北辺の中央に位置しており、他の建物との位置関係からはP7～P9の南面が正面で、入口があったものと考えられる。

建物の主軸方向はSB-1・115がN-175°-Eで同一方向であるが、SB-114はN-96°-EでSB-1・115より79°西に振れている。3者の位置関係からもSB-115の北西側にSB-114が建て替えられている可能性が高いと考えられる。

**B型正六角形建物** B型正六角形建物は外側に12本、内側に4本の合計16本の柱穴で構成されている。外側の六角形は一辺の中央に柱穴を配しており、正六角形である。六角形の頂点にあるP1・P3等の柱穴より、辺の中央にあるP2・P4等の柱穴の方が細い傾向にある。内

側は六角形ではなく、平行四辺形である。これは柱穴の位置の決め方によるものと考えられる。例えばSB-2の内側の平行四辺形はP13~16の4本で構成されているが、P13はP11とP5を結んだ線とP1とP9を結んだ線との交点に位置している。P15位置も同様にして決められている。P14とP16はP2とP8を結んだ線を三等分するところに位置しており、これまでの柱穴とは位置の決め方が異なっていると考えられる。

建物の規模はSB-3のP1・P3の間が288cmで半径288cmの円を基準に設計されており、SB-2についても同一規模である。B型正六角形建物は中心支柱穴がなく、柱穴の掘方は直径約60cm、柱痕跡は直径約20cmであり、A型よりも小さい。B型で中心支柱穴が無いのは、中心支柱穴が構造上必要不可欠なものではなかったことを示しており、A型においても中心支柱穴の柱痕跡が他よりも明らかに細かったのも同様であると考えられる。

SB-2はほぼ南北方向を向いているP2~P8を中軸線とした。方位はN-176°-Eでほぼ南北方向にあり、内側の正六角形は東西に長い平行四辺形である。B型もA型と同様に他の建物との位置関係からは南面が正面で、入口があったものと考えられる。

建物の主軸方向はSB-3がN-176°-E、SB-2はN-97°-EでSB-3より79°西に振れている。両者の関係はSB-1とSB-114と同一であり、これらよりやや内側に規模を縮小して建て直されたものと考えられる。

## B. 総柱建物

総柱建物は32棟が確認されている。規模が確認できる建物では6間×4間、6間×3間が各1棟、3間×3間が10棟、3間×2間が11棟あり、時期も1期から3期に集中している。各建物の詳細は一覧表(表1)により、ここでは特徴のある建物について説明する。

SB-4 SB-4(第19図)は中央付近の柱穴3個が連結している(P6・9・12とP7・10・13)。これらの柱穴は掘方を共有しているが、切り合い関係はなく同時に掘られて、埋められたものである。P9とP10は棟持ち柱と考えられる。

SB-5 SB-5(第19図)は6間×3間の総柱建物であるが、北側半分と南側半分とでは柱穴の規模が異なっている。P1~P16までの北側の掘方は直径が70cm~100cmであるのに対し、P17~P28の南側の掘方は直径50cm~70cmであり、明らかに小さい。また、P13~P16のラインはSB-6~10の総柱建物の南側の軒と揃っており、これらと同時存在していた可能性が高い。以上の点から、SB-5は当初P1~P16までの3間×3間の建物(SB-5A)として建築され、これ以後P17~P28の部分が増築され、結果的に6間×3間(SB-5B)に拡張されたと考えられる。

SB-10 SB-10(第21図)は全く同じ場所に同一規模で建て替えが行われている。1期の建物をSB-10B、2期の建物をSB-10Aとした。P9ではやや中心がずれて二つの柱痕

跡が確認されている。SB-10Aの方が柱穴の掘方の直径が小さく、浅い。

SB-11 SB-11(第21図)はN-97°-Eで他の総柱建物より約10°程東へ振れている。南側に約2.5m離れたところに南辺とほぼ対応する柱穴列P17~P20がある。SB-11と一体の建物とすれば、柱穴の間隔がやや離れてしまうところから、南側を画する目隠し塀の可能性が高いと考えられる。

SB-17 SB-17(第24図)は6間×4間の大型の総柱建物である。柱穴掘方の直径はやや小さいがほぼ位置関係は整然としている。これらの中でP25に関しては位置がずれており、掘方も小さく浅い。本来あるべき位置については遺構検出を数回行い、最終的には断ち割って調査したが柱穴は確認できなかった。P25はこの建物に伴わないものである可能性もあり、その場合東辺中央部あたりに入り口等の施設があった可能性が指摘できる。

SB-21 SB-21(第25図)は2間×3間の総柱建物である。西辺の両端の柱穴P2とP11の西側約20cmのところに直径約20cmの小さな柱穴がある。SB-21に伴うものと考えられるが、どのような役割のものであるのかは確認できない。

SB-45 SB-45(第37図)は発掘区外になったり、溝等に破壊されて中央部の柱穴が確認されていないが、この付近にある建物はすべて総柱建物であり、3間×3間の総柱建物になる可能性が高いと考えられる。

SB-81 SB-81(第25図)は柱穴が二つしか確認されていないが、SB-12・13・17と一列に並んでいる。この3棟は東側の軒が揃っており、SB-81もこれらと同様な位置関係にあり、3間×3間の総柱建物になる可能性が高いと考えられる。

### C. 間仕切り建物

間仕切りのある建物は16棟が確認されている。規模が確認できる建物では9間×3間が最も大きく、3間×2間が最も小さい。時期は1期から5期に分散して各々2~4棟がある。基本的に間仕切りは建物の中央にあるもの、1間のもの、2間のもの、3間のものの4種類があり、特殊な形態のものとしてSB-23がある。

各建物の詳細は一覧表(表1)により、ここでは特徴のある建物について説明する。

SB-23 SB-23(第12・13・26図)は掘立柱建物群の東辺中央付近にある南北棟である。2間×6間の建物が2棟並んでいるような形をしており、西側のものをSB-23A、東側のものをSB-23Bと仮称した。梁間は共に約150cmでSB-23AとSB-23Bの間も同じ間隔であり、1棟の建物とした場合、梁間は約150cmで5間となる。

S B-23Bの東側は溝によって破壊されており確認できないが、柱穴の位置からは一体のものである可能性が高く、1棟の建物として把握しておきたい。

#### 中央に間仕切りのあるもの

中央に間仕切りがあるものは、S B-29・52・62（第29・30・42図）の3棟が確認されている。S B-29は6間×4間の東西棟で建物中央にある間仕切りは3間であり、1間分少なくなり柱の間隔が広がっている。S B-62は2間×4間の東西棟であるが、間仕切りになるP13は他の柱穴よりやや小さい。

#### 間仕切りが1間のもの

間仕切りが1間のものは、S B-24～26・66・119（第27・28・33・60図）の5棟が確認されている。S B-24・25は仕切られた1間分の柱間が他のものより短くなっており、庇であった可能性もある。

#### 間仕切りが2間のもの

間仕切りが2間のものは、S B-27・28・30・31（第28・29・30図）の4棟が確認されている。すべて東西棟で東側に2間分が仕切られている。

#### 間仕切りが3間のもの

間仕切りが3間のものは、S B-33・34（第32・33図）の2棟が確認されている。東西棟（S B-34）と南北棟（S B-33）で梁間の柱間隔は同じ長さであるが、桁行側の柱間隔はS B-33の方が短い。

### D. 庇付建物

庇付建物はS B-32（第31図）、S B-118（第59図）の2棟が確認されている。

S B-32 S B-32（第31図）は5間×3間の南北棟で西側に庇がある。梁間の柱間は6尺で、庇は4.5尺と考えられる。

S B-118 S B-118（第59図）は3間×2間の東西棟で北側に庇がある。梁間の柱間は3間、403cmで4尺、庇は250cmで8尺と考えられる。庇の柱間がかなり広く、かつ桁行方向の柱間は5間になると考えられる。また建物の桁行より1間多くなっているところから、庇ではなく堀の可能性もある。

### E. 側柱建物

側柱建物は79棟が確認されている。規模が確認できる建物では6間×3間が最も大きく、2

間×1間がもっとも小さい。側柱建物はすべての時期にあり、掘立柱建物の基本形態である。規模のばらつきは大きい、3間×2間のものが全体の3分の1を占め、各時期にほぼ均等に存在している。側柱建物は構造上で特に説明を要するものはないので、各建物の詳細は一覧表(第1表)により、ここでは目隠し堀が伴うと考えられるSB-50について説明する。

SB-50 SB-50(第38図)は3間×4間の南北棟で西側に約250cm離れたところに柱穴列(P15~19)がある。柱間の間隔は異なるが方向は並行しており、SB-50に伴う堀と考えられる。

## 2. 竪穴住居(SB)

竪穴住居はSB-134~137(第64・65図)の4棟が確認されている。方形掘方の竪穴状遺構を竪穴住居としたが、いずれも竈や炉跡ははっきりと確認できず、壁溝がなく、柱穴も確認できないものもあり、住居としてどの程度の機能を持っていたのかは、はっきりしない。

SB-134 SB-134(第64図)は発掘区の隅にあり、削平を受け、また溝に切られていたために、極わずかな部分が確認できただけである。確認できた掘方は浅く、壁溝もないが、北西隅が確認できたので竪穴住居とした。掘方の深さは確認できる場所では約5cmであるが、東側は削平が著しく確認できない。

SB-135 SB-135(第65図)は南北330cm、東西320cmのほぼ方形で四辺に壁溝がめぐっている。掘方の深さは約20cmである。柱穴は無く、竈や炉跡も確認できなかった。

SB-136 SB-136(第65図)は南北440cm、東西403cmの長方形で四辺に壁溝がめぐっている。掘方の深さは約15cmである。南東側にわずかに焼土が集中している部分があったが、炉跡になるかどうかははっきりしない。柱穴はP1~4までがほぼ方形に近く並ぶので、4本柱になる可能性がある。

SB-137 SB-137(第64図)は南北493cm、東西355cmの長方形で壁溝は確認できていない。掘方の深さは約20cmである。炉跡や竈は確認できなかった。柱穴はP1・2が確認でき、4本柱になる可能性があるが他ははっきりしない。柱穴の直径は約20cmでかなり細い。

SB-137はSB-7を切って造られている(写真図版17-1)。多量の遺物が出土したが、いずれも小片になったものが全体に均一に出土しており、竪穴住居に伴う遺物というより、排棄土壌として使用されたものと考えられる。

### 3. 土壌 (SK)

土壌は多数確認されているが、ここでは図示した遺物を出土したもののうち他の遺構との関係が強いと考えられるものについて説明する。各土壌の位置、法量等のデータは一覧表(第2表)による。

SK-20 SK-20(第2図、写真図版121-2)はSB-114の北辺に近接している。所属時期は2期でSB-114と同じである。浅い穴が3つ連結したような形をしている。SB-114とは重ならないが、位置的にはSB-114に伴うか、廃絶直後に掘られたものと考えられる。

SK-31 SK-31(第6図、挿図19、写真図版84)は東西に長い土壌で中央やや西よりに円形で深くなった部分があり、須恵器の坏と蓋が合わさった形で出土している。SK-31はSB-98の北西隅から北側の軒に並行するようにあり、この建物に伴うものと考えられる。

SK-36 SK-36(第5図)は南北に細長い穴でSB-18・80の西辺に近接している。出土遺物は鉄釘(第139図)のみで時期を決定できる資料はないが、SB-18・80の何れかに伴うものと考えられる。

SK-37 SK-37(第5・8図)は幅広で東西に長い土壌で遺物を多量に含んでいた。SB-18の南辺に並行するようにあり、この建物に伴うものと考えられる。

SK-38 SK-38(第6図)はほぼ円形の浅い土壌で、SB-8と切り合っていた。SK-38の遺構検出と掘り下げの時点ではSB-8の柱穴は確認できず、SB-8の廃絶以後掘られた穴と考えられる。

SK-39 SK-39(第5図)は南北に長い穴と円形の穴が重なった形をしており、2つの穴が重なっている可能性があるが、埋土は同じであり、調査時点では確認できなかった。SK-39はSB-65の西辺に並行するようにあり、これに伴うものと考えられる。

SK-88 SK-88(第9図)はほぼ四角形に近いが北西隅がやや突出した形をしており、全体に浅く平らである。SB-39・40の北側に近接している。土器は比較的多く出土している。

SK-89 SK-89(第8図)はSE-6とSX-2を切るようにして掘られた穴で中心がやや深い。大型の須恵器の甕(第101図694)以外にも比較的多くの土器が出土しており、廃棄土壌と考えられる。SK-89は下層で埋土が異なり、部分的に深くなっているところがある(第70図)。

SK-90 SK-90(第8図)はSX-2の南辺に接するようにしており、SK-89の東側にはば連続している。SK-90は北側が深く溝状になっており、南側は浅くなっている(第70図)。埋土の観察からは切り合い関係ははっきりしなかったが、北側の深い溝が掘られてから、南側の浅い大型の土壌が掘られた可能性もある。北側の溝状になった部分からは、かなり焼き締まった焼土ブロックが集中的に出土しており、竈状の構造物を廃棄した可能性がある。

SK-91 SK-91(第8・70図)はSK-89を完掘した段階で南側を確認し、北側のSX-2部分では輪郭がはっきり確認できなかった遺構である。南側はほぼSE-6の平面形と合うが、この部分にはSX-2は無く、SE-6の一部であった可能性も否定できないが、断面の観察(第70図)からは本来SX-2の整地層の一部あるいはこれよりも上の層と考えられる。

SK-97 SK-97(第8図)は西側が溝により切られているが、505×330cmの隅丸長方形の浅い土壌で、SB-137とほぼ同じ規模である。しかし、柱穴や焼土等は確認できず、壁溝等の竪穴住居を推定できるような施設も確認されていない。

SK-118 SK-118(第8図、挿図23)は土壌の掘り込みが不明瞭であるが、遺物の出土状況から土壌の存在を推定した。SK-118は重機による表土除去の時点で、表土直下から炭と焼土の小ブロックと共に遺物が集中して出土する部分が確認されたため、遺物を柱状に残しながら精査を進めた結果、約320×130cmの範囲で遺物が集中して出土することが確認できた。遺物の出土したレベルもSX-2出土遺物よりは上層であり(挿図12)、位置関係からもSK-118はSX-2を切って掘り込まれた土壌であることが確認できた。

SK-120 SK-120(第10図、挿図22)は495×235cmのL字形をした浅い土壌であり、SB-35の南側約4mのところではSB-35の主軸に直交する位置にある。位置関係からはSB-35に伴うもので、SB-36とSK-121と同じ関係にあると考えられる。平面形はほぼ東西に長い長方形の東辺が南側にわずかに延びたL字形をしており、さらにこの西側にやや浅い方形の段が付属している。この部分はSK-121に付属するSK-109と同じ位置にあり、同様な機能を持ったものと推定できる。

出土遺物はほとんど小片になったものばかりであり、集中することなく全体に散在している。また、西側中央部には焼土が集中するところがあり、土壌が埋没する過程で投棄されたと考えられる。遺物の出土状況からも、SK-120には連続して一定期間遺物が投棄され続けた可能性が高く、遺構の特殊な形状と共に炊事に関する遺構であったと考えられる。

SK-121 SK-121(第10図、挿図21)は東西372cm以上、南北444cm、幅212cmのL字形をした浅い土壌であり、SB-36の南側約4mのところではSB-36の主軸に直交する位置にある。位置関係からはSB-36に伴うもので、SB-35とSK-120と同じ関係にあると考えら

れる。平面形はほぼ同じ幅の溝がL字に曲がった形をしており、この西側にSK-109が付属している。この部分はSK-120での状況と同じであり、同様な機能を持ったものと推定できる。

出土遺物はほとんど小片になったものばかりであり、集中することなく全体に散在している。遺物の出土状況からは、SK-120には連続して一定期間遺物が投棄され続けた可能性が高く、遺構の特殊な形状と共に炊事に関する遺構であったと考えられる。

SK-120の底部からはSB-36の柱穴が確認され、遺物の出土状況からもSB-36廃絶以後に掘られた土壌であることが確認できた。

SK-124~127 SK-124~127 (第12図)はSB-38とSB-50との間にあり、不整形の浅い土壌が連続した形をしている。SK-124とSK-126は遺物取り上げ時点で別遺構として扱ったが、同一の遺構と考えられる。SK-127とSK-125はSK-124の東西に連結している。位置関係からは、これらの土壌はSB-38・50と何らかの関係があると予想される。

#### 4. 不明遺構 (SX)

通常の土壌や掘立柱建物とは異なり、形態が特殊でその機能の推定が明確でないものについては、不明遺構として説明する。

SX-1 SX-1 (第67図)は第14次調査のU~W-15区にある溝状遺構である。幅約2m、長さ約14mの溝の西端に直径約4.5mのドーナツ状の溝が連結した形をしている。溝の東端は調査区外になっており、全長は不明である。溝の断面は浅く幅広いV字状で一度掘り直されていることが確認できた。ドーナツ状になった部分では柱穴等の上屋を推定できるような遺構は確認できず、中央にも何の施設も確認できない。SX-1は南北にある掘立柱建物に付随した遺構で、排水に関する施設である可能性が高い。

SX-2 SX-2 (第68~70図、写真図版21~24、29~33)は第5・6次調査区の北側で確認された遺構で、幅約2.5m、長さ約7.5mの長方形の浅い大型土壌とこれに伴う整地層と考えられるものである。SX-2の埋土は焼土と炭化物の小片を含んでおり、発掘区北側の表土層を除去しているときに確認された。分布範囲は発掘区の北側に広く広がっていたため当初これを整地層と考え、断ち割りのトレンチを縦横に入れた(第68図の各断面図に示した位置)。この結果、ほぼ中央部に長方形の浅い大型土壌が確認でき、断面b-b'、f-f'、g-g'においては、版築状の埋土が認められた。しかし、このような埋土は全体に渡って認められたのではなく、SX-2の東側の比較的深く掘り込まれた部分だけであり、西側部分では土壌自体の掘り込みも浅く、焼土、炭、地山ブロックをわずかに含んだ第1層(第69図1: 灰黒色シルト層)が確認されただけだった。また、西側では第1層は土壌の範囲を超えて北側に広がり、



遺物もこれに伴って出土している。

土城の東側では、大型の皿（第125図1126）と蓋（第123図1080）が重なった状態で出土している（写真図版24-2）。版築状になった層の中から、かなり潰れた状態で出土しており、土城の埋め戻しに際して埋納されたものである可能性が高い。土城の埋土は地山質の部分が多く、穴が掘られた直後に埋められた可能性が高く、意図的に整地された結果であると考えられる。

## 5. 溝（SD）

溝に関しては、東西南北に延びるものが多いが、全体を通して計画性を持って構築されたかどうかは現時点でははっきりしない。ほとんどの溝の所属時期は中世以後であり、近世以降のものが主体を占めている可能性が高い。溝の機能の点では、排水と土地の区画に関するものが主体であったと考えられる。また、今回報告する市道遺跡北半に広がる奈良・平安時代の掘立柱建物群に伴う1期～6期の溝は確認されていない。7期～9期の溝についても、掘立柱建物群を区画していると考えられるが、今回報告を行わない市道遺跡南半でも同様に広がっており、全体を通しての分析が必要であるため今回は詳細な説明は省略し、以後の報告で明らかにする。

市道遺跡は1996年3月末の時点で44次に及ぶ調査が行われ、現在でも調査は継続している。これらの調査の中で、同一の溝が複数の調査区に渡って確認されており、端部が確認できない溝がほとんどである。このため、溝の命名にあたっては調査時の遺構番号をそのまま使用することにした。例えば、25次・SD-1（第6図）は第25次調査区の中央で確認された溝である。また、東隣の16次調査で確認されたSD-8は25次・SD-1と同一の溝である可能性が高いが異なる名称になる。今回は暫定的にこのような名称を使用するが、統一的な名称は今後全体的な分析を進めた上で再考する。

今回図示した遺物も、その溝から出土した全時期の遺物を代表しておらず、奈良・平安時代の遺物を中心に一部を抽出したものである。

## 6. 井戸（SE）

井戸は今回の報告範囲内からは8基が確認されている。井戸の調査については、できる限り断ち割り調査を行ったが、宅地部分の調査においては重機による断ち割り調査が行えず、出土遺物や詳細についてははっきりしなかったものがある。

SE-1 SE-1（第10・66図、写真図版17-2）は第2次調査のO-20区で確認された。遺構検出面での直径は約150cm、底部の直径は約65cm、深さは約100cmである。現状では湧水は見られないが、9期の遺物が出土している。

SE-2 SE-2（第11図）は第1次調査のT-9区で確認された。遺構検出面での直径

は約550cm、上部の直径は約290cm、底部の直径は約200cm、深さは遺構検出面から約350cmである。かなり大型で深いために重機により断ち割って調査を行った。断ち割り調査の結果、井戸の底部には刳貫きの井筒と板材によって組まれた井戸枠の一部が残存していたが、井筒と井戸枠は底部に1mほど残っていただけであった。井筒は上半の太くなった部分で途切れており、遺構検出面や井戸上半部分が下半より広がっているのは、井筒が引き抜かれて再利用された時に掘り広げられたためと考えられる。底部には砂が敷かれ、井筒や井戸枠の裏込めには大小の礫が使われていた。

SE-2は第18次調査分にも含まれ、今回報告する掘立柱建物群だけでなく、南側の寺院址にも深く関係するものと考えられるので、遺構の構造等の詳細は次回の報告(市道Ⅱ・平成9年度刊行予定)で説明し、今回は概略のみを示した。

SE-3 SE-3(第9図)は第19次調査のQ-15区で確認された。検出面から1mほど掘り下げたが底部が確認できず、ほぼ垂直に下がっているのを井戸と判断し、全体写真終了後重機で断ち割って調査を行った。直径は遺構検出面で約370cm、深さは遺構面から約330cmである。重機による断ち割りでは、底部近くでかなりの湧水が見られたが、井戸枠、井筒等の施設は確認できなかった。出土遺物は9期の遺物が出土しており、9期に廃絶したと考えられる。

SE-4 SE-4(第13・66図、写真図版61-2)は第14次調査のU-16区で確認された。検出面から1mほど掘り下げた所が大きく崩れていたが2m程掘り下げたが底部は確認できず、ほぼ垂直に下がっているのを井戸と判断した。直径は遺構検出面で約150cm、深さは遺構面から約200cm以上であるが確認できていない。

SE-5 SE-5(第14・66図、写真図版62-1)は第14次調査のU-12区で確認された。南側は14次・SD-7により切られており、北側は50cm程オーバーハンクしている。直径は遺構中央部で約170cm、深さは遺構面から約200cmである。底部まで調査したが井戸枠、井筒等の施設は確認できず、湧水も見られなかった。SE-1等のように現在湧水しない井戸もあるので井戸としたが、他のものと断面形が異なり南側からの土の流入が見られる部分もあり、地下室等の遺構である可能性もある。出土遺物は9期の遺物が出土している。

SE-6 SE-6(第8・66図、写真図版23)は第5次調査のQ-11区で確認された。SK-89、SX-2の下から検出され、検出面から2mほど掘り下げたが底部は確認できなかった。平面形は240cm×240cmの方形で、深さは不明である。重機による断ち割り調査はできなかったが、埋土は他の井戸と異なりかなり地山質の土が版築状に突き固められて埋め戻されていることが確認できた。これは井戸の廃絶後この周辺が居住地として利用するために周到に埋め戻されたものと考えられる。埋土には遺物はほとんど含まれていないが、SE-6直上からは銅製の鈎帯金具がまとまって出土している。

SE-7 SE-7 (第6図、写真図版102-2)は第25次調査のL-13区で確認された。

検出面から130cmほど掘り下げたが底部が確認できず、ほぼ垂直に下がっているので井戸と判断したが、重機による断ち割り調査は行えなかった。直径は遺構検出面で約120cm、深さは不明である。埋土は上部の30cm程は黒色粘質土で下部の100cm程は貝が混じった茶褐色粘質土層である。

SE-8 SE-8 (第4図)は第9次調査のJ-21区で確認された。

検出面から2mほど掘り下げたが底部が確認できず、ほぼ垂直に下がっているので井戸と判断した。重機による断ち割り調査は行えなかった。直径は遺構検出面で約140cm、深さは遺構面から200cm以上である。出土遺物は7～9期の遺物が出土している。

SE-9 SE-9 (第5図)は第37次調査のL-11区で確認された。

検出面から1mほど掘り下げたが底部が確認できず、ほぼ垂直に下がっているので井戸と判断した。重機による断ち割り調査は行えなかった。直径は遺構検出面で約150cm、深さは遺構面から100cm以上である。出土遺物は7～9期の遺物が出土している。

## 第4章 遺物

北側掘立柱建物群出土の遺物はおよそ8世紀から13世紀頃の遺物を中心にして多種類の遺物が多量に出土している。今回の報告は、北側の掘立柱建物群についてのみであり、出土遺物についても南側の寺院址の整理が進めば、遺跡全体に対する更に詳細な状況が明らかになると考えられる。

そこで、以下ではまず各種類ごとに型式分類を行い、できる限り多くの型式を認定した。出土点数の少ない型式についてはさらに細分できる可能性が高いものも含まれるが、今回はまとめて示している。また、各型式の詳細は一覧表に示している（挿図8～17、挿表2～11）。今後、南側の寺院址の整理が進んだ段階で遺跡全体にわたる出土遺物の詳細な検討を行うこととし、今回は北側掘立柱建物群の変遷を復元するために、各型式のうち、ある程度時期を限定できる型式の組み合わせから時期区分を行った。時期区分と北側掘立柱建物群の変遷は第5章で詳しく説明することとし、ここでは、各種類ごとの分類について説明する。

北側掘立柱建物群出土の遺物は土器、金属器、その他の遺物に大別した。土器は須恵器～土製品の7種類144型式、金属器は銅製品、鉄製品の2種類、その他の遺物は石器、埴輪の2種類に分類した。これらも本来は個別の型式に含まれるものであるが、今回は出土点数が少ないため、細分するに至っていない。個々の遺物のデータについては一覧表にまとめてある（第1・2表参照）。

### 1. 土器

北側掘立柱建物群出土の土器は8世紀から10世紀頃と13世紀頃のものを中心になっている。出土した土器の種類は須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、中世陶器、陶磁器、土師器、土製品の7種類である。以下では各種類ごとに説明する。

#### A. 須恵器（挿図8～12、挿表2～6）

須恵器には、蓋、坏、碗、皿、盤、承盤、高盤、壺、鉢、甕、硯、罎、陶臼の13器種がある。

蓋には、古墳時代から続く合子状坏身の蓋である坏蓋1、箱坏・有台坏に伴う坏蓋2～7、壺蓋1・2、香炉蓋1・2、平頂蓋1・2の13型式がある。香炉蓋については、それぞれ小破片が1点のみで不明な点が多い。

坏には、古墳時代の合子状坏身からの系譜を引き、体部が丸く無高台の無台坏1～3、底部が平らで無高台の箱坏1～4、高台のある有台坏1～8の15型式がある。

碗には、高台端部が内外に張り出した碗1、高台が四角く灰釉陶器の模倣形態と考えられる碗2、稜碗1の3型式がある。

皿には、大型で底部が平らな皿1、小型で底部がやや丸い皿2、高台のある有台皿1の3型式がある。

盤には、口縁端部の形状と高台と器高の比率の違いから盤1～5の5型式が設定できる。

高盤には、環部の形状変化が盤とほぼ同様な高盤1～4の4型式がある。

承盤は1点のみ出土している。環部は大きく外反しているが、脚部は不明である。

壺には、水瓶1、短頸壺1～3、長頸壺1・2、平瓶1、横瓶1、小型壺1～4の12型式がある。

鉢には、口縁部形状の違いから鉢1・2の2型式がある。

甕には、口縁端部の形状の違いと口縁部外面における波状文や円形浮文等の装飾の有無、丸底、平底の底部形状の違いから甕1～3の3型式がある。

硯は、方形スカシの円面硯があるが全形を復元できるものではなく、細分はできない。

甌は、口縁部が比較的広がる大型のものと体部も小さい小型のものがあるが、出土量が少なく現状では細分が難しい。

陶臼は、底部付近のみで口縁部まで復元できるものはない。出土量は少なく現状では細分が難しい。

## B. 灰釉陶器 (挿図12・13、挿表6・7)

灰釉陶器には碗、皿、蓋、壺、鉢の5器種がある。須恵器より出土点数が際だって少なく、各時期に本来ある型式のうち、出土していないものが多い。

碗は法量の違いから大碗、碗、小碗、体部の形状と高台の形状の違いから深碗が分類でき、碗については法量や製作技法の違いから大碗1、碗1～6、小碗1、深碗1の9型式に細分できる。碗はほぼ各時期のものが出土しており、碗1・2が黒笹14号窯期、碗3が黒笹90号窯期、碗4が折戸53号窯期、碗5が東山72号窯期、碗6が百代寺窯期にほぼ対応すると考えられる。

皿は形状の違いから皿、段皿、三足盤、小皿、托、耳皿に分類でき、製作技法の違いから皿1・2、段皿1・2、三足盤1、小皿1、托1、耳皿1・2の9型式に細分できる。

蓋は壺の蓋が確認されている。短頸壺の蓋である可能性がある。

壺は短頸壺、長頸壺、広口瓶、平瓶があるが出土量が少なく細分が困難である。

鉢は足高鉢がある。体部が直線的に伸び、高台が高く伸びるものである。これ1点しか確認できず、相伴した資料は灰釉陶器の碗(929～932)である。胎土もやや白く灰釉陶器と同様であるが、施釉はされていない。あるいは、須恵器と分類するべきかもしれない。

## C. 緑釉陶器 (挿図7)

北側掘立柱建物群からは、緑釉陶器の碗が1点出土している(挿図7)。法量は高台径が66mm、高台高5mmである。胎土は細かく、色調は灰褐色である。軸は内外面全面に施されており、色調は緑色である。体部は残っていないが、高台は外側に開く折戸53号窯の時期のもので、豊橋市南東部に分布する灰釉陶器窯跡群である二川窯の製品である可



挿図7 緑釉陶器実測図(1/3)

能性が高いと考えられる。緑釉陶器は南側の寺院址で段皿等が数点出土している程度で、市道遺跡全体でも出土量は少ない。

#### D. 中世陶器 (挿図13~15、挿表7~9)

中世陶器は碗、皿、鉢、甕の4器種がある。

碗は口縁部、体部、高台の形状や施釉の有無等から碗1~6の6型式に細分できる。6は常滑窯産の可能性がある。

皿は有高台の小碗と無高台の小皿がある。小碗は三角形の低い高台が付き、口縁部外面が強クナデられ、口縁部が端反りになっている小碗1がある。小皿は無高台で器高が高いものから低いものへと変化しており、小皿1~3の3型式に細分できる。

鉢は口縁部の形状や高台の有無から、鉢1~3の3型式に分類できる。鉢1・3は内面がかなり磨滅しており、挿鉢として使用されたと考えられる。

甕は広口で大型の甕1と小型の甕2がある。甕1は渥美、甕2は常滑の製品である。

#### E. 陶磁器 (挿図14~15、挿表9)

陶磁器は中国からの輸入陶磁器と瀬戸産のものである。出土点数も少なく、全形を復元できる資料も少ないが碗と皿の2器種がある。

碗は蓮弁文の青磁である碗1、劃花文の青磁である碗2がある。

皿は白磁の皿1、瀬戸産の灰釉折縁皿である皿2がある。

#### F. 土師器 (挿図15~17、挿表9~11)

北側獨立柱建物群出土の土器では土師器の出土量が非常に少ない。また、器種も少なく出土量のほとんどは甕に限られている。従って甕以外の器種については不明な点が多い。土師器は甕、把手付甕(鍋)、鉢、蓋、皿、小皿、托、坏、三足鉢、碗、高盤の11器種である。

甕には外面タテハケ調整で胴部最大径がやや上にあり、下半がすばまり平底で遠江に分布する型式である遠江型1(仮称)、内外面ナデ調整で丸底の三河型1~4、器壁が厚く、口縁部が肥厚し、半球形胴部の清郷型1~3、頸部がくびれ口縁部が折り返された伊勢型鍋1の9型式がある。

遠江型は8世紀前半に遠江地域に分布する土師器甕と同型式と考えられ、ここからの搬入品である可能性がある。しかし、市道遺跡では出土していないが、7世紀の在地系の甕は同じくハケ調整を基本としており、この系譜を引く可能性もある。

三河型は内外面ナデ調整であることが最大の特徴であるが、口縁部と胴部の形態の違いから三河型1~4の4型式に細分できる。また、法量の点では大小二つに細分できそうであるが、定量的な分析はまだ行っていない。三河型1は長胴で口縁部がやや上方に長く伸び、前段階の甕の形態と共通するようである。三河型2は球形胴で口縁部がほぼ水平に引き出され、口縁部と頸部が回転台を使ったように平滑にナデられている。三河型3・4は口縁部が短くなり、端

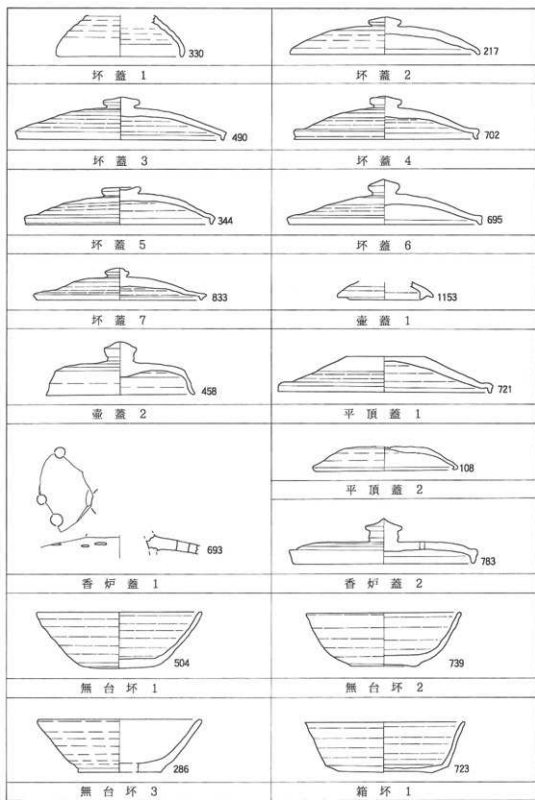


插图 8 土器型式分類圖-1

挿表2 土器型式分類表-1

番号	遺物番号	種類	器種	型式	特徴
1	330	須恵器	蓋	坏蓋1	体部・天井部が丸い合子状坏身の蓋。
2	217	須恵器	蓋	坏蓋2	体部は笠形、口縁端部は折れずに下方に曲がる。
3	490	須恵器	蓋	坏蓋3	体部は笠形、口縁端部は下方に折れる。
4	702	須恵器	蓋	坏蓋4	体部は陣笠形、口縁端部は下方に折れ、さらに外側に引き出されている。
5	344	須恵器	蓋	坏蓋5	体部は陣笠形、口縁端部は下方に折れ、さらに外側に引き出されている。鈕は中央が凹むボタン状。猿投窯産
6	695	須恵器	蓋	坏蓋6	体部は偏平になり口縁部の折返しはわずかで三角形になる。
7	833	須恵器	蓋	坏蓋7	体部は偏平になり口縁部の折返しは痕跡状になる。鈕は小さくなる。
8	1153	須恵器	蓋	壺蓋1	口径は小さく小型で天井部は丸く、内面に返りがある。
9	458	須恵器	蓋	壺蓋2	口縁部は直角に近く下方に曲がり、深い。
10	693	須恵器	蓋	香炉蓋1	天井部には円形の刺突がある。全形は不明であり、あるいは香炉の蓋ではない可能性もある。
11	783	須恵器	蓋	香炉蓋2	器高は低く偏平で、口縁部は直角に下方に曲がる。天井部に小さな穴がある。つまみは太く高い。
12	721	須恵器	蓋	平頂蓋1	天井部外面はヘラケズリされ、上部は平らで明瞭な稜を持つ。無鈕。
13	108	須恵器	蓋	平頂蓋2	天井部外面はヘラケズリされるが明瞭な稜はない。口縁端部は内側に曲がっている。無鈕。
14	504	須恵器	坏	無台坏1	体部は丸く、底部はヘラ起こし未調整あるいはヘラケズリ。
15	739	須恵器	坏	無台坏2	体部は丸く、底部は糸切り未調整。
16	286	須恵器	坏	無台坏3	体部は直線的に開き、底部は糸切り未調整。
17	723	須恵器	坏	箱坏1	体部はやや外反し、直線的に開く。底部は2段のヘラケズリで明瞭な稜を持つ。
18	653	須恵器	坏	箱坏2	体部はやや外反し、直線的に開く。底部はヘラケズリでナデによる段を持つ。
19	937	須恵器	坏	箱坏3	体部はやや外反し、直線的に開く。器高が高いものが見られる。底部は平らで1段のヘラケズリ。
20	596	須恵器	坏	箱坏4	器高は高く、底部は平らで1段のヘラケズリ、底



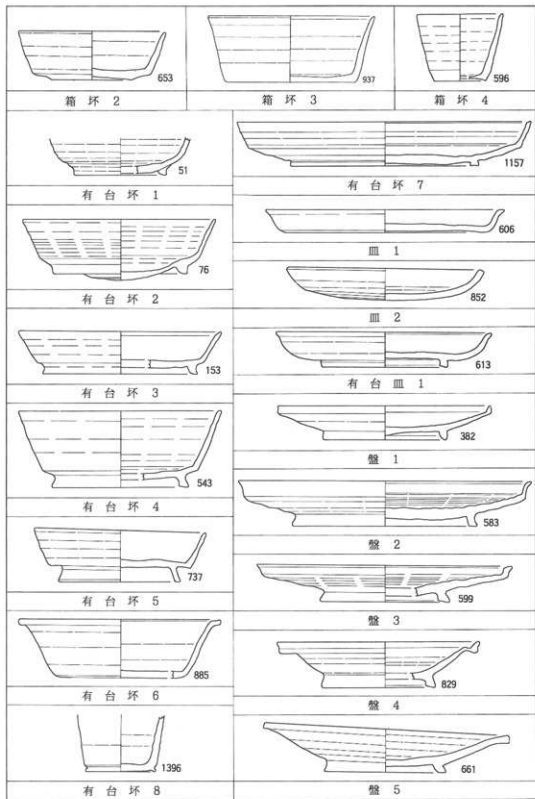


插图 9 土器型式分類图 - 2

挿表3 土器型式分類表-2

番号	遺物番号	種類	器種	型式	特徴
					部径が小さく体部は外側に開く。
21	51	須恵器	坏	有台坏1	体部が丸く、腰が不明瞭で底部が突出する。高台は低く、内傾面をもつ。
22	76	須恵器	坏	有台坏2	体部は直線的でやや外反し、底部は突出する。高台は低く、内傾面をもつ。
23	153	須恵器	坏	有台坏3	体部は直線的でやや外反し、底部はほぼ平らにヘラケズりされている。高台は高くなり、内面に面を持つものもある。
24	543	須恵器	坏	有台坏4	体部は直線的に伸び、底部はほぼ平らにヘラケズりされている。高台は高く、端部が内外面に張り出す。猿投窯産
25	737	須恵器	坏	有台坏5	体部は直線的に立ち上がり、底部は平らにヘラケズりされている。高台は更に高く、細長く長方形になる。
26	885	須恵器	坏	有台坏6	体部はやや外側に開き、口縁端部が強く引き出されているもの。今回の資料では高台は確認できないが湖西窯に類例がある。
27	1157	須恵器	坏	有台坏7	口径が大きく、体部は直線的に立ち上がる。高台は径が小さく低い。
28	1396	須恵器	坏	有台坏8	口径は小さいが器高が高く、コップ状になる。高台は底部外端に付く。
29	606	須恵器	皿	皿1	底部は平らで腰が明瞭。口縁端部はやや外側に引き出されている。
30	852	須恵器	皿	皿2	底部がやや丸く、腰が不明瞭。体部も丸い。
31	613	須恵器	皿	有台皿1	体部は丸く口縁部がやや引き出されている。高台は四角形に近く、やや内傾した面をもつ。皿2に高台がついたもの。
32	382	須恵器	盤	盤1	口縁部が短く直立する。高台の内側に面をもつ。
33	583	須恵器	盤	盤2	口縁部がわずかに外反しながら長く伸びる。体部はやや丸味をもっている。口径に対して高台径が大きい。
34	599	須恵器	盤	盤3	口縁部が外側に引き出され、端部に内傾面を持つ。体部は直線的でやや外反している。高台は径が小さくなり、端部は内外に張り出している。

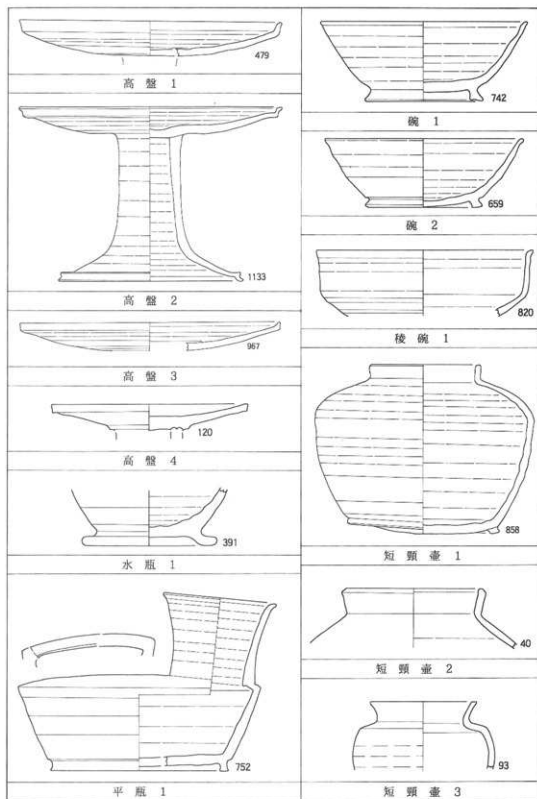
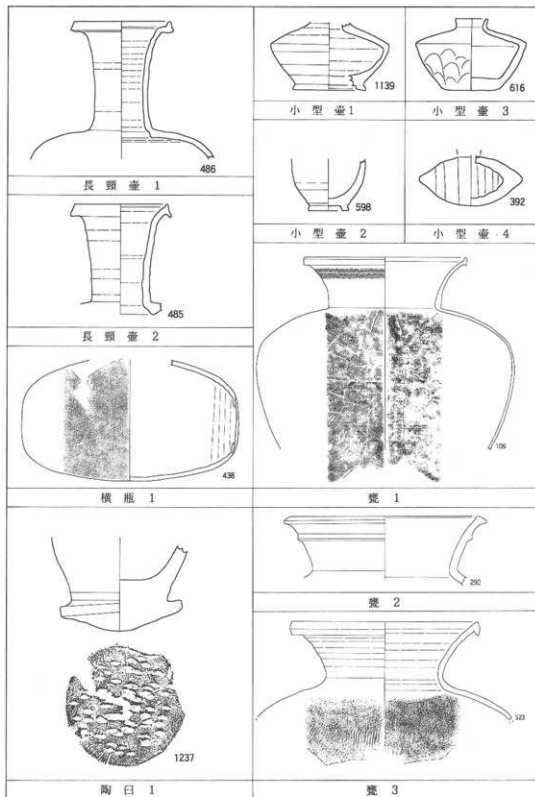


插图10 土器型式分類图-3

挿表4 土器型式分類表-3

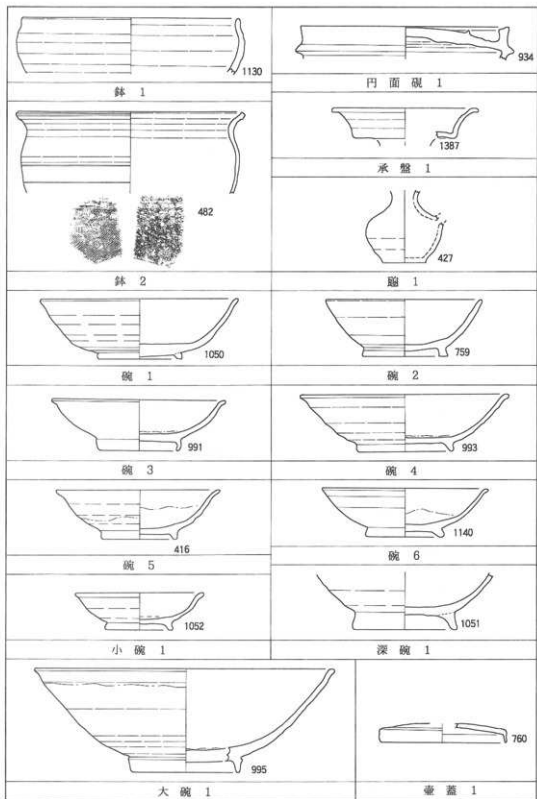
番号	遺物番号	種類	器種	型式	特徴
35	829	須恵器	盤	盤4	口縁部は下方に屈曲し、端部の内傾面は不明瞭になる。口径は小さいが、体部がやや上方に開き高くなる。高台径は更に小さくなり、内傾面をもつ。
36	661	須恵器	盤	盤5	口縁部は折り返されず、端部付近でやや水平方向に引き出される。体部は直線的に開き、器高は低い。高台は外側に張り出している。
37	479	須恵器	高盤	高盤1	体部は丸く、口縁部が上方に伸び、やや外側に引き出されている。端部に面はない。脚部は不明。
38	1133	須恵器	高盤	高盤2	体部は直線的で口縁部は直立したのち外側に引き出され、端部に内傾面を持つ。脚部は棒状に伸びたのちに外側に広がる。端部は口縁部と同様に整形されている。
39	967	須恵器	高盤	高盤3	体部は直線的で口縁部は小さくわずかに立ち上がる。脚部は不明。
40	120	須恵器	高盤	高盤4	体部は直線的に開き、口径が小さい。口縁部は直線的に終わり、立ち上がらない。体部と脚部との接合部に低い突帯がめぐらされている。脚部は不明。
41	742	須恵器	碗	碗1	底部はやや小さく、体部は外側を開く。高台は内傾面あるいは内外に張り出す。
42	659	須恵器	碗	碗2	底部がやや大きく、高台は角高台に近い。灰釉陶器碗1の模倣品の可能性が高い。
43	820	須恵器	碗	稜碗1	体部下半で折れ、稜をもつ。口縁部は僅かに引き出されている。底部は不明である。
44	391	須恵器	壺	水瓶1	底部付近しか確認できないが、脚台が外側に強く引き出されているもの。
45	752	須恵器	壺	平瓶1	天井部はやや低く、体部は直線的である。口縁部は開き、径も高さも大きい。高台は直立し端部がやや拡がっている。
46	858	須恵器	壺	短頸壺1	胴部は逆台形で肩が強く張る。口縁部は短く直立し、底部は突出して径が大きい。高台は断面四角形で低い。
47	40	須恵器	壺	短頸壺2	胴部は肩が張らずやや下方に下がり、口縁部はやや外反している。



挿図11 土器型式分類図-4

挿表5 土器型式分類表-4

番号	遺物番号	種類	器種	型式	特徴
48	93	須恵器	壺	短頸壺3	胴部は肩が張り、胴部最大径がほぼ中心近くにある。口縁部は長く伸び、外反している。
49	486	須恵器	壺	長頸壺1	頸部は中央やや下方がもっとも細く、口縁端部は水平に引き出されたあと上につまみ出されている。
50	485	須恵器	壺	長頸壺2	頸部は全体的に外側にやや開いている。口縁端部は上下に拡張され、明瞭な面をもっている。
51	1139	須恵器	壺	小型壺1	胴部は肩が張り、高台は外側に開き、内傾面を持つ。
52	598	須恵器	壺	小型壺2	胴部は丸く、高台は四角でやや外側に開く。
53	616	須恵器	壺	小型壺3	胴部は肩が張り、下半はヘラケズリされている。口縁部は短く立ち上がる。
54	392	須恵器	壺	小型壺4	胴部は丸く両端はとがっている。皮袋形壺の小型品。
55	438	須恵器	壺	横瓶1	胴部は断面円形で両端はやや平坦である。口縁部は不明である。
56	1237	須恵器	陶臼	陶臼1	体部は直線的に開き、底部は肥厚し径が大きい。底面には刺突がある。
57	106	須恵器	甕	甕1	頸部外面に刺突文あるいは波状文を施し、円形浮文が施されているものもある。口縁部はわずかに直立したのち外反し、端部が上下に拡張されている。
58	290	須恵器	甕	甕2	頸部外面には低い突帯があり、口縁部は直線的に外反したのち外側に引き出され端部に広い面をもつ。
59	523	須恵器	甕	甕3	頸部外面には低い突帯があり、頸部は丸い。口縁部は外反し、端部が下に伸びる。
60	1130	須恵器	鉢	鉢1	胴部は最大径が上部にある。口縁部は内傾したのち短く直立する。
61	482	須恵器	鉢	鉢2	胴部最大径が上部にあり、頸部は明瞭にくびれている。口縁部は外反し、端部が肥厚している。
62	934	須恵器	碗	円面碗1	脚には方形透かしが入る。全体形のわかるものはない。
63	1387	須恵器	承盤	承盤1	杯部の底部は平らで、体部は外反している。脚台が付くが形状は不明である。

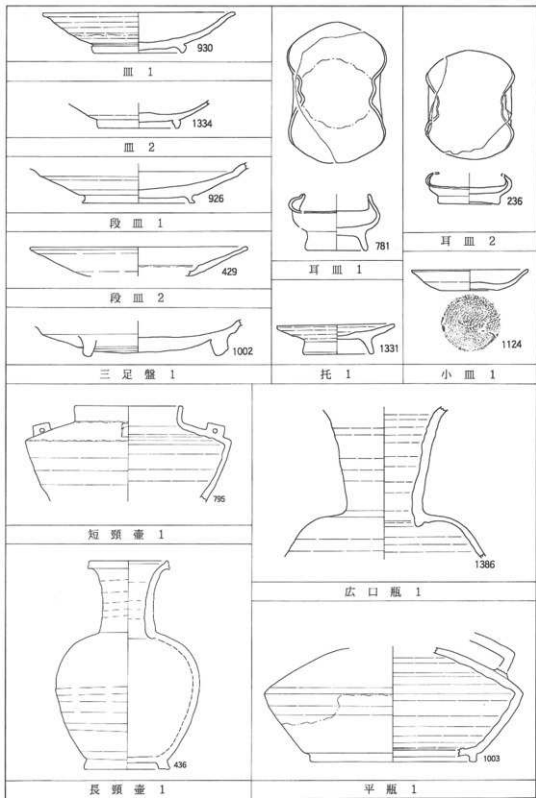


挿図12 土器型式分類図-5

挿表 6 土器型式分類表-5

番号	遺物 番号	種 類	器種	型 式	特 徴
64	427	須恵器	甌	甌 1	頸部はしまり、外側に開く。口縁部は短く開き口 径も小さい。
65	1050	灰釉陶器	碗	碗 1	底部は厚く、やや腰が張り、高台は小さな角高台 である。軸は内面にハケ塗りされるものと無軸の ものがある。焼成は三又トチによる。
66	759	灰釉陶器	碗	碗 2	底部はヘラケズリ、器壁はやや厚く、体部は直線 的に開き、太い角高台がつくもの。軸は内面にハ ケ塗りされるものと無軸がある。焼成は三又トチ による。
67	991	灰釉陶器	碗	碗 3	底部はヘラケズリ、器壁はやや薄く、底部はやや 小さくなり、体部は直線的に伸びる。軸は内外面 にハケ塗りまたは無軸。重ね焼き。
68	993	灰釉陶器	碗	碗 4	底部は糸切り未調整、器壁は薄く、体部は直線的 に伸びる。口径は小さく、高台は低くなる傾向に ある。軸は口縁部に漬け掛けまたは無軸。重ね焼 き。
69	416	灰釉陶器	碗	碗 5	底部は糸切り未調整、器壁は薄く、体部は丸く、 口縁端部の端反りが強い。口径は小さく、高台は 低くなる傾向にある。軸は口縁部に漬け掛けまた は無軸。重ね焼き。
70	1140	灰釉陶器	碗	碗 6	底部は糸切り未調整、器壁は薄く、口径も高さも 小型化し、高台は低くなる傾向にある。軸は口縁 部に漬け掛けまたは無軸。重ね焼き。
71	1052	灰釉陶器	碗	小碗 1	底部は糸切り未調整、器壁は薄く、口径10cm程で ある。軸は口縁部に漬け掛けまたは無軸。重ね焼 き。
72	995	灰釉陶器	碗	大碗 1	底部は糸切り未調整、口径が大きく、体部は外側 に開く。軸は内外面にハケ塗り。重ね焼き。
73	1051	灰釉陶器	碗	深碗 1	底部は糸切り未調整、器壁は薄く、体部は腰が張 り、高台は細く高い。重ね焼き。
74	760	灰釉陶器	蓋	壺蓋 1	天井部は平坦で口縁端部は折れて長く伸びる。軸 は内外面にハケ塗りされている。
75	930	灰釉陶器	皿	皿 1	底部はヘラケズリ、器壁はやや薄く、体部は直線 的に伸びる。軸は内面あるいは内外面にハケ塗り

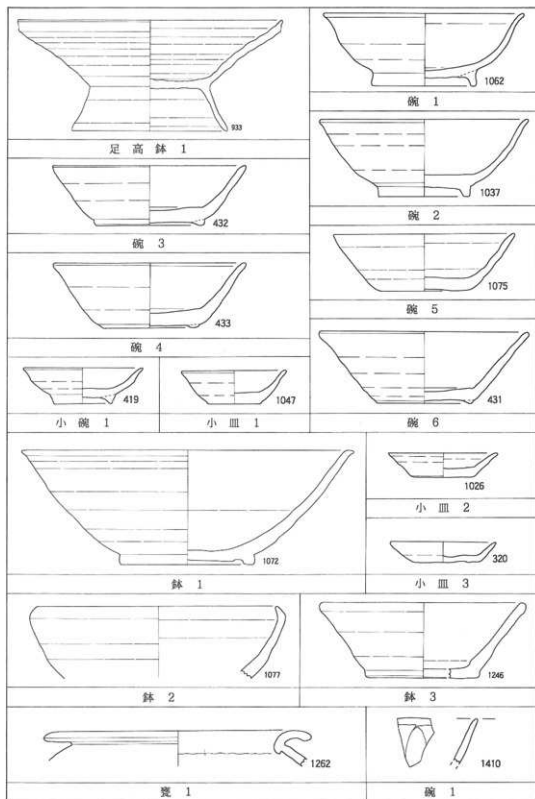




挿図13 土器型式分類図-6

挿表7 土器型式分類表-6

番号	遺物番号	種類	器種	型式	特徴
					または無軸。重ね焼き。
76	1334	灰軸陶器	皿	皿2	底部は糸切り未調整、器壁は薄く、体部は直線的に伸びる。口径は小さく、高台は低くなる傾向にある。軸は口縁部に漬け掛けまたは無軸。重ね焼き。
77	926	灰軸陶器	皿	段皿1	底部は厚く、段はやや不明瞭。高台は外側に張り出し、小さい。
78	429	灰軸陶器	皿	段皿2	底部はヘラケズリ、器壁はやや薄く、体部は直線的に伸びる。軸は内面あるいは内外面にハケ塗りまたは無軸。重ね焼き。
79	1002	灰軸陶器	皿	三足盤1	底部は厚く、棒状の短い足が付くが全体は不明である。
80	781	灰軸陶器	皿	耳皿1	口径はやや大きく、高台は細く長い。
81	236	灰軸陶器	皿	耳皿2	口径は小さく、底部は突出し、糸切り未調整で高台はない。
82	1331	灰軸陶器	皿	托1	口径は小さく、高台は細く長い。
83	1124	灰軸陶器	皿	小皿1	底部は糸切り未調整、口径は小さく、器高も低く高台はない。
84	795	灰軸陶器	壺	短頸壺1	肩が張り、明瞭な稜を持つ。口縁部は短く直立する。肩部には方形の鈕が4ヶ所ある。
85	436	灰軸陶器	壺	長頸壺1	肩部は丸く、胴部はやや直線的である。頸部は真っ直ぐ上に立ち上がり、口縁部は小さく開き端部は上下に拡張されている。高台は四角形で太い。
86	1386	灰軸陶器	壺	広口瓶1	肩はやや張り、頸部は直線的に開き、口縁部は外反する。
87	1003	灰軸陶器	壺	平瓶1	天井部は盛り上がり丸い。高台は四角形で太い。軸は胴部上面を中心にハケ塗りされている。
88	933	灰軸陶器	鉢	足高鉢1	体部は直線的に大きく開き、高台は細長く外側に開き非常に高い。
89	1062	中世陶器	碗	碗1	体部は腰が張り丸く、口縁部は外面がナデられ端反りになる。底径は大きく、高台は三角形状で高い。4方向に輪花があり、口縁部の3あるいは4ヶ所に灰軸が漬け掛けされている。高台端部の粉殻痕や砂痕は明瞭でない。



挿図14 土器型式分類図-7

挿表8 土器型式分類表-7

番号	遺物番号	種類	器種	型式	特徴
90	1037	中世陶器	碗	碗2	体部の腰の張りはやや緩くなり、口縁部外面のナデも目立たなくなる。口縁端部は僅かに端反りになる。底径はやや小さくなり、高台はやや低くなる。高台端部の粉殻痕や砂痕が顕著になる。
91	432	中世陶器	碗	碗3	体部の腰の張りがなくなり、直線的に伸びるようになる。口縁部の端反りはほとんどなくなる。高台は低くつぶれる。高台端部の粉殻痕や砂痕は顕著である。
92	433	中世陶器	碗	碗4	体部の腰の張りがなくなり、直線的に伸びるようになる。口縁部の端反りはなくなる。高台は低くつぶれ、痕跡程度になる。高台端部の粉殻痕や砂痕は顕著である。
93	1075	中世陶器	碗	碗5	体部は直線的に伸び、器高は低くなる。無高台である。
94	431	中世陶器	碗	碗6	体部は直線的に伸び、僅かに外反する。底径が小さく、高台は低く底部外端に付く。
95	419	中世陶器	碗	小碗1	体部はやや腰が張り、口縁部は外面がナデられ端反りになる。底径は大きく、高台は三角形で高い。高台端部の粉殻痕や砂痕は明瞭でない。
96	1047	中世陶器	皿	小皿1	体部はやや腰が張り、口縁部は外面がナデられわずかに端反りになる。底部は糸切り未調整で無高台である。
97	1026	中世陶器	皿	小皿2	体部はやや直線的になり、器高が低くなる。底部は糸切り未調整で無高台である。
98	320	中世陶器	皿	小皿3	体部は直線状で、器高はさらに低くなる。底部は糸切り未調整で底径が大きくなる。
99	1072	中世陶器	鉢	鉢1	腰はやや丸く、体部は直線的に伸び、口縁端部は僅かに引き出される。底部は小さく高台は四角で低い。
100	1077	中世陶器	鉢	鉢2	体部はやや丸く僅かに内湾し、口縁端部は内傾している。
101	1246	中世陶器	鉢	鉢3	体部は直線的に外側に伸び、僅かに外反している。底部はやや径が大きい平底で無高台である。
102	1262	中世陶器	甕	甕1	口縁部は外湾し、かつ外反している。

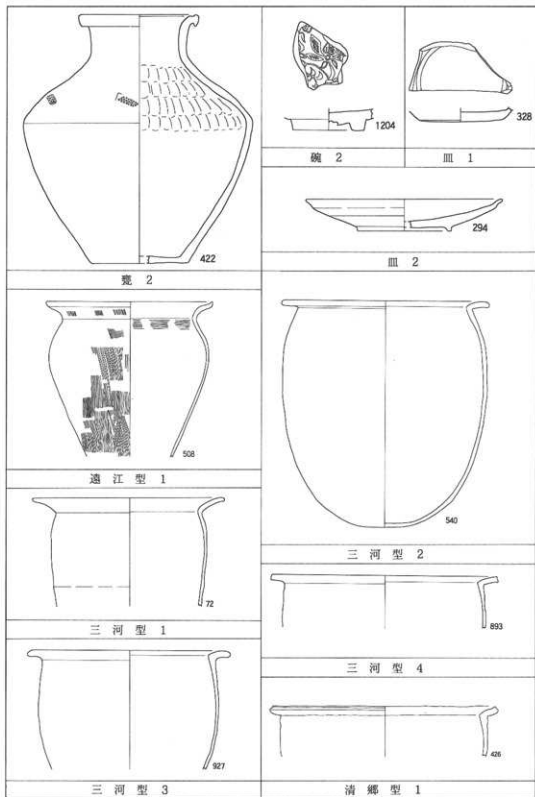
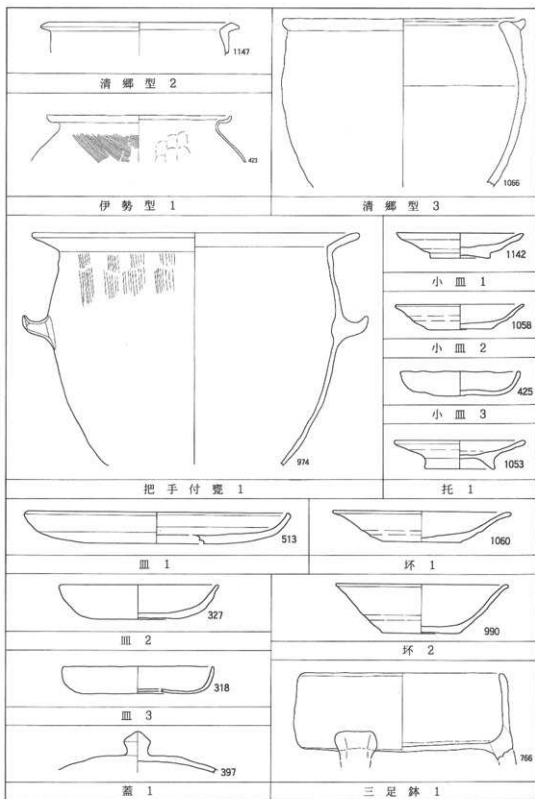


插图15 土器型式分類図-8

挿表9 土器型式分類表-8

番号	遺物番号	種類	器種	型式	特徴
103	422	中世陶器	甕	甕2	胴部は肩が張り、明瞭な稜を持つが、直線的である。頸部は直立し、口縁部は上下に拡張されている。
104	1410	陶磁器	碗	碗1	青磁である。体部外面に蓮弁文がある。
105	1204	陶磁器	碗	碗2	青磁である。高台は削り出して方形、内面見込みには沈線文がある。
106	328	陶磁器	皿	皿1	白磁である。底部は平らで内面見込みに圈線がある。
107	294	陶磁器	皿	皿2	瀬戸産である。器壁は厚く、高台は四角で小さい。口縁端部はやや上方に引き出されている。折線皿である。
108	508	土師器	甕	遠江型1	口縁部は緩やかに外反し、端部をつまみ上げる。胴部最大径は上方にあり、肩が張った形をしている。底部は平底。体部外面にはハケ調整を顕著に残す。
109	72	土師器	甕	三河型1	口縁部は斜め上方に長く伸び、胴部は長胴化する。体部外面にはハケ調整の痕跡を残すものもある。
110	540	土師器	甕	三河型2	口縁部は水平に近く伸びて短くなる。胴部は長胴であるが丸味を帯び、底部は丸底である。頸部はやや内湾している。口縁部付近の内外面が平滑になるほど丁寧にナデられているが、体部は小さな凹凸がありユビオサエで調整されている。色調は白色に近いものが多い。
111	927	土師器	甕	三河型3	口縁部は短くなり、端部が丸くなる。胴部が短くなる。
112	893	土師器	甕	三河型4	口縁部はほぼ水平に伸びるが、端部に明瞭な面を持つ。頸部の内湾はなくなり、直立するようになる。胴部の丸味がなくなる。
113	426	土師器	甕	清郷型1	口縁部が肥厚すると共に上方へつまみ上げている。全形を推定できる資料はないが、体部は半球形を呈すると考えられる。内面はナデ、外面はユビオサエ。
114	1147	土師器	甕	清郷型2	口縁部は肥厚し上方に稜がある。全形を推定できる資料はないが、体部は半球形を呈すると考えら

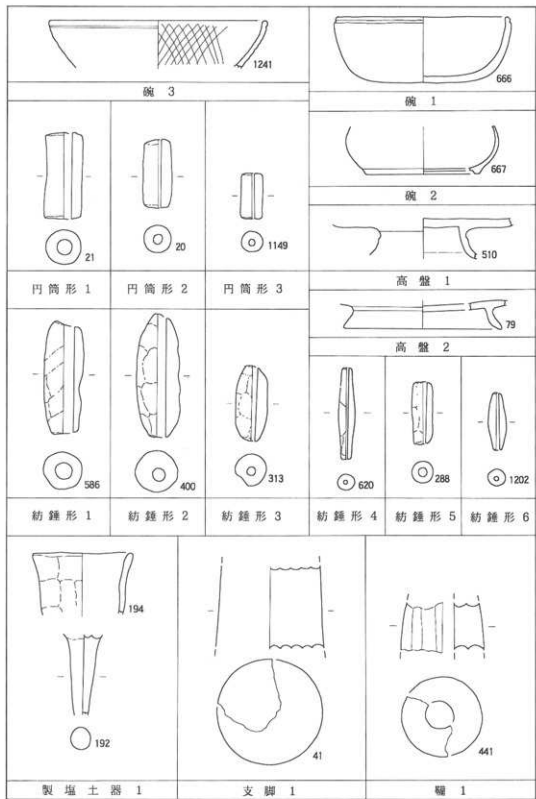


挿図16 土器型式分類図-9

挿表10 土器型式分類表-9

番号	遺物番号	種類	器種	型式	特徴
					れる。内面はナデ、外面はユビオサエ。
115	1066	土師器	甕	清郷型3	口縁部はやや内傾し、口縁端部上面はナデにより窪んでいる。体部は球形に近い。内面はナデ、外面はユビオサエ。
116	423	土師器	甕	伊勢型1	口縁部は緩やかに外反し、端部は内側に折り返されている。体部は偏球形。内面はユビオサエ、外面は体部上半はハケ、下半はケズリ。器壁は極めて薄い。
117	974	土師器	甕	把手付甕1	口縁部はやや上方に直線的にのび、内面に稜をもつ。体部外面にはわずかにハケが見られる。把手は胴部最大径の辺りに付いている。
118	513	土師器	皿	皿1	扁平で径が大きい。内面は丁寧なナデ、外面はナデである。
119	327	土師器	皿	皿2	底部はやや丸く緩く外側に開く。内面は丁寧なナデ、外面はナデである。
120	318	土師器	皿	皿3	器壁が薄く、内面は丁寧なナデ、外面はユビオサエである。
121	1142	土師器	皿	小皿1	底部は糸切り未調整でやや突出している。内外面ロクロナデ。
122	1058	土師器	皿	小皿2	底部は糸切り未調整、体部は直線的に開きわずかに外反するものもある。内外面ロクロナデ。
123	425	土師器	皿	小皿3	口縁端部はほぼ直立し、内面は丁寧なナデ、外面はユビオサエである。
124	1060	土師器	坏	坏1	底部は糸切り未調整で体部は直線的に外側に開くが器高が低い。調整は内外面ともナデ。
125	990	土師器	坏	坏2	底部は糸切り未調整で体部は直線的に外側に開くが器高が高い。調整は内外面ともナデ。
126	397	土師器	蓋	蓋1	口縁端部は不明であるが、背の高い宝珠つまりがつく。外面には赤色顔料。
127	766	土師器	鉢	三足鉢1	底部は平らで、3ヶ所に棒状の足が付く。体部はほぼ直立する。内外面ナデ調整。
128	1241	土師器	碗	碗1	体部は直線的に開き、口縁端部でやや内湾する。内外面ナデで内面に暗文がある。
129	666	土師器	碗	碗2	腰が張り、体部はやや内湾する。口縁部外面に沈





挿圖17 土器型式分類圖-10

挿表11 土器型式分類表-10

番号	遺物番号	種類	器種	型式	特徴
					線がある。内面はナデ、外面はユビオサエ。
130	667	土師器	碗	碗3	底部には断面四角形の小さな高台がある。体部は丸く、内湾しているが口縁部は不明で、器形ははっきりしない。
131	510	土師器	高盤	高盤1	全体形がわかるものはないが、底部は平らで径は大きく、脚台は高く端部は外側に向かって広がる。
132	79	土師器	高盤	高盤2	全体形がわかるものはないが、底部は平らで径は大きく、脚台はやや低い。
133	21	土製品	土鍾	円筒形1	太い円筒形で表面は丁寧にナデている。
134	20	土製品	土鍾	円筒形2	細い円筒形で表面は丁寧にナデている。
135	1149	土製品	土鍾	円筒形3	小型の円筒形で表面は丁寧にナデている。
136	586	土製品	土鍾	紡錘形1	端部が太く、やや四角い紡錘形で表面はユビオサエであまり調整していない。色調は灰白色。
137	400	土製品	土鍾	紡錘形2	端部が細い紡錘形で表面はユビオサエであまり調整していない。
138	313	土製品	土鍾	紡錘形3	小型の紡錘形で表面はユビオサエであまり調整していない。
139	620	土製品	土鍾	紡錘形4	細い紡錘形で表面はユビオサエであまり調整していない。
140	288	土製品	土鍾	紡錘形5	端部が太く、やや四角い紡錘形で表面はユビオサエであまり調整されていない。
141	1202	土製品	土鍾	紡錘形6	胴が張った紡錘形で表面は丁寧なナデ。
142	194	土製品	製塩土器	製塩土器1	支脚は細い棒状で先端はとがっている。体部は緩く直立し、口縁部近くはわずかに外反する。内外面ともユビオサエである。
143	41	土製品	支脚	支脚1	断面円形で外面はナデ。
144	441	土製品	輪の羽口	輪1	断面円形で先端が細くなっている。

部に面を持つようになるもので、三河型2からの型式変化と考えられる。三河型2～4は三河に特徴的に分布する型式で市道遺跡では主体になっている。

伊勢型鍋1は器壁がきわめて薄く、頸部が明瞭にきびれ、体部外面ハケ調整で口縁部が折り返されている。市道遺跡・公文遺跡等の12～13世紀頃の中世陶器に伴う土師器煮炊具はほとんどが伊勢型鍋であり、この時期の煮炊具としては最も一般的なものである。

把手付甕(鍋)は外面の頸部近くにタテハケがわずかに残っている。胴部最大径の所の両側に把手が付けられているが、底部は不明である。

蓋は背の高い宝珠擠みのものであるが詳細は不明である。

皿は口縁部が緩やかに立ち上がり、大型の皿1、小型の皿2、口縁部が上に立ち上がり、器壁が薄く内面がていねいにナデ調整されている皿3の3型式がある。

小皿はロクロ調整の小皿1・2と手捏ねの小皿3の3型式がある。

托は高台が低く、口径も小さい。また、見込みの段は見られない。

坏は体部が直線的に斜め上方に開くものである。器高が低い坏1、高い坏2の2型式がある。

三足鉢は底部が平たく、体部が直立し、口縁部は丸い。足は細い棒状である。

碗は体部が丸く内湾しているものである。碗1は体部が直線的に開き口縁端部が内湾し、内面に暗文がある。碗2は腰が張り、体部が内湾し口縁端部外面に沈線がある。碗3は小さな高台があり、体部はかなり内湾するが全体は不明である。

高盤は高い脚台がつくものである。全形がわかるものはないが、とりえず裾広がり高い脚台の高盤1、やや低い脚台の高盤2の2型式がある。

## G. 土製品(挿図17、挿表11)

土製品は土鍾、製塩土器、支脚、甕の羽口の4器種である。

土鍾は円筒形をした円筒形1～3、紡錘形をした紡錘形1～6の9型式がある。円筒形1～3、紡錘形1～3は法量の違いであり、紡錘形4は中央が膨らんだもの、紡錘形5は円筒形に近いやや四角い紡錘形、紡錘形6は胴が張った紡錘形である。

製塩土器は口縁部と細い脚が出上しているが、全形がわかるものはない。

支脚は火を受けて破損しているものがほとんどであり、全形がわかるものはない。先端部が細くなる円筒形と考えられる。

甕の羽口は直径約6cm、穴の直径約2cmで小片であり、全形がわかるものはない。

## 2. 金属器

市道遺跡から出土した金属器は、銅製の跨帯金具・銭貨と各種の鉄器がある(第138～141図)。個々の遺物の計測値等は一覧表に示している(第4表)。

### A. 銅製品

銅製品は銭貨と鈎帯金具が出土している。

鈎帯金具は9点がまとまって出土している。約2.5cm四方の逡方3点（第138図1～3）と約1.4cm×3.2cmの長方形のもの6点（第138図4～9）である。一部欠損している部分もあるが背板との間には有機物が残っているものも見られる。鉸具と鉋尾は出土していない。

銭貨は表土層から検出されたものを含め多くが出土している。銭貨の中でも特に注目されるのはSK-28から出土した7点の和同開珎である。これ以外にも中世の貿易銭を中心として多くの銭貨が出土しているが、和同開珎を含め、現在保存処理作業中であるので、本報告書には掲載せず、南側の寺院址の報告の時にまとめて報告する予定である。

## B. 鉄製品

鉄製品には刀、刀子、釘、鎌、鎌、手鎌、不明鉄板がある。

刀は1点（第138図10）出土している。長さ325mm、刃渡り191mmで茎が長く湾曲している。木質や布等の有機質遺物は付着しておらず、刀装具もみられないことから抜き身で埋納されていた可能性が高い。

刀子は14点（第139～141図）出土している。ほとんどが一部を欠損しており全形を推定できるものはない。50（第141図）のようになんかなり使い込まれ、小さくなっているものも見られる。関は両関造りで、茎は扁平で長方形のもの（第140図30・33他）が多いが、細長いもの（第140図29）も見られる。

釘は19点出土している。遺存状態が悪くはっきりしないものもあるが、いずれも断面四角形の角釘と考えられる。

鎌は1点（第140図40）出土している。40は錆のためかなり膨らんで両側縁や先端の刃部はかなり鈍くなっており、錆も不明である。茎は断面長方形であり、先端部の刃部形状から鎌の可能性が高いと判断した。

鎌は2点（第141図49・53）出土している。刃部先端が湾曲する曲刃鎌で、49は先端部が欠損している。着柄の角度は49が118°、53が100°であり着柄部に木質等は遺存していない。

手鎌は1点（第141図43）出土している。半月形の手鎌で両端が折り曲げられており、この部分に木質が遺存している。

不明鉄板は4点（第139図14・18・19・20）出土している。14は頭部が丸く、扁平で先端が細くなる形をしている。18～20は幅20～22mm、約2mmの薄い鉄板で両端は欠損しているようである。両側縁には刃部は見られず、用途不明である。

このほかに器種不明の鉄製品が2点（第141図44・52）出土している。44は細長い長方形をしており、両端は欠損している。52もやや太い長方形をしており、全形は不明である。

## 3. その他の遺物

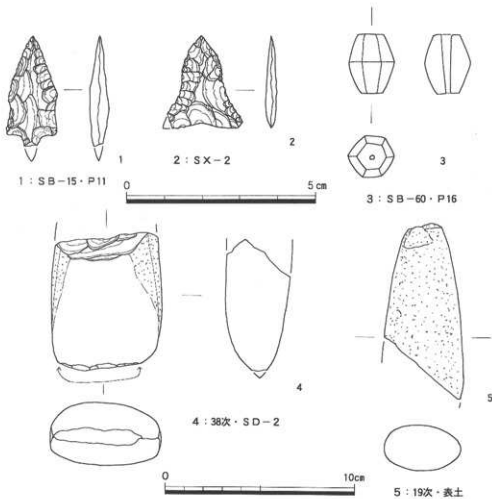
### A. 石器

市道遺跡では縄文・弥生時代の遺構は確認されていないが、磨製石斧と石鎌が採集されている。これらの石器は近世の溝に廃棄された貝層中から出土しているものであり、近接する縄文～弥生時代の貝塚（大西貝塚・水神貝塚等）から運び込まれた貝に混じって混入したものと考えられる。また、石材同定は豊橋市自然史博物館学芸員家田健吾氏（註1）による。

これ以外には、掘立柱建物の掘方内から水晶製の切子玉が1点出土している。

石鎌は2点（挿図18、1・2）出土している。1は有柄の五角形鎌である。茎の先端は欠損している。法量は現存長28.3mm、幅13.3mm、厚さ4.9mm、身部長26mm、重量1.4gである。石質は安山岩1で通称下呂石と呼ばれるものに近い。2は凹基で逆刺が横に広がる形態をしている。法量は現存長24.2mm、幅19.5mm、厚さ3.2mm、重量1.1gである。石質は安山岩2である。

石斧は2点（挿図18、4・5）出土している。4は乳棒状石斧と称されるもので、敲打により整形され、刃部のみが研磨されているものである。法量は現存長70mm、幅58.5mm、厚さ32.6mm、重量230gである。石質は塩基性岩である。5は同じく乳棒状石斧の頭部である。法量は



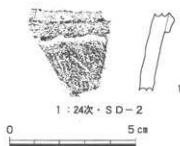
挿図18 石器・石製品実測図 (1/1・1/2)

現存長92.8mm、幅41.4mm、厚さ24mm、重量120gである。石質は塩基性岩である。

切子玉は1点（挿図18、3）出土している。法量は長さ16.4mm、最大径12.3mm、穴の直径は上部で3.3mm、下部で1.6mm、重量3.1gである。SB-60のP-16の掘方内（第41図）から出土している。石質は水晶である。

## B. 埴輪

24次のSD-2から円筒埴輪の小片が1点（挿図19、1）出土している。表面はタテハケ、内面はナデである。タガは上端部が強くなでつけられている。これも市道遺跡の西約200mに近接する水神古窯からの混入品である可能性が高い。



挿図19 埴輪実測図 (1/3)

## C. 土師器高坏

14次のSE-5から土師器の高坏が1点（第132図1264）出土している。脚部の上半であり、外面は縦方向のミガキ、内面にはシボリ痕が見られる。5～6世紀頃の古墳時代のもので、周辺部の大海津遺跡や大西遺跡等からの混入品と考えられる。

## 4. 各遺構出土遺物

北側掘立柱建物群では、掘立柱建物の他に堅穴住居や土壇等から多くの遺物が出土している。ここでは、各遺構ごとに出土状況にある程度意味のある代表的な遺構を説明する。

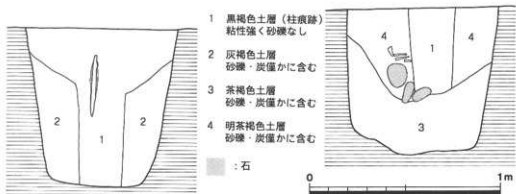
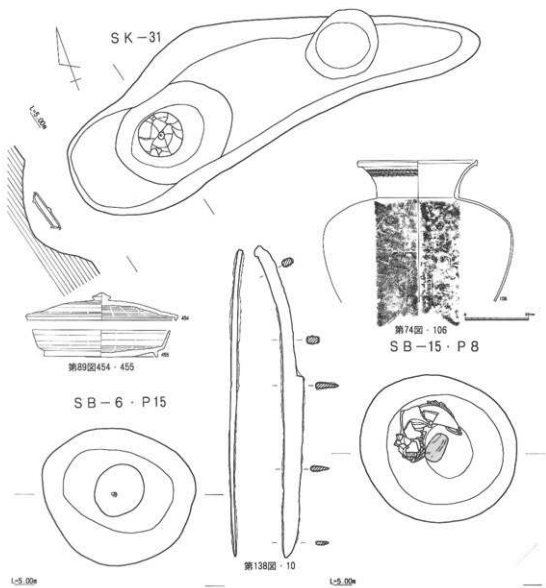
### A. 掘立柱建物（SB）出土遺物

掘立柱建物の柱穴掘方内部から出土する遺物はその多くが土器で破片資料が多く、意図的に埋納されたと確認できるものはほとんどない。唯一、埋納されたと確認できるものはSB-6、P15から出土した鉄刀（第138図10、挿図19）である。

この鉄刀は切っ先を下にして、柱痕跡の中心付近で掘方の底部から約40cmの所から検出された。柱痕跡の中心付近にあるということは、柱の中に格納されていたか、柱が抜き取られた後に埋納されたかのどちらかである。土層断面からは掘方の上半分が広くって、柱痕跡が確認できるのは下半分であるので、柱が抜き取られた後に埋め戻されていく段階で埋納された可能性が高いと考えられる。

また、刀身や茎には布や木質は付着しておらず、抜き身で埋納された可能性が高い。

これ以外に大型の甕（第74図、106）がSB-15、P8（挿図20）から出土した。土層断面の観察では、P8の柱穴は柱が建て替えられており、106の甕はこの時の柱痕跡を取り巻くよ



挿図20 各遺構遺物出土状況（1/20）

うにして確認された。この甕以外には10～20cm大の石も同時に埋められており、根固めのために埋め込まれたものである可能性が高い。この甕は口縁部及び胴部の上半の破片で残存率30%であるので、完形品が意図的に割られて埋納された可能性は低いと考えられる。

また、SB-60、P16からは水晶製の切子玉（挿図18、3）が検出されている。この切子玉は掘方の中層あたりから検出されたが、意図的に埋納されたものであるかどうかは確認できない。

これ以外の掘立柱建物では、意図的に遺物を埋納したことを推定できる資料はなく、柱穴内出土遺物は基本的に柱穴の埋土に偶然混入したものと考えられる。

## B. 竪穴住居（SB）出土遺物

竪穴住居は4棟が確認されているが、このうちSB-137からは多量の土器が出土している。他の3棟（SB-134～136）からは少量の土器が出土しているが、使用状態のまま原位置を保持して出土したものはない（SB-134：写真図版6-1、SB-137：写真図版16-1）。

SB-137からは多量の土器及び土製品が出土したが、ほとんどは破片資料であり、使用状態の原位置を保持して出土したものはない。これらの遺物は竪穴住居内のどこかに偏ることなく、ほぼ均一に出土している。また遺物取り上げ後に総柱建物であるSB-7柱穴が確認されており、これはSB-7の廃絶後にSB-137がつくられ、さらにSB-137廃絶後に廃棄土壌として再利用されたためと考えられる。

出土した土器は、須恵器環・蓋・盤・高盤・壺、土師器甕・蓋、製塩土器、土鍾等であり、多くの器種が出土している。出土土器の器種構成からも祭祀等の特別な行為に伴って使用されたものではなく、単純な生活廃棄品と考えられる。

## C. 溝（SD）出土遺物

今回報告する北側掘立柱建物群がある市道遺跡北部地区の溝は、中世～現代までのもので、中世から近世のものが中心である。溝から出土した遺物も中世から近世のものが中心であり、出土状況に特別な意味があるものは見られない。

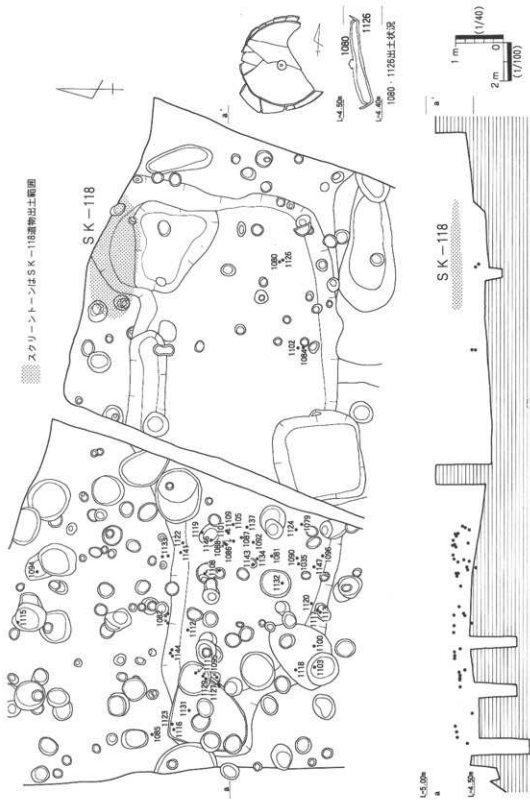
一部の溝には貝（ハマグリ）が集積的に廃棄されているものがあり、暗渠排水のためのものである可能性が指摘できる。この貝層中からは縄文時代の石斧等が出土しており、市道遺跡の西側の海岸線にあった貝塚を壊し、ここから運び込まれたものである可能性が高い。

なお今回の報告では、奈良時代から中世の遺物を中心に報告している。

## D. 井戸（SE）出土遺物

井戸は6基が確認されている。井戸からの出土遺物は土器がほとんどであり、祭祀的な遺物は出土していない。出土遺物も埋土中からの出土であり、意図的に埋納されたようなものは確認されていない。





挿図21 SK-2遺物出土状況(1/100・1/40)

## E. 不明遺構（SX）出土遺物

通常の土壌、あるいは溝とは異なり、形態が特殊でその機能の推定が明確でないものを不明遺構（SX）とした。

### SX-1（第67図）

SX-1は14次のU～W-15で確認された。直線的な溝にドーナツ状の溝が連結したような形をしている。溝は掘り直されており、一部にハマグリの貝層を挟んでいる。出土遺物はこれらの埋土中から検出されているが、意図的に埋納されたような状況ではなく、通常の生活廃棄品と考えられる。出土器種は中世陶器碗・皿・鉢・甕、土師器伊勢型鍋等で仏器等の特殊な器種は出土していない。

### SX-2（第68～70図、挿図21）

SX-2は5・6次のP・Q-11区で確認された遺構で、長方形の浅い大型土壌とこれに伴う整地層と考えられるものである。ここからは多くの遺物が出土しているが、土壌の東側からは大型の皿（第125図1126）と蓋（第123図1080）が重なった状態で出土している（挿図20、写真図版24-2）。重ね焼きの状況から窯での組み合わせを推定すれば、1126は同一器種の重ね焼きで、1080は外面の重ね焼きの痕跡から、正位の蓋に逆位の有台坏身を重ねて焼成していたと考えられ、窯での焼成段階では両者は組み合わせられていなかったと推定される。また、1126は1080の蓋より口径が大きく、法量の点でも両者は対応せず、このような無高台の皿は本来蓋と組み合わせられるものではないと考えられる。

出土した地点の埋土は版築状になっており、この2つの土器はこの版築状の層に挟まれるようにして出土した。土器は一部が欠損しているが整地の段階で意図的に埋納されたものである可能性が高いと考えられる。また、この両者はかなり潰れた状態で出土しており、両者の間からは内容物は確認されていない。

この2つの土器以外は、土壌西側に土器が集中して廃棄されているのが確認されている。出土遺物は須恵器坏・蓋・碗・皿・盤・高盤・鉢・壺、灰釉陶器碗・皿、土師器の甕、土鉢、製塩土器等の各種類の多器種に渡っている。仏器等の特殊な器種は出土しておらず、通常の生活廃棄品と考えられる。

SX-2からは2期の遺物の他に、6期の遺物（第125図、1124・1125、第126図、1140・1142・1143・1147）が少量出土している。6期の遺物のうち1143の甕は小さな土塊状のくぼみからまとまって出土しており、上層から掘り込まれたものである可能性が高い。SX-2は重機による表土（耕作土）除去の時点で大部分の遺構面が既に確認されており、6期の地表面及び2期の地表面もすでに畑の耕作によって破壊されていた可能性が高く、他の6期の遺物も基本的にはSX-2より上層からの小規模な掘り込みに伴うものである可能性が高いと考えられる。

## F. 土壌 (SK) 出土遺物

土壌は形態も規模もさまざまであるが、特定の遺物を意図的に埋納したような土壌は1例のみであり、これ以外の土壌は出土遺物量や出土状況に若干の違いは見られるが、基本的に廃棄土壌と考えられる。また、これらの土壌は掘立柱建物に伴う可能性が高いものと単独で存在するものがある。以下では埋納遺構、掘立柱建物に伴うもの、単独の廃棄土壌の3者に分類し、代表的な遺構ごとに説明する。

### 埋納遺構

#### SK-31 (挿図20)

SK-31からは須恵器の蓋と有台環 (第89図454・455) が合わさった状態で出土している。SK-31は長さ225cm、幅55cmの不正形で細長い形をしている。全体は浅いが、土器が出土した部分は60cm×50cm程の円形でやや深くなっている。454と455はこの部分のほぼ中央から検出された。454は全体が455の内部に落ち込むように割れていたが、455は口縁部にわずかに欠けた部分があるが破損しておらず、完形品である。両者は正位置で埋められていたが、本来完形品で454の蓋は土圧で破損したものと考えられる。また、出土遺構も60cm×50cm程の円形土壌であり、この土壌が偶然SK-31に重なっていた可能性が考えられる。

454の蓋の内面にはほぼ円形で黒褐色に変色した部分が斑点状に認められた。455の有台環の口縁部内面にも同様な変色部分が認められ、両者の大きさが同じであることから、何らかの内容物の痕跡である可能性が指摘できるが、少なくとも現地での調査時点では確認できなかった。

以上の点から、454と455は中に内容物が詰められた状態で意図的に埋納された可能性が高いと考えられる。また、SB-98の北西隅から北側の軒に沿って並行しており、この建物に伴うものである可能性もある。

### 掘立柱建物に伴うもの

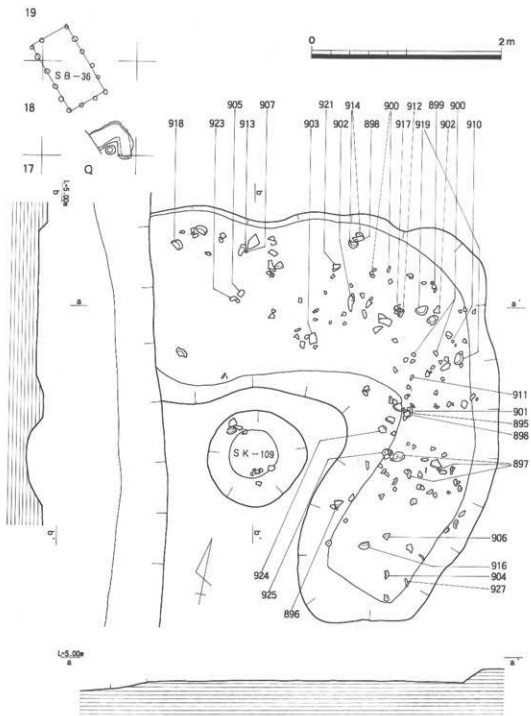
廃棄土壌のうち、掘立柱建物に近接し、主軸方向等が一致し、同時存在が推定できるものを、その掘立柱建物に伴う廃棄土壌であると考えた。

#### SK-109・121 (挿図22、写真図版105-2)

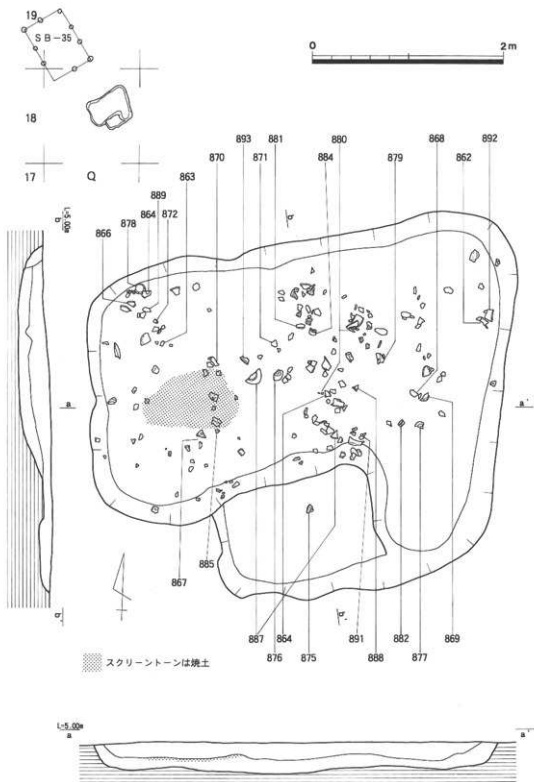
SK-120とSK-121との位置関係は、SB-35とSB-36との位置関係と同じであり、切り合い関係からもSB-35とSK-120、SB-36とSK-121が対応するものと考えられる。

SK-121はL字状の浅い土壌であり、L字に曲がった内側にSK-109がある。SK-121はSB-36の南東約3mのところにあり、主軸の方向もSB-36の主軸とほぼ直交しており、両者は対応するものと考えられる。二つの穴からは土器が出土しているが、破片資料が多く近接資料が接合するものも見られた。しかし、意図的に埋納されたと推定できるものはない。

出土土器は須恵器環・蓋・壺、土師器甕、製塩土器等であり、通常の生活廃棄品と考えられる。SK-109・121出土土器の大半は遺物出土状況図を作成し、番号を付けて取り上げている。



挿図22 S K - 109・121遺物出土状況 (1/40)



挿図23 SK-120遺物出土状況 (1/40)

が、灰陶器段皿（第114図926）は出土状況図の中には含まれず、この土壌の精査開始直後に出土しており、混入の可能性が考えられる。

#### SK-120（押図23、写真図版104-2、105-1）

SK-120はSB-35と対応するものである。SB-36の柱穴はSK-120の底面から検出されたことから、SB-36はSK-120より先行するものであり、SB-36からSB-35に建て替えられたものと考えられる。

SK-120は長方形に近い短いL字状で、L字の内側（南側）には浅い段が見られる。SK-120の周囲からは柱穴と考えられる穴は確認されておらず、上屋は伴っていなかったと推定できる。このような構造はSK-121とSK-109の関係と同様と考えられ、SK-120とSK-121はほぼ同じ構造と機能を有していた可能性が高い。

土層は上下2層にあり、下層上面の西側では焼土が集中して検出されている。出土遺物は須恵器蓋・坏・碗・皿・盤、土師器甕、製塩土器等であり、通常的生活廃棄品と考えられる。出土遺物の特徴としては、有台坏が確認できず、無高台の箱坏が卓越し、土師器甕のうち三河型4とした三河型では最も後出と考えられる型式が出土している。SK-120出土土器はSK-121のものより後出の要素が強いと考えられ、遺構の切り合い関係とも矛盾しない。

#### SK-37（写真図版54）

SK-37はSB-18の南東側約3mのところの東西に長く延びる土壌である。土壌の主軸はSB-18の主軸とほぼ直交しており、出土遺物の点からもSB-18と同時に存在していた可能性は高いが、SB-18は総柱の倉庫と推定され、機能的にこれに付随する可能性は低いと考えられる。

出土遺物は須恵器蓋・坏・盤・高盤・鉢・長頸壺等であり、通常的生活廃棄品と考えられる。

#### SK-39（写真図版55-1）

SK-39はSB-64の南東、およびSB-65の南西側にある。土壌の主軸はSB-64の主軸とはほぼ同一方向であり、SB-64・65に伴うものと考えられる。

出土遺物は須恵器蓋・坏・壺・甕等であり、通常的生活廃棄品と考えられる。

#### SK-124～127（写真図版90-2）

SK-124～127はSB-50とSB-38との間にある円形あるいは方形に近い形をした土壌の集合と考えられるが、切り合い関係ははっきりせず、各々の前後関係は不明である。また、出土遺物からも前後関係ははっきりせず、一定の期間内に連続的に造られた廃棄土壌であると考えられる。

遺物は最も大型で中央に位置しているSK-124から集中的に検出された。出土遺物は須恵器蓋・坏・高盤・鉢・壺、土師器甕、製塩土器、土錘であり、通常的生活廃棄品と考えられる。

#### SK-20 (写真図版121-2)

SK-20は正六角形建物であるSB-114の北側にほぼ接するようにしてある。不正形で浅い穴が3つ連結したような東西に長い形をしており、出土土器も極わずかである。SB-114とはかなり近接しており、同時存在したとするよりもSB-114廃絶時に掘られた土壌の可能性が考えられる。

出土遺物は須恵器箱環・無台環、輪の羽口であり、いずれも破片資料である。出土量が少ないところから、偶然混入した可能性もあり、これらの遺物の廃棄を目的とした土壌であったかどうかは判断できない。

#### SK-90 (写真図版26)

SK-90はSB-86の東側約4mの所にある不整形の土壌である。北側が深く細長い溝状になっており、この主軸がSB-86の北側の軒と同一方向であり、SB-86に伴うものである可能性がある。

出土遺物は須恵器蓋・環・皿・碗・盤・高盤・長頸壺・平瓶・甕、灰釉陶器碗、土師器甕等であり、通常の生活廃棄品と考えられる。

#### 単独の廃棄土壌

掘立柱建物に伴うもの以外にも、遺物を多く出土して廃棄土壌と推定できるものが多数確認された。これらの土壌は特定の掘立柱建物との関係は想定できないが、やはり掘立柱建物に近接している場合が多い。以下では、これらのうちの代表的なものについて説明する。

#### SK-28

SK-28からは7点の和同開珎が出土しているが、詳細については保存処理の関係上、次回報告書で他の銭貨とまとめて報告する予定である。

#### SK-118 (挿図24、写真図版27)

SK-118は重機による表土除去の時点で、炭と焼土をわずかに含み、土器が集中して出土する部分が確認されたため、遺物を残しながら精査したところ約320cm×130cmの範囲で遺物が集中することが確認できた。また、遺構が確認されたのが現地表面より約20cmの所で、畑の耕作土を除去した時点で確認されたため掘方ははっきりしなかったが、遺物の出土状況からは廃棄土壌として差し支えないと考えられる。出土遺物の位置関係からはSX-2より新しい時期の土壌であったと考えられる。

出土遺物は須恵器蓋・環・皿・長頸壺・短頸壺、土師器甕・皿等であり、碗皿類が多く出土している。

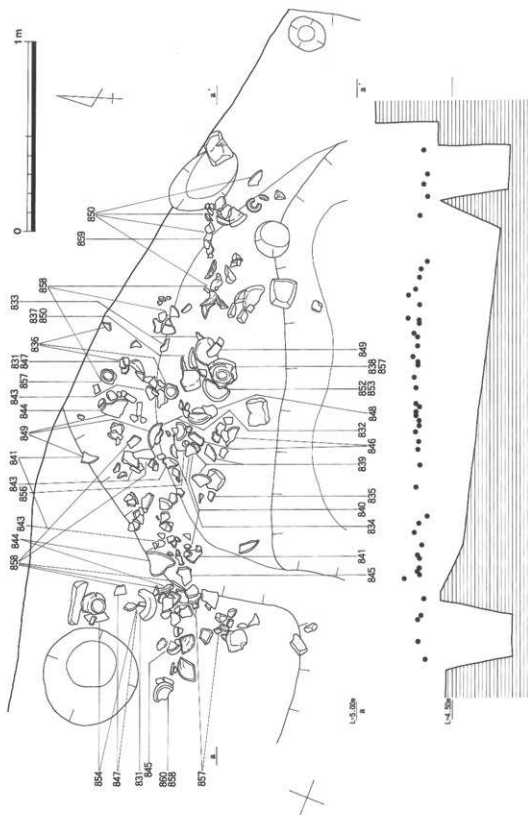


插图24 SK-116遺物出土状況 (1/20)



#### SK-66・67・84 (写真図版74-2)

この3つの土壌はSB-55・58・91の東側に近接しており、これらの掘立柱建物との関係が推定できるが、具体的な対応関係は不明である。遺物出土状況についてもSK-84のように大型の土壌は出土遺物が多い傾向があるが、出土器種等には特定の傾向は見られず、通常の生活廃棄品と考えられる。

#### SK-64・93・94・95 (写真図版75-2)

これらの土壌はSB-54・89・92の南東側に近接しており、これらの掘立柱建物との関係が推定できるが、具体的な対応関係は不明である。遺物出土状況については土壌の大きさの割には散漫である。また、出土器種等には特定の傾向は見られず、通常の生活廃棄品と考えられる。

#### SK-88 (写真図版90-1)

SK-88はSB-39・40の北側に近接しており、これらの掘立柱建物との関係が推定できるが、具体的な対応関係は不明である。遺物出土状況については多くの遺物を出土しているが、通常の廃棄行為によるものと考えられる。また、出土器種は須恵器蓋・坏・皿・盤・壺、土師器甕・碗、土鍾等で、須恵器坏は無高台で須恵器碗は角高台に近い形状をしており、灰軸陶器の影響による可能性が考えられる。器種構成上からは通常の生活廃棄品と考えられる。

#### SK-73 (写真図版76-1)

SK-73は43×33cmの円形の穴で、SB-29のP17(第29図)を切っている。位置関係からはP17が造り直されたもので、SB-29の柱穴である可能性もある。土器は完形品の小型の壺(第97図616)が掘方内から出土している。小型ではあるが完形品の土器が出土しているところから、埋納されたものである可能性も考えられる。

廃棄土壌全体の分布状況からは、2・3期のQ・R-11・12区は掘立柱建物がなく大型の廃棄土壌が集中する地区であり、廃棄土壌を造る場所として認識されていた可能性が高いと考えられる。廃棄土壌の分布は、特定の建物に付随していると考えられる少数のもの以外は小規模のものが多く散漫である。

註1 家田健吾「3. 石器の石質同定」『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第15集 白石遺跡』  
豊橋市教育委員会 1993年 参照

## 第5章 まとめ

市道遺跡は南にある約99m四方の寺院址とこの北東側に隣接する掘立柱建物群の2つの構造の異なる遺構群で構成されている。この両者は相互に関係するものであり、両者の実体が明らかにしなければ遺跡全体の総合的理解は困難である。

今回の報告は北側掘立柱建物群についてのみであり、南側の寺院址については第2分冊で報告する予定である。このため、ここではおよそ8～13世紀頃と推定される北側掘立柱建物群の時期区分とその変遷の概略を明らかにすることを中心にした。

南側の寺院址の整理作業は現在（平成8年度）進行中であり、北側掘立柱建物群と比較して出土遺物に若干の片寄りが見られるようである。南側の寺院址では、多量の瓦が出土しているが、北側掘立柱建物群ではほとんど出土していない。また、土器も煮炊具が少なく、灰釉陶器、緑釉陶器が北側掘立柱建物群より相対的に多いようである。特に、8世紀後半から9世紀初頭と考えられている須恵器と灰釉陶器とが一定期間並存するのか、あるいはほとんど並存せず年代差になるのかについては、未だ確定できない部分があり、今後の整理作業の進展によっては土器の分類と編年に修正を加える必要が生じる可能性がある。

そこで、今回の報告では土器分類のうち時期区分を行うために有効と考えられた分類基準についてのみ概略を説明することとし、土器群の総合的な分析と評価は今後の課題とする。

時期区分を行うための具体的方法は、まず土器の型式分類を行い、一定量の土器を出土した土壌等を基準遺構にして、これらについて各型式の共伴関係を検討をした（挿表12）。次に各遺構の前後関係との整合性を検討して、時期区分を行った。

### 1. 土器の分類

土器は種類→器種→型式の3段階に分類し、各型式の詳細は図と表に記載した（挿図8～17、挿表2～11）。具体的には、まず須恵器、灰釉陶器、中世陶器、陶磁器、土師器、土製品の6種類に分類し、それぞれの器種と型式を検討した。各種類ごとの詳細は第4章遺物1. 土器に述べてあるので、ここでは編年に用いた型式とその属性について説明する。

編年に用いることができたのは、須恵器、灰釉陶器、中世陶器、土師器の4種類である。これらのうち、須恵器、灰釉陶器、中世陶器はほぼ年代差と考えられ、各時期に共通して存在し、通時的にも型式学的にも最も安定していると考えられたのは土師器甕である。そこで、まず土師器甕の分類と編年を中心にして、その他の型式の共伴関係から、大まかな時期区分を行った。

#### A. 土師器

土師器の各型式の中で編年基準としたものは、甕（鍋を含む）の1器種である。愛知県内における土師器の煮炊具の変化は、既にこれまでの研究で明らかにされており（註1）、市道遺跡出土資料についても基本的にこれらの編年観と大きく相違するところはない。その変化の概

挿表12 基準遺構別共伴型式一覧表

遺構名	遺構番号	地区名	地区番号	時期	土 師 器								須 恵													
					遠江型1	三河型2	三河型3	清郷型1	清郷型2	清郷型3	伊勢鍋1	坏蓋2	坏蓋3	坏蓋4	坏蓋5	坏蓋6	坏蓋7	平頂蓋1	平頂蓋2	無台坏1	無台坏2	無台坏3	盤1	盤2		
SK	31	N	13	1											1											
SK	38	N	15	1	1										3											
SK	97	P	10	1											1											
SB	137	O	15	2			3	1							10	2	3			1			2	1	1	
SK	37	N	9	2											2	2						2				1
SK	121	Q	17	2				1							9	1	1	1					1	1		
SK	124	R	15	2											4	7						1	1	1		
SX	2	P	11	2				1							10	9		3					2	1		
SK	39	N	10	3											2	1							2			
SK	88	O	15	3			2	2								1	5	1					1	2		
SK	90	Q	11	3				3	1						3	10	3	7		1			2			
SK	118	Q	12	3					1									4	3				1			
SK	120	Q	17	3				1	1						1	4	1	3	1							1
SK	17	L	9	4																						
SK	122	R	10	5																						
SK	128	S	11	5																					1	
SK	99	Q	12	6			2		1																	
SK	119	Q	17	6																						
SX	2	P	11	6					2			1	1													
SK	166	Z	12	7									2													
SK	1	V	15	9										1												

※数字は実測図の点数

略を示せば以下になる。

7世紀代：古墳時代からの系譜を引く、外面ハケ調整の長胴甕。

8～9世紀：内外面ナデ調整で丸胴の三河型甕。

10～11世紀：器壁が厚く、内外面ナデ調整、やや小型で半球形の清郷型甕。

12～14世紀：器壁が薄く、外面ハケ調整、体部下半はヘラ削り、頸部が屈曲し口縁端部が折り返されている伊勢型鍋。

7世紀から14世紀までの煮炊具の変化は三河型、清郷型、伊勢型の出現に代表されるように3つの大きな画期がある。そこで市道遺跡出土の煮炊具は器形・調整技法等の型式学的特徴から、遠江型1（仮称）、三河型1・2・3・4、清郷型1・2・3、伊勢型鍋1の4群9型式に分類した。

遠江型1としたものは、外面のハケ調整を特徴とするものである。三河における7世紀代の甕は外面ハケ調整で長胴のものが知られている。遠江型1としたものは口縁端部をつまみ上げ、胴部下半が細くなった平底であり、在地の系譜のものとは異なっている。これは遠江地域にお

器			灰 軸 陶 器										中 世 陶 器						蓋 重 焼 Ⅰ 類	蓋 重 焼 Ⅱ 類									
盤	盤	盤	高 盤	高 盤	高 盤	高 盤	碗	碗	碗	碗	碗	皿	皿	段 皿	段 皿	小 皿	小 皿	小 皿	小 皿	小 皿	小 皿	小 皿	小 皿	小 皿	小 皿	小 皿	小 皿		
3	4	5	1	2	3	4	1	2	3	4	5	6	1	2	1	2	3	4	5	6	1	1	2	3	3	3	3	1	1
																												1	
																												8	
																												2	
	3	1			4																						3	12	
			1																								1	3	
															1												1	6	
																											5	4	
1	1			2																							2	16	
			3																									2	
	1					1	1																				4	19	
																												6	
1																												9	
													1																
										2	2																		
										1	7		2			1													
												1																	
												2	1			1													
																	3												
																			1	5	1								

ける8世紀前半の甕に極めて近く(註2)、ここからの搬入品である可能性もあるので、とりあえず遠江型1と仮称した。

三河型はハケメ調整がほとんど見られないことが特徴であり、4型式に細分した。器形は長胴のものから球形に近いものへ、口縁部は長く伸びるものから直角に折れ曲がって短くなっていくという変化の方向性が指摘できる。三河型1・2に関しては出土点数が多く安定しているが、三河型3・4に関しては共伴して出土している事例が多い。しかし、他型式との相関関係からは三河型4のほうがより後出の傾向が強い(挿表12)と考えられる。

清郷型は器壁が厚く、胴部が半球形で、口縁部はさらに短くなっていく傾向があり、特に口縁部形態の違いから清郷型1・2・3に細分した。また、清郷型2は二川窯の大沢A-2号窯の窯体内から東山72号窯期の灰軸陶器と共伴して出土しており、この時期には既に存在したことは間違いなく、清郷型1に関してはこれより古い可能性が高い。

伊勢型鍋は北村分類のA5類(註3)、伊藤分類の第1段階b型式(註4)、新田分類の5類(註5)と考えられるものが出土している。これより古い時期の伊勢型鍋は確認されておらず、市道遺跡はこの時期にある期間断絶していた可能性が高いと考えられる。

## B. 須恵器

須恵器は多くの器種が出土しているが、各型式の中で編年基準としたものは、坏蓋、無台坏、盤、高盤の4器種である。これらのうち、他の型式との相関関係等から編年の基準にできたものは、(1) 無台坏の底部糸切り調整の出現、(2) 坏身坏蓋の焼成方法の変化と坏蓋の型式変化、(3) 盤の出現と型式変化、(4) 高盤の出現と型式変化の4点についてである。

### (1) 無台坏の底部糸切り未調整の出現

無台坏は無台坏1～3の3型式に細分したが、底部糸切り未調整は無台坏2・3に見られる。この無台坏2・3は土師器壺の三河型2以降に出現しており、底部糸切り未調整の出現を8世紀中頃として、無台坏1を8世紀前半に、無台坏2・3を8世紀後半に位置付けた。しかし、無台坏2と無台坏3については時期差になるかどうかははっきりしない。

### (2) 坏身坏蓋の焼成方法の変化、坏蓋の逆転

坏身と坏蓋の焼成方法は内外面に残っている自然釉の降灰状況の観察から、蓋と身が正位置で合わされて重ね焼きされているⅠ類と蓋が逆転して焼かれているⅡ類に分類できる(注6)。Ⅰ類とⅡ類の各遺構での共伴関係を検討すると、Ⅰ類のみのもの(SK-38等)、Ⅰ類とⅡ類がほぼ同数のもの(SK-124等)、Ⅱ類が卓越するものがあり(SK-90、SB-137等)、一定の傾向が見られた(挿表12)。他の型式との共伴関係では、坏蓋4・5・6、無台坏2・3の出現とは相関関係にあり、蓋が逆転して重ね焼きされているⅡ類は8世紀中頃に出現したと考えられる。また、坏蓋7は土師器壺三河型4と相関関係にあり、より後出の傾向が強い。

### (3) 盤の出現と型式変化

盤は土師器壺三河型2～4、坏蓋4～7、無台坏2・3と相関関係にあり、8世紀中頃以降に出現したものと考えられる。また、盤5は坏蓋7と対応しており、より後出と考えられる。

### (4) 高盤の出現と型式変化

高盤は口縁部形態等の変化が盤と基本的に同じであり、他型式との相関関係も同じである。高盤4は盤5に対応している。

以上のように、須恵器は8世紀中頃に境に各器種の型式学的変化や器種構成に多くの変化が見られる。また、これらのなかでも坏蓋7、盤5、高盤4のように特定器種については、より後出の型式を指摘することができる。

## C. 灰釉陶器

灰釉陶器の各型式の中で編年基準としたものは、碗、皿の2器種である。北側掘立柱建物群においては灰釉陶器の出土量自体が限られており、欠落している器種が多い。このため、編年

基準となったのは(1)碗の型式学的変化、(2)皿の型式学的変化の2点についてである。

#### (1) 碗の型式学的変化

碗は猿投窯産と地元の二川窯産と考えられるものの両者が出土しているが、型式学的変化は基本的には同様と考えられる。各型式の特徴は第4章遺物において説明しているの、これまでの分類との対応関係を示し、問題となる点のみを説明する。

市道遺跡で行った分類と猿投窯での分類との対応関係は、碗1(K-14)、碗2(K-14)、碗3(K-90)、碗4(O-53)、碗5(H-72)、碗6(百代寺)となる。問題となるのは以下の点である。

- ①K-14段階の碗2は猿投窯でははっきりと確認されておらず、二川窯あるいは静岡県浜北市の吉名窯の製品である可能性が高い。
- ②碗4・5・6は法量の小形化が年代差を示している可能性があるが、現時点では十分に検証できておらず、定量的な分析が必要である。
- ③市道遺跡では猿投窯で設定されている百代寺型式の碗と型式学的特徴が同じものは確認されておらず、碗5がさらに小型化したような形態のものを碗6としたが、出土量も少なく実体がよく分からない。百代寺段階は二川窯でも十分に確認されておらず、生産地においても実体がよく分からない。

#### (2) 皿の型式学的変化

皿は猿投窯産と地元の二川窯産と考えられるものの両者が出土しているが、型式学的変化は基本的には猿投窯と同様と考えられる。各型式の特徴は第4章遺物において説明しているの、これまでの分類との対応関係を示し、問題となる点のみを説明する。

市道遺跡で行った分類と猿投窯での分類との対応関係は、皿1(K-90)、皿2(O-53～H-72)、段皿1(K-14)、段皿2(K-90)、小皿1(H-72又は百代寺)となる。問題となるのは以下の点である。

- ①皿は碗と比較して出土量が少なく、全時期を網羅しておらず、折縁皿等の欠落している器種も多い。
- ②皿2は全形を復元できるものがないためはっきりしないが、細分できる可能性が高い。

### D. 中世陶器

中世陶器とはいわゆる山茶碗窯で焼成された碗・皿・壺・甕類を一括している。地元の渥美窯産のものと少量ではあるが知多窯あるいは猿投窯産のものが見られる。中世陶器の各型式の中で編年基準としたものは、碗、皿の2器種である。北側獨立柱建物群においては中世陶器の出土量自体が限られており、欠落している器種が多い。このため、編年基準となったのは(1)碗の型式学的変化、(2)皿の型式学的変化の2点についてである。碗・皿類の分類と編年は藤澤良祐氏のもの(註7)を参考にしているが、各型式の特徴は第4章遺物において説明して

いるので、これまでの分類との対応関係を示すことにする。

市道遺跡で行った分類と藤澤氏の分類（註7）との対応関係は、碗1（渥美・湖西型Ⅰ）、碗2（渥美・湖西型Ⅱ）、碗3（渥美・湖西型Ⅲの1）、碗4（渥美・湖西型Ⅲの2）、碗5（渥美・湖西型Ⅲの2）、碗6（尾張型第7型式）、小碗1（渥美・湖西型Ⅰ）、小皿1（渥美・湖西型Ⅱ）、小皿2（渥美・湖西型Ⅲの1）、小皿3（渥美・湖西型Ⅲの2）とほぼ対応すると考えられる。特に問題となる点はないが、他の器種との共存関係については良好な資料がないため、不明な点が多い。

## E. 基準遺構での相関関係

以上の各型式の共存関係を基準遺構（挿表12）から検討すると、土師器、須恵器、灰軸陶器、中世陶器の各型式は一定の傾向をもった相関関係にあり、いくつかの画期と問題点が指摘できる。

第1は、土師器甕三河型2、須恵器环蓋4～6、須恵器無台环2・3、須恵器盤・高盤類、須恵器环蓋の重燒Ⅱ類がほぼ8世紀中頃に同時に出現する点であり、特に須恵器の器種構成と各型式に変化が見られる。

第2は、土師器甕三河型4、須恵器环蓋7、盤5、高盤4が相関関係にあり、ほぼ同時に出現した可能性が高い点である。

第3は、灰軸陶器の出現が一つの画期になると考えられるが、現時点では灰軸陶器碗1・2（K-14）、灰軸陶器碗3（K-90）は出土量が少なく、これらが単独で一つの時期を構成するかどうかは遺物からは十分に確認できない。少なくとも灰軸陶器碗4（O-53）には須恵器の主要器種は基本的に共存しておらず、この段階では、ほぼ灰軸陶器が普及しているのは間違いないと考えられる。

仮に古代の土器の生産が須恵器から灰軸陶器に一斉に転換しているとしても、K-14段階の窯跡数は二川窯においてもごく限られたものであり、全ての消費遺跡での需要を賄っていたとは考えがたい。S K-90の灰軸陶器碗2のように、圧倒的多数の須恵器の中に、ごく少量の灰軸陶器が共存することが普遍的であるとすれば、少なくともK-14段階には多量の須恵器が生産されていた可能性が高いと考えられる。

## 2. 土器の編年

### A. 土器編年

北側掘立柱建物群出土の土器は主要遺構での各型式の共存関係から、9期に編年した（挿表13）。編年は土師器甕の型式変化を基本にその他の種類の土器との相関関係から行った。土師器甕以外の要素は、1～3期は須恵器の特定器種の出現、4～6期は灰軸陶器碗の型式変化、7～9期は中世陶器碗の型式変化である。

- 1期：土師器甕・遠江型1・三河型1、須恵器・坏蓋焼成Ⅰ類のみ、
- 2期：土師器甕・三河型2・3、須恵器・坏蓋焼成Ⅱ類の出現、底部糸切り未調整の無台坏の出現、盤・高盤の出現
- 3期：土師器甕・三河型3・4、須恵器・坏蓋7、平頂蓋1・2の出現、盤5・高盤4の出現、灰軸陶器碗1・2
- 4期：土師器甕・三河型4、灰軸陶器碗3
- 5期：土師器甕・清郷型1、灰軸陶器碗4
- 6期：土師器甕・清郷型2、灰軸陶器碗5・6
- 7期：土師器甕・清郷型3、中世陶器碗1
- 8期：土師器甕・伊勢型鍋1、中世陶器碗2・3
- 9期：土師器甕・伊勢型鍋1、中世陶器碗4・5・6

## B. 問題点

ここで示した土器編年には、現時点では十分に解決できないいくつかの問題点がある。以下ではこれらを示して、掘立柱建物群の変遷を復元する上での注意点としたい。

### (1) 3期における須恵器と灰軸陶器との関係

3期は灰軸陶器が出現することが大きな特徴であるが、出土量からは須恵器が圧倒的であり、灰軸陶器は極めて少ない。さらに灰軸陶器の出現を9世紀第1四半世紀中頃として、これ以後須恵器から灰軸陶器の転換が円滑に行われたとすると灰軸陶器碗1・2を出土した遺構が極めて少ないので、この時期に遺構数が激減したことになる。

### (2) 灰軸陶器碗5・6と中世陶器碗1との関係

灰軸陶器碗5・6は出土した資料数が少なく、実体が良く分からない点があるが、中世陶器碗1とは法量や作りの点で異なっており、灰軸陶器碗6から中世陶器碗1への連続的な移行は推定しがたい。

### (3) 清郷型2と3との関係

土師器甕・清郷型2と清郷型3は口縁部の形態が明らかに異なっており、両者の中間形態が存在する可能性もある。伴出する灰軸陶器碗と中世陶器碗との関係からも、両者の間に時期的な空隙がある可能性がある。

### (4) 伊勢型鍋1と清郷型3との関係

伊勢型鍋は新田分類(註5)の5類に相当すると考えられるが、これ以前の3類に相当すると考えられるものが市道遺跡に近接する公文遺跡等から出土しており、7期と8期が断続する可能性がある。



挿表13 出土土器主要型式別編年表

西暦	時期	猿投窯 の編年	湖西窯 の編年	土師器 甕	坏蓋	蓋 焼成	無台 坏	盤	高盤	灰釉 陶器	中世 陶器
700	1期	C-2 I-25	IV-123 V-1	遠江型1	2	I 類	1				
				三河型1	3						
750	2期	NN-32 O-10	V-234	三河型2	3・4	I II 類	2 3	1	1		
				三河型3	5・6			2	2		
800	3期	IG-78 K-14	IV-123	三河型3	3・4	I II 類	2 3	4	3	碗1	
				三河型4	5・6・7			5	4	碗2	
850	4期	K-90		三河型4						碗3	
900	5期	O-53		清郷型1						碗4	
1000	6期	H-72  百代寺		清郷型2						碗5	
										碗6	
1100	7期			清郷型3						碗1	
1170	8期			伊勢型綱1							碗2 碗3
1240	9期			伊勢型綱1							碗4 碗5 碗6
1320											
		斎藤 編年	後藤 編年								藤澤 編年

\* 猿投窯、湖西窯、中世陶器の編年について（註8）

以上のように、出土土器の編年作業からは1～9期までが連続的に移行するのではなく、断続している可能性が指摘できる。西暦年代との対比はおよその関係を示しており、各型式の土器が年代的に若干前後の時期まで動く可能性もある。また、断続している時期や期間は正確には把握できず、今回示した各時期の範囲内、あるいは各時期の間にある可能性を指摘することとし、詳細については今後の課題としたい。

### 3. 時期区分の方法

北側掘立柱建物群の時期別建物配置の復元は、土器の編年で行った9期区分を基本にして、以下の方法で行った。まず、遺構全体の構成を検討して、正六角形建物や総柱建物群等の特徴のある遺構群の関係を推定し、建物群全体の変化を予測した。次に、切り合い関係や重複関係にある遺構の出土遺物を土器編年（9期区分）と対比させながら、具体的に各遺構を各時期に配分した。遺構の配分にあたっては、多くの遺物を出土した基準遺構を定点にして、これらとの切り合い関係や重複関係を重視し、切り合い関係等のない遺構のうち出土遺物のある遺構はこれを参考にし、また出土遺物のない遺構は建物の主軸方向や位置関係から同時存在を推定した。

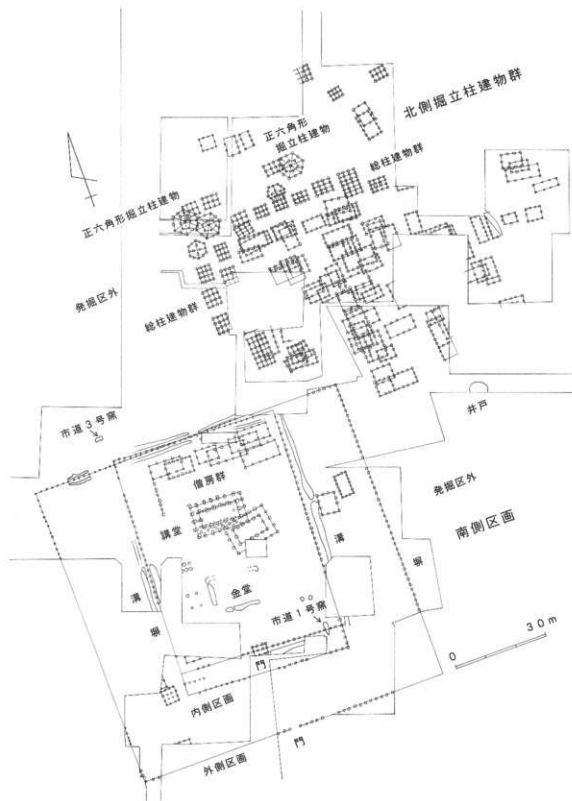
#### A. 遺構全体の構成（挿図25）

市道遺跡は南側の約99m四方の寺院址とこの北東側に隣接する掘立柱建物群とで構成されており、寺院址は99m四方の外側区画から主軸が僅かにずれた78m×54mの内側区画に造り替えられていることが推定されている。

外側区画は一部に覆乱等で確認できない部分はあるが、東西南北の各辺で掘立柱の塀が確認されている。

内側区画は区画中央には礎石建物の金堂、4間×7間の四面庇の掘立柱建物の講堂、7棟の掘立柱建物の僧房群が確認された。金堂から南東約20mの塀の南東隅にはロストル式平窯の市道1号窯が確認され、北辺の塀の北側約10mのところには同じくロストル式平窯の市道3号窯が確認された。また、南辺には門も確認されており、建物や塀、溝等の切り合い関係からは2～3回程度の建て替えが推定されている。また、金堂と講堂の位置には幅約2mで14m×8m程の長楕円形に巡る溝が掘られている。ここからは13世紀頃の中世陶器が出土しており、小規模な建物が再建された可能性が考えられる。これらの主たる建物群は、主軸方向や平面的な位置関係から内側区画に伴うものである可能性が高いが、金堂は外側区画においてもほぼ中心部分にあり、外側区画にも伴う可能性もある。

今回報告する北側の掘立柱建物群では、およそ130m四方に139棟の建物が確認されている。これらの建物のうちで、古代の建物は102棟、中世の建物は37棟である。古代の建物は規則性が高く、建物配置を復元する上で考慮すべき点が多い。そこで、以下では遺構の全体構成の中で問題となる点を説明する。



挿図25 市道遺跡全体図 (1/1,200)

### (1) 総柱建物の位置関係

- ①総柱建物は掘立柱建物群の中でも、北辺と西辺に軒を揃えるようにして並んでおり、ほとんど重なることがない。
- ②西辺の総柱建物群は東側の軒を揃えるようにして2列あり、北端にはそれぞれA型とB型の正六角形建物が位置している。
- ③北辺の総柱建物は南側の軒を揃えるようにして1列あり、中央北側には正六角形建物がある。また、東側の建物のうちSB-4・5・38は南側に1間ずつずれながら並んでいる。
- ④総柱建物は柱間の間隔や規模に統一性がなく雑多であり、一時期に全てが建てられてものではなく、順次増やされていった可能性がある。

### (2) 正六角形掘立柱建物の位置関係

- ①正六角形建物は北辺と西辺の総柱建物群をつなぐ北西隅と北辺の中央北側にあり、両者は関連性が高い。
- ②正六角形建物は中心主柱穴を持つA型と持たないB型の2種類があり、位置関係からは両型式とも総柱建物群の北西隅と北辺の中央北側に2棟が同時存在していた可能性が高い。
- ③正六角形建物SB-3と総柱建物SB-8は切り合っており、SB-8を壊してSB-3が造られているのが確かめられた。このことから、SB-3と北辺の総柱建物群は共存せず、時期差になることが確かめられた。

### (3) 側柱建物の集中性

- ①側柱建物は掘立柱建物群の中央部に特に集中して重複している。廃棄土壌もこの部分に集中しており、両者は相関関係にあり、かなり長期間にわたって継続していたと考えられる。
- ②中央部の建物は正六角形建物であるSB-1を頂点とした南北の線上に南北棟が連続している。
- ③北辺の総柱建物群の南側には東西棟の建物が集中しており、主軸方向が一致し、隣接した2棟を1単位とした建物群が複数指摘できる。

### (4) 間仕切りのある建物の集中性

- ①間仕切りのある建物は掘立柱建物群のほぼ中心部に集中している。
- ②間仕切りのある建物は東西棟が東西方向に並んでいる場合が多く、軒が揃った2棟が1単位になっているものが2ヶ所ほど見られる。

以上のような遺構全体の構成から次のような点が推定できる。

- ①建物の位置関係から正六角形建物と総柱建物は機能的に一体のものである可能性が高く、複数の時期のものである可能性が高い。
- ②北辺の総柱建物群のすぐ南側には2棟1単位の側柱建物が複数見られ、切り合い関係を持

つことから複数の時期にわたって存在し、建て替えられたと推定できる。

③中央から南東部分の建物は側柱建物を中心として、切り合いや重複が多く、かなり長期間にわたって同じ様な建物が存在していた可能性が高い。

④中央から南東部分の建物群と大型の廃棄土壌とは重複しており、両者は相関関係にある可能性が高い。

## B. 時期区分の決定

### (1) 切り合い関係および重複関係

市道遺跡で遺構が切り合っていると判断したもののうち、記録として残した方法に2種類の方法がある。

第1は遺構検出の段階で確認し、断ち割って断面図と写真を撮影したものである。同じ場所でも数度の建て替えがある掘立柱建物や土壌との切り合いを確認するために行った方法であり、各遺構同士の関係を知る上では最も信頼性が高い。

第2は遺構検出の段階で確認したものと遺構完掘後にその遺構の底部で確認したものである。これらは、平面図に切り合い関係を記録したものであるが、精査の段階で確認できなかった遺構を含む場合がある。例えば、SX-2は2期に築造された大型土壌であり、出土遺物はほとんどが2期のものであるが、少量の6期の遺物を含んでいた。出土状況を詳細に検討すると遺構検出時に確認できなかった小さな穴があったと推定できる。この両者は挿図14・15の断面図と平面図の欄に示している。

この他には切り合っていないが重複関係にある遺構が多数確認できた。これらの遺構間の関係は建物の主軸方向との共通性、相対的な位置関係から同時存在する遺構群を推定した。総柱建物は軒を揃えて連続し、側柱建物や間仕切りのある建物は2棟が1単位となって、東西に並んでいる事例が多く確認できた。

建物群全体の構成の中では正六角形建物、総柱建物、2棟1単位の側柱建物・間仕切りのある建物、廃棄土壌との切り合いと重複関係が、建物群の時期変遷を復元する上で重要な点と考えられる。

以下では、各遺構の具体的な切り合い関係は挿表14・15に示し、建物の時期区分について、問題となった事例について説明する。

### (2) 正六角形建物

①A型正六角形建物3棟が確認されており、SB-114とSB-115は重複している。SB-1とSB-115は主軸方向が同じであり、SB-114はこれらより主軸方向が79°ずれている。位置関係からもSB-1とSB-115が同時に構築され、後にSB-115がSB-114に建て替えられたものと考えられる。

出土遺物に関しては、SB-1からは須恵器無台坏3が出土しており、1期に遡ることはなく、2期あるいは3期と考えられる。

挿表14 遺構切り合い関係表-1

旧遺構種類	旧遺構番号	時期	新遺構種類	新遺構番号	時期	断面図	平面図	備考
SK	36		SB	65	3		○	
SK	36		SB	79	4		○	
SK	57		SB	60	5		○	
SB	8	1	SK	38	1		○	
SB	53	1	SB	56	1		○	
SK	87	1	SB	6	1		○	
SK	97	1	SB	32	1		○	
SB	10	1	SB	10	2	○		10A(2期)、10B(1期)
SB	77	1	SB	17	2	○		
SB	80	1	SB	18	2	○		
SB	98	1	SB	30	2		○	
SB	7	1	SB	137	3	○		
SB	29	1	SB	28	3		○	
SB	46	1	SB	44	3		○	
SB	53	1	SB	90	4		○	
SB	5	1	SB	94	9	○		
SB	32	2	SK	89	2		○	
SB	1	2	SB	19	3	○		
SB	17	2	SB	64	3	○		
SB	18	2	SB	65	3	○		
SB	41	2	SB	40	3	○		
SB	42	2	SB	96	3		○	
SB	58	2	SB	59	3	○		
SB	93	2	SB	28	3		○	
SK	20	2	SB	117	3		○	
SK	22	2	SB	16	3		○	
SK	67	2	SB	54	3		○	
SK	84	2	SB	89	3		○	
SX	2	2	SB	61	3		○	
SB	30	2	SB	31	4		○	
SB	33	2	SB	82	4		○	
SB	42	2	SB	95	4	○		
SB	69	2	SB	66	4	○		
SB	58	2	SB	60	5	○		
SK	67	2	SB	57	6		○	
SK	84	2	SB	57	6		○	
SX	2	2	SB	87	6		○	
SB	26	3	SB	39	4	○		
SB	28	3	SB	27	4	○		
SB	36	3	SB	35	4		○	SK-120とSB-36の柱穴との切り合い。

挿表15 遺構切り合い関係表-2

旧遺構種類	旧遺構番号	時期	新遺構種類	新遺構番号	時期	断面図	平面図	備考
SB	52	3	SB	31	4	○		
SB	68	3	SB	66	4	○		
SK	64	3	SB	89	6		○	
SK	66	3	SB	57	6		○	
SK	66	3	SB	89	6		○	
SK	88	3	SB	94	9		○	
SK	90	3	SB	62	5		○	
SK	94	3	SB	85	5		○	
SK	100	3	SB	88	5		○	
SK	120	3	SB	36	3		○	
SK	123	3	SB	85	5		○	
SB	31	4	SB	97	5	○		
SB	39	4	SB	94	9	○		
SK	105	5	SB	92	6		○	
SK	99	6	SB	89	6		○	
SK	16	9	SB	129	9		○	
SK	16	9	SB	130	9		○	

②B型正六角形建物は2棟確認されており、両者は主軸方向が79°ずれている。これはSB-1とSB-114との関係と同じである。

出土遺物に関しては、SB-3からは高盤が出土しており、1期に遡ることはなく、2期あるいは3期と考えられる。

③SB-1はSB-19と切り合っており、SB-1の方が古い。SB-19からは高盤4が出土しており4期と考えられ、切り合い関係と矛盾しない。

④正六角形建物の主軸方向はA型のSB-114とB型のSB-2が同じであり、北西隅にある3棟の正六角形建物はSB-115→SB-114→SB-2へと建て替えられた可能性が高い。

### (3) 総柱建物群

①SB-8とSK-38は切り合っており、SK-38の土壌底部でSB-8の掘方が確認された。SK-38は土師器甕・遠江型1・須恵器・無台坏1・坏蓋3が出土しており、坏蓋の重ね焼きはすべてI類であり、1期の基準遺構である。このことにより、軒を揃えて並ぶSB-5～10BはSK-38より古く、1期でも古い一群の遺構と考えられる。

②西側の2列の総柱建物群はA・B兩型式の正六角形建物と対応して時期差になる可能性が高い。この場合、SB-14・15・16はSB-2と対応して3期、SB-12・13・17・81はSB-115と対応して2期になる可能性が高い。

- ③SB-5は南側に建て増しされており、SB-5Aが1期であるので、SB-5Bは2期になる可能性が高い。SB-5Bの東側に隣接するSB-4・38はちょうど1間づつ南側にずれており、SB-5Bと対応して同時存在していた可能性が高い。
- ④SB-10は同一場所での建て替えであり、外側の掘方の中にやや小型で浅い掘方があり、二重になっていた(第21図)。二つの建物は連続した時期のものであり、SB-10Bを1期とすると、SB-10Aは2期になる可能性が高い。

#### (4) 2棟1単位の建物

2棟1単位あるいは3棟1単位と考えられる建物が複数確認された。

##### ①SB-41~43(2期)

この3棟は南側の軒を揃えて建てられている。総柱建物であるSB-12の南側の軒とも揃っており、建物間の間隔も類似している。これらの建物群はSB-12~17の総柱建物群とほぼ直角方向にL字状に同時存在していた可能性が高い。

##### ②SB-44・96(3期)

この2棟は南側の軒を揃えて建てられており、梁間の間隔もほぼ同じである。しかし、かなり近接しており同時に存在したとするよりも同様な機能を持った建物の建て替えの可能性が高い。

##### ③SB-26・40(3期)

この2棟は軒は揃っていないが、SB-44・96の東側で同じ様な位置関係のところであり、関連が強いと考えられる。この2棟もかなり近接しており、同時に存在したとするよりも同様な機能を持った建物の建て替えの可能性が高い。

##### ④SB-28・52(3期)

この2棟は間仕切りのある建物で南側の軒を揃えて建てられている。両者の間は約8m離れており、構造が似ていることから同じ様な機能を持った建物であったと考えられる。

##### ⑤SB-27・31(4期)

この2棟は間仕切りのある建物で南側の軒を揃えて建てられている。両者の間は約10m離れており、構造が似ていることから同じ様な機能を持った建物であったと考えられる。SB-28・52(3期)に重なってほぼ同じ位置にあり、この2棟から建て替えられたものと考えられる。

##### ⑥SB-33・34(2期)

この2棟は間仕切りがある大型の建物で主軸方向が直角になっている。出土遺物からは2期の可能性が高い。SB-34の西辺はSB-61・58・91の西辺とほぼ揃っており、同時存在していた可能性が高い。



## 4. 各時期の遺構

掘立柱建物や土塙等が実際に存続した期間は本来各遺構ごとに異なったものである。ここで時期区分を行った1～9期は土器編年を基本にしたものであり、実際には二つの時期にまたがって存在した建物も当然あったことが考えられる。又、同一時期の遺構でも重なっているものがあり、必ずしも各時期に含まれる遺構の全てが同時に存在したのではない。しかし、各遺構ごとの存続期間を明らかにすることは極めて困難であり、現状ではほとんど不可能に近い。

そこで各時期に含まれる遺構は当該時期の幅内において存在していたとして、各時期における遺構全体の構成や各時期間の遺構変遷について具体的に検討する。

### A. 1期（押図26）

1期は東西約60m、南北約80mの範囲に建物が集中している。掘立柱建物の種類は総柱建物（6棟）、間仕切り建物（2棟）、庇付建物（1棟）、側柱建物（7棟）の計16棟である。この範囲外には、東に約50mのところ（Z-9～12区）に竪穴住居であるSB-134・135があるがこれ以外には遺構は見られない。建物の総数は竪穴住居（2棟）を含めて合計18棟である（挿表16・17）。

1期の建物群の特徴は北辺に倉庫と考えられる総柱建物が並ぶ点である。総柱建物は6棟（SB-5A・6・7・8・9・10B）が確認されているが、この総柱建物群の南側には東西棟5棟（SB-29・46・53・56・98）、南北棟1棟（SB-24）があり、やや間隔を開けてさらにその南側には南北棟4棟（SB-32・77・80・83）が一定の距離をおいて配置されている。しかし、建物の軒や主軸を揃えて配置したものではなく、規格性も乏しい。これらの中では、中央に間仕切りがあるSB-29と西側に庇があるSB-32が規模も大きく中心的な建物である。古代の建物では庇付の建物はSB-32のみであり、他の建物とは異なった特別な機能を持ったものと考えられる。

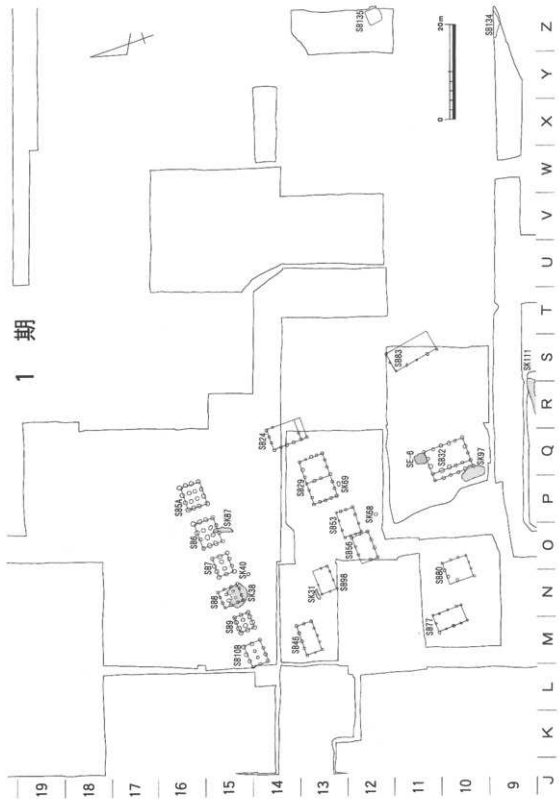
SE-6とSK-97はSB-32と重なっており、SB-53とSB-56は近接しているので同時に存在することはないが、前後関係等の詳細は不明である。

総柱建物群は南側の軒が揃っているが、建物の規格は不揃いである。しかし、梁間の長さに注目すれば、SB-5AとSB-6、SB-7とSB-9、SB-8とSB-10Bは近似しており（第1表）、2棟が一つの単位となる可能性が指摘できる。

建物群の南端にあるSK-111は東西方向にはほぼ直線状に伸びる溝であり、建物群を区画するものとなる可能性もあるが、今回の報告の範囲には含まれていないため、次回の報告（第2分冊）で詳しく検討する予定である。

また、SK-38はSB-8の廃絶後に造られており、1期の遺構の中でも最も新しい遺構と考えられる。これは、次の2期の建物群の構築のために行われた何らかの作業に伴ったものである可能性もある。

1 期



挿図26 1期遺構配置圖 (1/800)

挿表16 時間別建物数一覧表

建 物	時 期									合 計
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	
正六角形建物		3	2							5
総柱建物	6	11	10					3	2	32
間仕切り建物	2	5	3	3	1		1			15
庇付建物	1							1		2
側柱建物	7	11	15	7	7	4	5	13	12	81
竪穴住居	2	1	1							4
合 計	18	31	31	10	8	4	6	17	14	139

挿表17 規模別掘立柱建物数一覧表

A：正六角形建物

型式	A	B	小計
	型	型	
時 期	1		
	2	3	3
	3		2
	4		
	5		
	6		
	7		
	8		
	9		
合 計	3	2	5

B：総柱建物

桁行数	6	6	4	3	3	3	?	?	小計	
	梁間数	4	3	?	3	2	?	3		?
時 期	1			3	3				6	
	2	1	1		3	3	1	1	11	
	3				4	5		1	10	
	4								0	
	5								0	
	6								0	
	7								0	
	8						1	1	1	3
	9				2					2
合 計	1	1	2	10	12	2	3	1	32	

C：間仕切り建物

桁行数	9	8	6	6	6	6	5	5	5	4	3	?	小計	
梁間数	3	3	5	4	3	2	3	2	?	2	2	?		
時	1			1		1							2	
	2	1	1	1						1	1		5	
	3				2					1			3	
	4						1	1	1				3	
	5											1	1	
期	6												?	
	7									1			1	
	8												0	
	9												0	
合計	1	1	1	1	1	2	0	2	1	1	2	1	2	15

D：庇付建物

桁行数	5	3	小計
梁間数	4	3	
時	1	1	1
	2		
	3		
	4		
	5		
期	6		
	7		
	8	1	1
	9		
合計	1	1	2

E：側柱建物

桁行数	6	5	5	4	4	4	4	3	3	3	3	2	1	1	?	?	?	小計	
梁間数	3	3	2	3	2	1	?	3	2	1	?	2	3	2	3	1	?		
時	1				2			2	2								1	7	
	2	3		3					3								2	11	
	3	1	2		2	1			5						1		3	15	
	4		1			2				1				1	1			1	7
	5		1	1		1		1	1	2									7
	6			1	1					1				1					4
期	7					1			1	1	1				1			5	
	8				1		1		5	1	3	1					1	13	
	9						2		5	2		1				1	1	12	
合計	1	7	2	6	7	1	4	3	25	4	4	3	1	1	2	1	9	81	

## B. 2期(挿図27)

2期は東西約100m、南北約110mの範囲に建物が集中している。建物の種類は正六角形建物(3棟)、総柱建物(11棟)、間仕切り建物(5棟)、側柱建物(11棟)である。この範囲をやや外れて東に約30mのところ(Y~Z-12~14区)に総柱建物のSB-121と側柱建物のSB-126がある。また、P-15区には竪穴住居であるSB-136があり、建物の総数は合計31棟になる(挿表16・17)。

2期の建物群の特徴は正六角形の掘立柱建物が造られたことである。正六角形建物はA型が3棟(SB-1・114・115)確認されているが、同時に存在したのは2棟(SB-1・115)で、これを北側の頂点として南に南北棟が直線状に連なっている。

総柱建物は11棟(SB-4・5B・10A・12・13・17・18・21・81・91・121)が確認されているが、特にSB-115の南側に連なるのは南北棟の総柱建物で倉庫と推定される建物群である。SB-81とSB-13の間の未調査区にはもう1棟の総柱建物が想定でき、5棟が南北に直線的に並んでいた可能性が高い。またSB-115の東側にはSB-10A、この東側の延長線上にはSB-5Bがあり、この両者の間の総柱建物の一部は2期まで存続していた可能性も考えられる。総柱建物群は1期から引き続いて存続するもの以外に正六角形建物であるSB-115の南側に新たに配置されている。

SB-41~43は総柱建物であるSB-12の東側にあり、南側の軒を描いて直線的に並び、総柱建物群とはほぼ直角に配置されている。この3棟は側柱建物であるが、位置関係の点では総柱建物と関係が深く、同様に倉庫としての機能を想定できる。この場合、両者の構造の違いから総柱建物とは異なった機能を持った倉庫であったと考えられる。また、この3棟はほぼ等間隔で並んでいるが、規格がまちまちであり、位置的には西側から順次造られていった可能性もある。

前述したようにSB-36とSK-109・121は一体のものであり、SB-36からSB-35に建て替えられていると考えられる。またこの北側にはSB-20・21の2棟の総柱建物があり、位置的にはSB-35・36に対応すると考えられる。出土遺物の点でははっきりしないが、建物の規模からSB-36にはSB-21が、SB-35にはSB-20が対応すると考えられ、住居と考えられる側柱建物と廃棄土塊、さらに倉庫である総柱建物が併い3者で一つの単位を構成している。

SB-1を北側の頂点として、約30m南側にはSB-58・91の2棟の南北棟の側柱建物が並んでいる。SB-58の南側約25mのところにはSB-34があり、これら3棟の建物は西側の軒を描いて配置されている。SB-34の東約10mのところにはほぼ同じ構造をもったSB-33が直角方向に配置されている。SB-33の北側は未調査区ではっきりしないが、これと軒を描いた建物が続く可能性も十分想定できる。この部分の建物はコの字形に配置されていると考えられ、これらに囲まれた内部には建物が見られない。

建物群の南端には大型の井戸が築かれている。このSE-2は6期の遺物が出土しているが、他に古代の井戸が確認できないところから築造時期は少なくとも2期までは遡る可能性が考え



られる。また、1期の井戸であるSE-6はSB-32と重なっており、両者が同時に存在していないことから、SE-2がさらに1期にまで遡る可能性もある。

廃棄土壌は3ヶ所に分布の片寄りが見られる。第1群は建物群の北東にあるSK-124~127、SK-109・121、第2群は中央にあるSK-89・92・67・84、SX-2、第3群は南西部分にあるSK-37・42・43である。このうちSX-2は整地層と考えられる堆積が見られ、大型の須恵器環と坯蓋が埋納された状態で出土している。このことから、SX-2は周辺の建物の改築を意図した規模の大きな土工の痕跡と考えられ、2期の終わり頃に3期の建物を築造することを目的に行われたものと考えられる。

2期の建物はいくつかの性格の異なった建物群で構成されている。全ての建物の機能が明らかになったわけではないが、一定の規則性をもって配置されたと考えられる建物群の構造についてまとめると以下ようになる。

- (1) 倉庫と推定できる建物はその構造と配置から3群に分類できる。第1は正六角形建物、第2は西辺の総柱建物、第3は総柱建物と直角に配置され、東西に並んでいる側柱建物である。
- (2) 建物群中央の側柱建物は南北棟をコの字形に配列しており、内部は空間になっている。
- (3) 建物群の北東には側柱建物、総柱建物、廃棄土壌が組合わさって生活色の強い一連の建物があり、何らかの1単位が存在したことを示している。
- (4) 心部の建物群とやや離れたY~Z-12~14区に総柱建物のSB-121と側柱建物のSB-126があり、性格の異なる建物群の可能性がある。

### C. 3期 (挿図28)

3期も2期とほぼ同じ規模の東西約90m、南北約110mの範囲に建物が集中している。建物の種類は正六角形建物(2棟)、総柱建物(10棟)、間仕切り建物(3棟)、側柱建物(15棟)である。建物群の中央北側のO-15区には竪穴住居であるSB-137があり、建物の総数は合計31棟になる(挿表16・17)。

3期の建物群は基本的に2期と同様の建物配置と構造をもっているが、細部で異なっている点も指摘できる。

正六角形建物はB型が2棟(SB-2・3)確認されている。正六角形建物は2期のA型の建物の南西側に近接する位置に建て替えられており、小型化して建物の構造はやや異なっているが、同じ機能を持ったものと考えられる。また2期と同様にSB-2を北側の頂点として南に総柱建物が東側の軒を描いて直線状に連なっている。また、SB-2の東側には総柱建物であるSB-45があり、2期におけるSB-115とSB-10Aと同じ位置関係にある。しかし、SB-3の南側には2期に見られたように主軸をほぼ揃えた南北棟が直線的に並ぶことはない。

総柱建物は10棟(SB-11・14・15・16・19・20・45・116・117・122)が確認されているが、特にSB-2の南側に連なるのは南北棟の総柱建物で倉庫と推定される建物群である。この他の総柱建物のうちやや離れたSB-20・122以外は正六角形建物の北東側に接するよ





うな位置に見られ、正六角形建物に付随する何らかの機能を有していたと考えられる。

正六角形建物であるSB-3の南側には側柱建物と間仕切り建物で2棟1単位のものが2つ(SB-44・96、SB-26・40)並んでいる。2期で見られたように、総柱建物と直角方向の位置ではなく、単独に2つの単位があると考えられる。また、この建物の南側約10mには間仕切りのある東西棟の大型建物が東西に2棟並んでおり、2棟1単位の側柱建物と対応するようである。2棟1単位の建物は同時存在ではなく建て替えの可能性が高く、機能的には間仕切りのある大型建物1棟と側柱建物1棟が組合わさった2単位が同時存在していたと考えられる。この場合、両者の構造の違いから総柱建物とは異なった機能を持った倉庫であったと考えられ、市道遺跡には構造と機能を異にした複数の倉庫が存在していたことを示している。

前述したようにSB-35とSK-120は一体のものでSB-20と対応し、住居と考えられる側柱建物と廃棄土壌に倉庫である総柱建物が伴い3者で一つの単位を構成している。

建物群南半に集中している側柱建物群では、2期に見られた位置ではコの字形構造は不明瞭になる。この部分は南北棟と東西棟が入り乱れ不規則な配置を取っていると考えられるが、やはり中央部には廃棄土壌が集中しており(SK-90・93・94・118等)、一定の空白地が存在したようである。一方2期では不明瞭であった方形の区画がN~P-10~13区に見られる。この方形区画はSB-52を北側の頂点としてSB-54・59・64・65で構成される。一部に未調査区もあるが、内部には建物は見られない。

建物群の南端には大型の井戸が築かれている。このSE-2以外には他に古代の井戸は確認できない。

建物群の南端にあるSK-112は東西方向にはほぼ直線状に延びる溝の可能性があり、建物群を区画するものとなる可能性もあるが、今回の報告の範囲には含まれていないため、次回の報告(第2分冊)で詳しく検討する予定である。

廃棄土壌はほとんど中央部に集中しており、周辺には散発的に見られるのみである。

3期の建物は2期と同様にいくつかの性格の異なった建物群で構成されている。全ての建物の機能が明らかになったわけではないが、一定の規則性をもって配置されたと考えられる建物群の構造についてまとめると以下ようになる。

- (1) 倉庫と推定できる建物はその構造と配置から5群に分類できる。第1は正六角形建物、第2は西辺に並んでいる総柱建物、第3は正六角形建物の北東側に隣接する総柱建物、第4は正六角形建物SB-3の南側にある2棟1単位の東西に並んでいる側柱建物、第5はさらにその南側の間仕切りのある大型建物である。倉庫群は構造的には3種、位置関係からは5群に細分することができる。
- (2) 建物群中央の側柱建物は西側に方形区画があり、東側では東西棟を中心として、中心近くに廃棄土壌が集中している。
- (3) 建物群の北東には側柱建物、総柱建物、廃棄土壌が組合わさって生活色の強い一連の建物があり、何らかの1単位が存在したことを示している。

#### D. 4期 (押図29)

4期は東西約70m、南北約50mの範囲に建物が集中している。建物の種類は間仕切り建物(3棟)、側柱建物(7棟)であり、建物の総数は合計10棟になる(挿表16・17)。

4期の建物群の特徴は建物の種類が減り、棟数が激減することである。1～3期に見られた総柱建物と正六角形建物は姿を消し、間仕切り建物と側柱建物のみの構成となる。

これらの建物群の中で特徴的なものは、SB-27・31の2棟の間仕切り建物である。この両者は3期のSB-28・52の建て直しと考えられ、ほぼ同じ位置で規模をやや小さくして建て直されている。また、SB-27・31の北側にあるSB-39・95は東西棟と南北棟で建物の主軸は一致しないが、SB-28・52の北側にあった2棟1単位の側柱建物と同様な位置にあり、同じ様な性格の建物と推定できる。

これらの建物群の南側には側柱建物が散在しているが、東西棟を中心として一定の間をおいて建てられていること以外には特徴となるものはない。また、廃棄土壌も小規模なものが散在的にあり、建物の量的変化と対応している。

建物群の南端の井戸は3期から引き続いてSE-6が利用されていたと考えられる。

4期の建物はいくつかの性格の異なった建物群で構成されている。全ての建物の機能が明らかになったわけではないが、一定の規則性をもって配置されたと考えられる建物群の構造についてまとめると以下ようになる。

- (1) 倉庫と推定できる建物は2種類で2群に分類できる。第1は間仕切りのある建物で、2棟が東西に並んでいる。第2はその北側にある側柱建物である。この異なった構造の建物はそれぞれが合わさって2群が想定できる。4期の倉庫は3期に見られた多種類かつ多量の倉庫群の中の一部の機能を継承するのみであり、倉庫としての性格はかなり変貌したものと考えられる。
- (2) 側柱建物は一定の間隔で東西棟が散在している。
- (3) 2・3期に中心部の建物群とはやや離れて北東側や東側にあった建物は全く見られない。

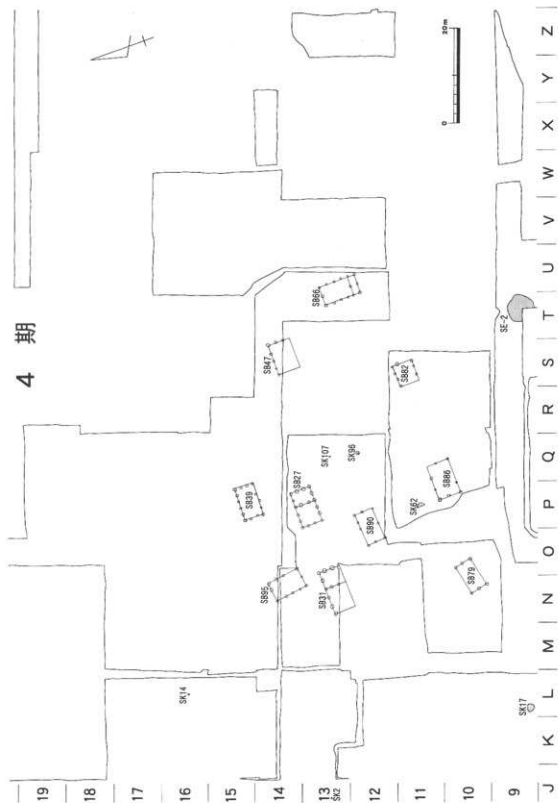
#### E. 5期 (押図30)

5期は東西約60m、南北約50mの範囲に建物が集中している。建物の種類は間仕切り建物(1棟)、側柱建物(7棟)であり、建物の総数は合計8棟になる(挿表16・17)。

5期の建物群は4期をほぼ引き継いでおり、建物の種類と棟数は少ない。4期ではかろうじて確認できた北側の倉庫もはっきりしなくなり、間仕切り建物1棟以外は側柱建物のみの構成となる。

4期において掘立柱建物群の北側で間仕切り建物と側柱建物が合わさった倉庫と推定された位置には、SB-51・97の2棟の側柱建物がある。この両者と南側の側柱建物群との間には15mほどの空間があり、これが倉庫と住居との緩衝地帯だとすれば、4期と同様に倉庫としての機能を持ったものであった可能性がある。これらの建物群の南側には側柱建物が集中しているが、東西棟と南北棟が入り乱れているようであり、一定の規則性は想定できない。また、廃

# 4 期



挿図29 4期遺構配置図(1/800)



棄土壌も小規模なものが散在的にあり、4期と同様な傾向にある。

建物群の南端の井戸は4期から引き続いてSE-6が利用されていたと考えられる。

5期の建物は、北側の2棟が4期から引き続いて倉庫としての機能を持っていた可能性があるが、建物群全体の構成は4期よりもさらに規則性が低い。5期の建物配置の特徴を示せば以下ようになる。

- (1) 倉庫の可能性のある建物は2棟(SB-51・97)があるが、構造や規模の点では他の側柱建物との差は明瞭でない。
- (2) 側柱建物は東西棟と南北棟が集中しており、廃棄土壌の位置とも対応している。

#### F. 6期(挿図31)

6期は側柱建物が4棟あるだけである(挿表16・17)。北側に見られた倉庫群もなくなり、遺跡の性格が変容したものと考えられる。しかし、これらの建物がある位置は1～5期において側柱建物群が集中していた中心地であり、市道遺跡においてはここが生活の中心として長く続いたものと考えられる。

6期の建物は、東西棟のみの構成であるが中央には廃棄土壌が見られ、これまでと同じ様な対応関係にある。

大型の井戸であるSE-6はこの時期に廃棄されている。SE-6は最下部に井筒が僅かに遺存していたが、大きく掘り取られた跡があり、遺跡が廃棄される時点で井筒が抜き取られて再利用されたと考えられる。6期において市道遺跡は一時的に断絶している可能性が高い。

#### G. 7期(挿図32)

7期はこれまで市道遺跡の中心地であった場所には建物が見られず、周辺地に散在的に建物が見られるようになる。建物は全体に散らばるのではなく、3ヶ所に分散している。建物の種類は間仕切り建物(1棟)、側柱建物(5棟)であり、建物の総数は合計6棟になる(挿表16・17)。

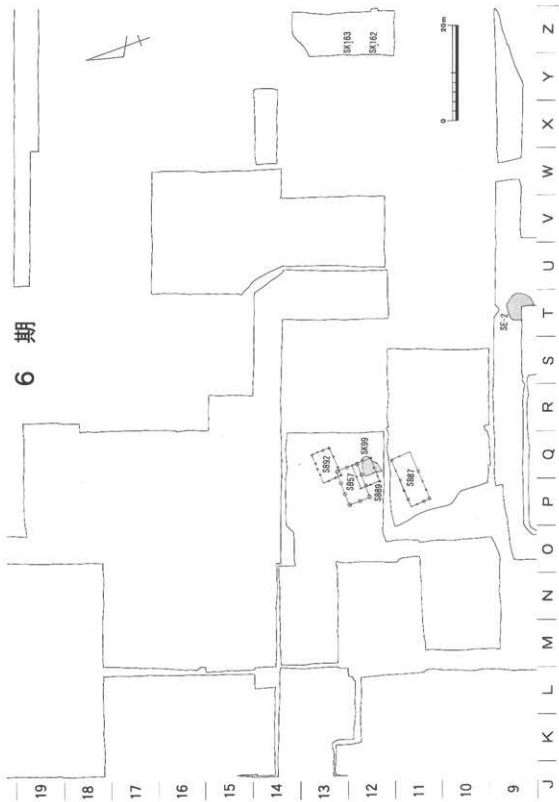
建物は①SB-37・119、②SB-102・103・110、③SB-70の3群があり、各々約70mほど離れている。SB-37とSB-70の間には大型の井戸(SE-3)があり、この周囲には建物は見られないので、①～③の建物群が共有していたものと考えられる。建物の主軸はほぼ東西南北を向いており、SB-70がやや東に傾いている。

7期には1～6期のような大型の廃棄土壌は見られず、小さな土壌が散在的に存在している。このような傾向は7～9期の全てに見られるところから、基本的な生活形態が古代的なものから中世的なものへ変化したものと考えられる。

#### H. 8期(挿図33)

8期は7期の建物配置を踏襲してさらに建物が増加している。建物群は7期に見られた場所を踏襲した①SB-99・118、②SB-104・106・107・109、③SB-71・74・75の3ヶ所の

6 期



挿図31 6期遺構配置図(1/800)

外に④SB-22・111・112、⑤SB-78・100・127・128、やや離れて⑥SB-124の3ヶ所が新たに加わり、6ヶ所で建物の集中が見られる。これらの建物群は各々約60mほど離れている。

建物の種類は総柱建物（3棟）、庇付建物（1棟）、側柱建物（13棟）であり、建物の総数は合計17棟になる（挿表16・17）。

8期の建物群の特徴的な点は、総柱建物の出現と特殊形態の遺構（SX-1）の存在である。総柱建物はSB-22・124の2棟であるが、いずれも全形が明かでなく規模も不明である。しかし、両者は120m程離れており、1～3期に見られたように集中することはなく、各建物群に個別に伴うようである。これに対し井戸は北側にあるSB-22・111・112に伴って小型で浅いものが1基認められるが、各建物群の全てに伴うのではなく、中心部にあるSE-3を共有しているようである。

SX-1は9字状の溝であり、埋土中にはハマグリが廃棄されている部分があり、掘り直しが確認されている。SX-1の北と南の両側には建物と土壌が集中しており、SX-1を中心とした何らかの単位が想定できる。

## I. 9期（挿図34）

9期は8期の建物配置を踏襲しているが、建物配置に変化が見られる。建物群は8期に見られた6ヶ所のうち、北側の一群が姿を消し、西側の建物群がやや散在的になる。②SB-76・101・105・108、③SB-72・73、⑥SB-125の3ヶ所はほぼこれまでの場所と同じであるが、⑤SB-113・129・130は8期の建物集中範囲のうち南西側に集中している。また、①SB-120・132・131・94の4棟はやや散在しており、西と東の2群に分離される可能性もある。

建物の種類は総柱建物（2棟）、側柱建物（12棟）であり、建物の総数は合計14棟になる（挿表16・17）。

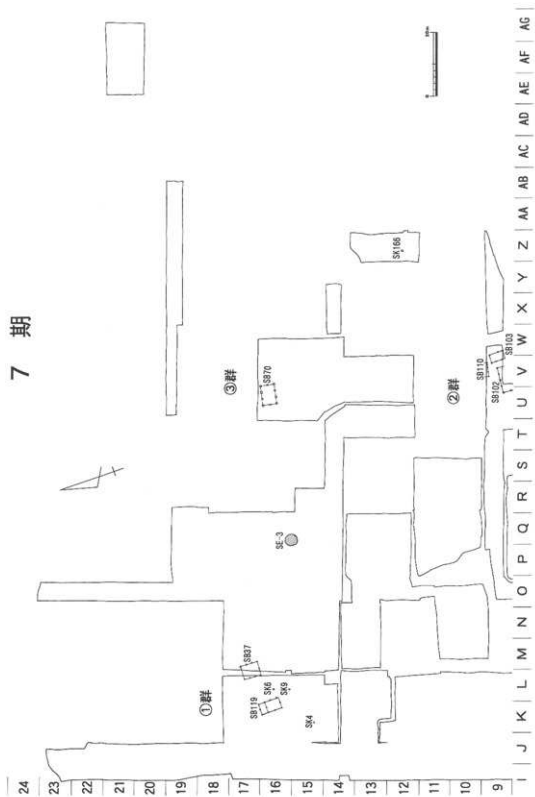
9期の建物群の特徴的な点は、建物がやや散在的になる点と小型の井戸がこれらに伴うように複数見られる点である。

7～9期の遺構は、今回報告する1～6期の古代の掘立柱建物群の範囲内だけでなく、第2分冊で報告する予定の南側の古代寺院址の範囲内あるいはその周辺地まで広範囲にわたって分散している。また、これらの建物群に伴うと考えられる溝も遺跡全体にわたって見られ、両者の関係を明らかにした上で遺構全体の評価をすることが必要である。そこで、溝の具体的な検討は第2分冊あるいは第3分冊で行うこととし、今回は建物配置の傾向のみを示した。全体の評価は今後の問題であるが、今回の分析で明らかになったことをまとめて今後の分析の問題提起としたい。

### （1）建物の分布

7～9期の建物群は3～6ヶ所ほど集中箇所が見られ、これらの場所は踏襲されてほぼ同じ場所に建て替えられる傾向にある。

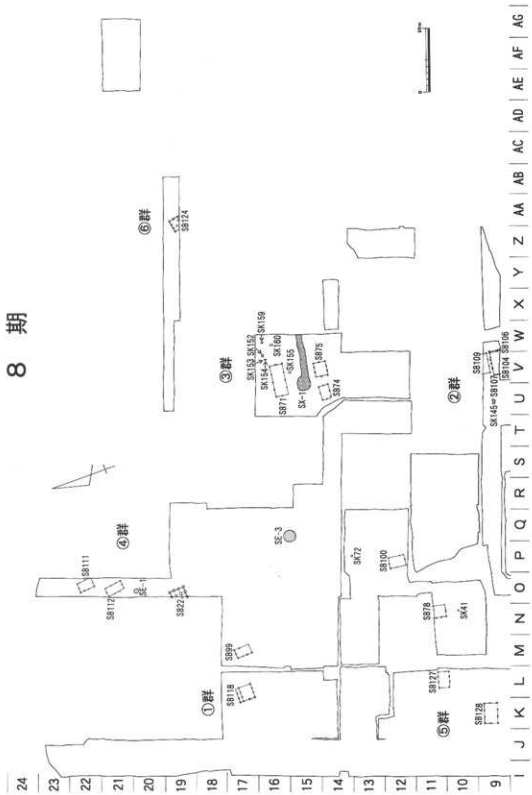
# 7 期



挿図32 7期遺構配置図 (1/1,200)

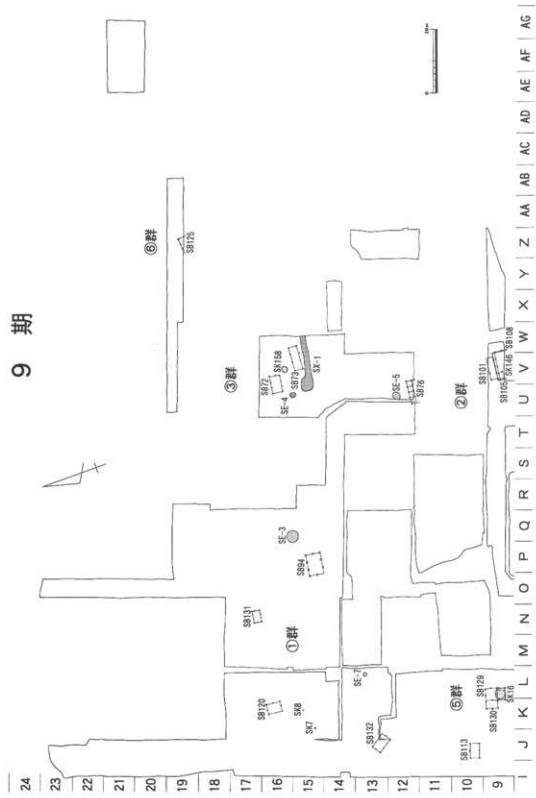


# 8 期



挿図33 8期遺構配置図 (1/1,200)

# 9 期



挿図34 9期遺構配置図 (1/1,200)

(2) 井戸は当初建物がない中央部分に各建物群共有と考えられる大型のものが1基(SE-3)見られるのみであるが、9期には小型ものが複数見られるようになる。これは建物群間の関係に変化が見られたことを示している可能性がある。

## 5. まとめ

今回報告した市道遺跡の北側掘立柱建物群は大きくは2時期の建物群に分類できる。1～6期の古代の建物群と7～9期中世の建物群である。この両者は建物配置や全体構成が基本的に異っており、全く性格を異にした建物群である。

南側の寺院址においても基本的に古代の建物と中世の建物が推定できており、大まかな時期変遷はほぼ対応している。しかし、寺院址の整理は現在進行中であり、分析は十分に進んでいない。そこで以下では古代と中世の2時期に分けて検討を行うことにする。

### A. 古代(1～6期)

古代においては、建物の棟数と構成に大きな違いが見られ、大きくは前期(1～3期)と後期(4～6期)に細分できる。

#### (1) 前期(1～3期)

前期では総柱建物群が東西に並ぶ1期と市道遺跡に特徴的な正六角形建物を含み多くの倉庫群が想定でき、ほとんど同じ構成をとる2・3期とに細分が可能である。

1期と2・3期では建物棟数はほぼ1.7倍違う(挿表18)が、建物の種類別構成比率ではほとんど違いが見られない(挿表19)。この点からは、1期と2・3期の遺構の性格に基本的な違いは見いだせない。

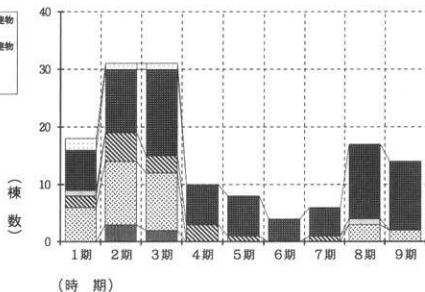
西暦年代との対比では、土器の分類と編年にやや問題が残るため細かな対比はできないが、1期の開始がほぼ8世紀初頭と考えられ、2期の開始が8世紀中頃と推定できる。この場合、2期の開始は国分寺の造営時期との関係が推定され、南側の寺院址の動向とどのように関係するかが問題となる。3期の終末はほぼ9世紀中頃と推定されるが、この頃を境に市道遺跡の建物群は棟数が激減し、種類別構成も大きく変化する。

#### (2) 後期(4～6期)

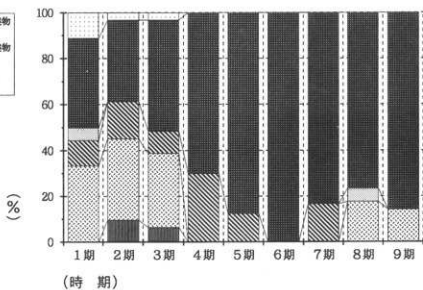
後期ではかろうじて北側に倉庫と推定できる建物がある4期と建物構成が単純で棟数も少ない5・6期に細分可能である。

4～6期は建物の種類別構成比率ではほとんど違いは見られない。また建物棟数では4期が11棟、5期が9棟、6期が4棟であるが、5・6期は存続期間が4期の2倍であるので、同じ時間幅内では5・6期はさらに建物棟数が急激に減っていると想定できる。

挿表18 建物時期別棟数一覧表



挿表19 建物時期別割合一覧表



西暦年代との対比では、4期がおよそ9世紀の後半にあたり、5期の開始が10世紀の初め頃と推定される。6期の終末は断続しているため良く分からないが、遺構の性格では、3期の建物配置の一部を踏襲する4期とこれとは全く異なる5期の間に画期が認められる。

## B. 中世（7～9期）

中世においては建物配置や棟数にはほとんど違いは見られない。古代の建物群とは異なり、3～6ヶ所ほどの建物が集中するところが指摘できるが、今回示した範囲だけではなく、南側の寺院址を含めたもっと大きな範囲を対象にした検討が必要である。

これまでの整理で、南側の寺院址では12～13世紀頃に金堂と講堂の跡地に長楕円形の溝が掘られ、建物が建てられていた可能性が推定できるようになった。古代の寺院廃絶後、中世になって小規模な何らかの宗教的施設の再建が考えられるが、この時期は市道遺跡の南側約100m程のところに、中世の豪族館と考えられる大規模な堀を伴った公文遺跡があり、ここの関係を検討した上で分析する必要がある。

今回の報告は事実資料の提示を課題としたため、十分に分析は行わなかったが、今後南側の寺院址の実体を明らかにした上で、遺跡全体の評価を行う予定である。

- 註1 城ヶ谷和広「古代尾張の土師器－6世紀後半から11世紀の様相－」『財団法人 愛知県埋蔵文化財センター年報平成2年度』1991年
- 註2 辰巳均「第8節 奈良時代の土器について」『下流遺跡』1985年 浜松市教育委員会
- 註3 北村和宏「尾張の「伊勢型鍋」『鍋と甕そのデザイン』第4回東海考古学フォーラム 1996年
- 註4 伊藤裕偉「中世南勢系の土師器に関する一試論」『Mie history』vol.1 1990年の第1段階b型式に相当すると考えられる。
- 註5 新田洋「平安時代～中世における煮炊具－「伊勢型鍋」－に関する若干の覚書『三重考古学研究』1 1985年の5類
- 註6 北野博司「古代の土器」『辰口西部遺跡群1』1988年 石川県埋蔵文化財センター
- 註7 藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要第3号』三重県埋蔵文化財センター 1994年
- 註8 猿投窯の編年は斎藤孝正「東海地方の施釉陶器生産－猿投窯を中心に－」『古代の土器研究－律令の土器様式の西・東3 施釉陶器－』1994年、湖西窯の編年は後藤健一「湖西古窯跡群の須恵器と窯構造」『静岡県窯業遺跡』1989年 静岡県教育委員会、中世陶器の分類と編年は註7による。